明治学院大学ボランティアセンター　2017 年度の活動

● 明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム

2 年目を迎え、学部学科のご協力のもと第 2 回インテグレーション講座を開催しました。学生のボランティア実践も着実に積みあがっています。

（詳しくは P17）

● 1 Day for Others

1 日社会貢献プログラム

昨年度に引き続き、春学期・秋学期の 2 期制を実施、延べ 762 名の明学生が参加しました。ボランティアポータルサイトの導入により、情報収集・エントリーがわかりやすく。学生自身の振り返りもポータルサイトで実施しました。

（詳しくは P22）

● 「Do for Smile@ 東日本」プロジェクト

学生セクション

大槌町、陸前高田二つのセクションは、合同スタディツアーという形でお互いの活動地を訪れ、町を知り、現地の方々と交流しました。自分の活動にフィードバックできるように、共通点や異なる点を考察しました。

（詳しくは P26）

明学・大槌町吉里吉里復興支援プログラム
陸前高田復興支援プログラム

東日本大震災復興支援活動。震災発生直後から延べ 1,800 名以上の学生が現地で活動しています。

● 明学レッドクロス

学生セクション

日本赤十字社とのボランティア・パートナーシップのもと、活動しています。新たな取り組みとして、日本赤十字社活動の歴史等を学ぶ本社見学会や、学生の献血を促進するため都内の魅力的な献血ルームを紹介するリーフレット作成、キャンパス近隣地域の防災炊き出し訓練への参加も実施しました。

（詳しくは P47）

● 地域活動

学生セクション

横浜地域活動／白金地域活動

キャンパス近隣の地域で、地域のみなさんと一緒に地域活性化に取り組んでいます。お祭りでは得意の子ども向けブース運営で、運動会では司会や競技のデモンストレーションで活躍。さまざまな世代の方々との交流が学生の学びにつながっています。

今年度は新たな取り組みとして、横浜市消防局横浜市民防災センターの「防災カフェまつり」に他セクションと共同で参加。子どもたちに楽しく防災を学んでもらうため、ブースにも工夫を凝らしました。

（詳しくは P53）

● 海外プログラム事業部

学生セクション

「Think globally, step forward ～世界を変える小さな一歩～」を理念に、「ジェンダー」「食糧」「格差」をテーマとした活動を実施しました。地域の子どもたちを対象としたワークショップ開催は初めての試みでしたが、自分たちの学んできたことをわかりやすく伝えるにはどうすればいいか、を考える機会となりました。

世界の子どもたちの命を救うワクチンを届けるため、大学内でペットボトルキャップの回収もおこなっています。

（詳しくは P63）

● MG パール

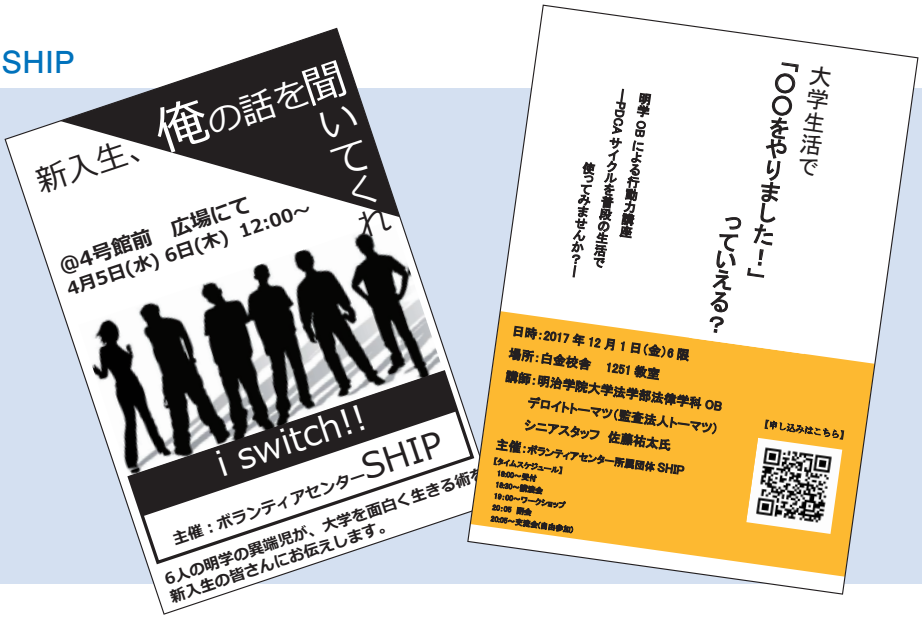
学生セクション

ボルネオ島に生息するオランウータンなどの希少動物を守るため、現地産の淡水パールでアクセサリーを手作りし、売り上げの半分を自然保護団体に寄付する活動を続けています。団体（特定非営利活動法人ボルネオ保全トラスト・ジャパン）の例会に出席し現地の状況を学んだり、フリーマーケットなどの販売の場で学んだことを伝えたりするなど、知識を還元していくことにも力を入れています。

（詳しくは P68）

● SHIP

学生セクション



新学期の新入生勧誘期間にボランティアセンター前でアクティブに活動している明学生にそれぞれの大学生活をプレゼンしてもらうなど、今年度も独自のイベントを企画・実施しました。

（詳しくは P71）

● 学生事務局

ボランティアセンター活動報告会の運営だけでなく、学生メンバー全体の活性化に取り組み、活発に活動しました。各セクションから事務局担当学生を選出することで、横の連携も強化。セクション協働企画も生まれました。堅苦しくならないようゲーム形式のグループワーク開催など随所に工夫をし、学生メンバー同士をつなぎ、センターがよりよい機能を果たせるように取り組みました。

（詳しくは P73）

目　次

学長挨拶 …… 1
ボランティアセンター長挨拶 …… 2

特　集

特集1　20周年を迎えるボランティアセンターの昨日から明日へ …… 5
特集2　明治学院大学と岩手県大槌町との協働・連携の未来に向けて …… 10
特集3　20周年を迎えるにあたって …… 11

Ⅰ. 2017年度活動報告

明治学院大学ボランティアセンター 学生メンバー組織図 …… 15
2017年度ボランティアセンター行事一覧 …… 16

1　明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム …… 17

2　1 Day for Others（1日社会貢献プログラム） …… 22

3　「Do for Smile@東日本」プロジェクト（東日本大震災復興支援） …… 26
3.1　明学・大槌町吉里吉里復興支援プログラム …… 26
吉里吉里学園中学部が修学旅行で明学を訪問
吉里吉里学園小学部運動会
スタディツアー
コラボ・スクール
学習支援
ふるさと科
吉里吉里大運動会
わんぱく広場（11月、2月）
学生による現地での自主活動（お祭りへの参加、きりっ子文化祭）
3.2　合同スタディツアー …… 36
3.3　陸前高田復興支援プログラム …… 38
横浜キャンパス防災訓練での防災講座
スタディツアー
「きらりんきっず」夕涼み会
けんか七夕
うごく七夕
たかた子どもキャンパス（11月、2月）
陸前高田グローバルキャンパス大学シンポジウム2018
3.4　大学間連携災害ボランティアネットワーク …… 46
仙台七夕まつり

4　明学レッドクロス（日本赤十字社とのボランティア・パートナーシップ） …… 47
日本赤十字社との協働「スマイルチルドレンプロジェクト」
献血ルーム紹介リーフレットの作成
港区高松地区防災炊き出し訓練
日本赤十字社本社見学
『RCV』（赤十字ボランティア情報誌）編集委員

5　地域活動（キャンパス周辺地域での活動）……53
5.1　横浜地域活動……53
とっとの芽（戸塚区地域子育て支援拠点）
ふれあいフリーマーケット
小田急分譲地自治会夏祭り
とつか宿場まつり
防災カフェまつり
5.2　白金地域活動……59
ふれあい運動会（白金小学校での地域運動会）
NEC 意見交換会
ワンパクまつり

6　海外プログラム事業部（国際協力、国際支援）……63
ペットボトルキャップ回収（5 月、10 月）
放課後大作戦
フードロス鬼ごっこ企画
ユニクロ衣料回収プロジェクト
GIRLS Book Fair in MGU

7　MG パール（環境）……68
オランウータンから学ぼう！ボルネオ島の環境問題

8　SHIP（Social Hub Information Partners）……71
i switch!! vol.4「新入生、俺の話を聞いてくれ」
SIA vol.8「明学 OB による行動力講座〜やりたいことを実現するきっかけを提供します〜」

9　学生事務局……73
横浜キャンパス防災訓練
学生メンバー全体勉強会
2017 年度ボランティアセンター活動報告会

10　他大学との交流（静岡県立大学ボランティアセンター構想フォーラム）……77

11　国際機関実務体験プログラム（育成・支援プログラム）……78

12　ボランティアファンド学生チャレンジ賞（育成・支援プログラム）……80
12.1　ボランティアファンド学生チャレンジ賞 2016 活動報告……80
12.2　ボランティアファンド学生チャレンジ賞 2017 採択団体一覧……89

13　Gakuvo Style Fund（育成・支援プログラム）……90

Ⅱ. 新入生アンケート
新入生のボランティア意識とセンターの課題……93

Ⅲ. ボランティアセンター資料
ボランティアセンターの活動にご協力くださった皆さま……99
2017 年度マスコミ報道一覧……99
各委員一覧……100
明治学院大学ボランティアセンター規程……101

学長挨拶　ボランティア活動の先にあるもの

明治学院大学は、ボランティア活動が活発であることが校風の一つとなっています。この校風は、学生の主体的意欲と教職員のサポートが基盤になっていると考えています。23年前に起きた阪神・淡路大震災のおりも、まず被災地に駆けつけたのは有志の学生であり、大学は彼らの活動サポートを契機にボランティアセンターを立ち上げていくことになりました。東日本大震災支援も学生とボランティアセンターの働きがさまざまな成果をあげてきています。その明治学院大学ボランティアセンターも2018年に設立20年を迎え、2018年度には、いくつかの記念企画が検討されています。また、白金キャンパスのボランティアセンターは10号館に移動し、より親しみやすい環境が整えられる予定になっています。

本学は10年後の「あるべき姿」を想像し、将来を見据える中長期計画を定めたMG Decade Visionを2015年度よりスタートしました。内容は多岐にわたりますが、そのなかで重点を置く三つの柱の一つとして「ボランティア活動の活性化」を掲げています。2016年度にスタートした「明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム」は、まさにビジョン実現の第一歩です。このプログラムでは、実際のボランティア活動、教養教育センターや各学部・学科が提供する科目、そしてインテグレーション講座という内容でボランティア活動と教育とが結び付けられるようになりました。プログラムには学部・学科を超えて、学生・院生・教職員が参画します。

ボランティア活動は、在学時代だけで終わるものではないでしょう。私のゼミの卒業生の一人は、卒業後社会人となっても在学時代のボランティアを継続していきました。もちろん、生活する環境が異なるわけですから、ボランティアを行う場所や内容が異なることもあるかもしれません。また、卒業時には継続、参画していなくても、時が経ち、機会を得て活動を再開するケースもあります。さらには、在学時代にはボランティア活動の経験がない方が活動に参加する可能性もあります。ボランティア活動を大学時代の「よき思い出」だけにしないことが標題の「ボランティア活動の先にあるもの」含意の一つになります。この報告書における活動に携わった方々が、在学中も卒業後も、活動で得た成果を本学にフィードバックしていただきたいと願っています。

標題の今一つの含意は、ボランティア活動によって多くの人々との関係が構築され、相互の交流のなかで多くの学びがあり、ボランティア活動をする者に大きな成長の糧を提供するということです。他者との関わりは、自分を問い直すことにもつながります。私も学生時代の子ども会活動を通じて、子どもやその家族たちから多くを学び、また自分のありようを問いかける質問やコメントを受け取りました。私自身がこの経験にどう向き合うことができたかは、自分だけでは評価しにくいもので、友人等の関係者に判断を委ねなければなりません。他者の存在をあるがままに受け止めることが、自己を認め、前向きな変容を成し遂げていくことに寄与するものと考えます。

ボランティアセンターが新たな地平に向けて、学生や院生とともに歩み始めるための振り返りと多くのヒントをこの報告書を通じて得られれば幸いです。学生たちの多様な活動を基盤としながら、ボランティアセンターが明治学院大学の基軸としての組織としてさらに活発な活動を展開していくことを期待しています。

2018年3月
学長　松原康雄

ボランティアセンター長挨拶
ボランティアセンターの今、これから
―「私たちのボランティアセンター」となるために―

スタッフ2名で阪神・淡路大震災の支援をきっかけにスタートしたボランティアセンターは、来年度で20周年を迎える。この20年でボランティアセンターは存続するだけでなく大きく成長した。今年度のセンタースタッフは15名、この一年何らかの形でボランティアセンターに関わった学生は報告書の延べ人数で1,500名を超えている。本報告書には、それらの学生の多種多様な活動の熱い記録がある。「日々自問自答」しながら、「私たちが地域のためにできることは何か」と悩み、自らの限界を知り、それを超えて「地域の人々と楽しみを共感する喜びを感じ」、「聞き手を意識した学びや発信の大切さに気づき」、新たな繋がりを得て逞しく成長する学生たち、それを見守り支え、ともに悩み成長するコーディネーターと職員の姿がある。他大学との交流、国際機関実務体験プログラムなどの関連した活動やボランティアファンド学生チャレンジ賞、Gakuvo Style Fundなどのボランティア活動を支える取り組みについても報告されている。ぜひ堪能していただきたい。

しかし、いかにこれらの活動が素晴らしくとも、ボランティアセンターがこのままでよいということではない。2016年度開始した明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラムは2年目を迎え、登録学生との関わり、学部学科との協働の難しさを痛感し、ショート講座の実施、サティフィケイトプログラムだよりの発行などさまざまな取り組みを行った。来年度（完成年度）の成果を見極め、さらなる変容を目指す必要があろう。1 Day for Others、「Do for Smile@東日本」プロジェクトなど、順調に進んできた活動も、改めてニーズを問い直し、リーダー学生の組織化を図るなど新たな動きを必要とした。

システム論では、システムが生き残ること、成長すること、変容することの三つがシステムのゴールとされる。個人、家族、チーム、大学などすべてのシステムはまず生き残り、発達段階にそって成長し、そして環境の変化に応じて変容することによってさらなる成長を遂げる。センターが目指す姿はどういうものなのか、そのためにどのように成長し変容していけるのか。全体研修を行いスタッフ全員で何度も問い直した。ボランティアセンターというシステムの一員として、どのようなチームを組んで何を目指すのか、学生とどのように関わるのが「適切」なのか、学生の自律性を育むとは。そもそも大学にボランティアセンターが在る意味は何なのか。全体研修の場だけでなく、日々の業務のなかでも熱く論じ合った。先達の少ない大学ボランティアセンターの先陣を切って突き進んで来た私たちが、改めて在り方、進むべき道を模索し、変容するための一年だったのだと思う。

システムの適切な変容のためには、境界の透過性を増し、より柔軟に開かれた組織となる必要がある。ボラセンの壁を作り「ボラセンの学生」を増やすのではなく、広く開かれた「学生のボラセン」となるにはどうしたらよいのか。センターを20年間維持し、その発展を支え続けたのは大学であると同時に、地域の方々、卒業生・修了生の皆さまである。願わくば、教職員、卒業生・修了生、地域の方々を含め、すべての方に開かれた組織としての「私たちのボランティアセンター」となるべく、その方策を具体的に検討することが今後の課題である。

この報告書を出発点として、2018年度、改めて、それらの方々との繋がりを再確認し、明治学院大学が「他者への貢献」を具現化する一つの形として、学生たちとともにボランティアセンターのこれまでとこれからを見据え、発信する年としたい。

2018年3月

ボランティアセンター長　杉山恵理子

特　集

特集１　20 周年を迎えるボランティアセンターの昨日から明日へ

2010 年 4 月から 2015 年 3 月までボランティアセンター長として「1 Day for Others」の立ち上げ、東日本大震災復興支援活動での陣頭指揮などに活躍され、2016 年 4 月から 2018 年 3 月までボランティアセンター運営委員を務められた原田勝広教養教育センター教授が、今年度をもって退任されます。

長きに亘りセンターの発展にご尽力された原田先生にこれまでを振り返っていただきました。

明治学院大学のボランティアセンターのことを知ったのは不思議な縁からである。日本経済新聞の特派員としてニューヨークで国連を担当した私は帰国後、編集委員として NPO,NGO、あるいは社会起業家を取材していたのだが、ドヤ街と呼ばれる労働者の簡易宿泊所、横浜・寿でドヤのおっちゃんやホームレスを支援している「さなぎ達」という NPO があることを知り現地を訪ねた。さなぎ達の代表をつとめていたのが谷津倉智子さんという若い女性で、本職が明学のボラセン・コーディネーターだった。2003 年というから 15 年も前のことである。彼女を通して明治学院大学のボランティアセンターの存在を知るとともに、その縁で、明学がソニーマーケティング㈱と共同で 2001 年から運営していたソニーマーケティング学生ボランティアファンドの審査委員長を引き受けることになった。その時、明学の副学長として審査委員だったのが後に学長になる鵜殿博喜さん。ソニーマーケティング側の代表が社長の宮下次衛さんで、現在、湘北短大の学長で、実は私は今、この短大の理事を務めている。

ここまででも十分、不思議な縁を感じるが、しばらくしてボラセンのセンター長だった故川俣優・教養教育センター教授から、白金祭で講演をしてほしいとの依頼を受けた。勇んで出かけたのはいいが、もう一人スピーカーがおり、それが当時、東大教授だった姜尚中さんだった。なぜか順番が姜さんが先で私が後。大教室は学生であふれ、ほぼ満席の状態だったが、姜教授の講演が終わると学生は一斉に立ち上がり、ぞろぞろと出ていってしまった。残ったのはほんの数人という惨状で、さすが有名人は違うと感心した（姜さんの講演はレポートが課されていたため、学生は必死で聞いていた、と後で知った）。観客の少なさを気の毒に思ったのか、川俣教授の推薦によりおよそふさわしくない私が明学で非常勤講師として教えることになったのだから、世の中わからないものである。2006 年のことである。

客員教授を経て 2010 年度からは専任の教授になった。忘れもしない春学期直前の 3 月、京浜急行に乗っていた私の携帯電話が突然鳴り出した。大学からで、ボランティアセンター長をやってくれという。あまりに急な話で戸惑いを感じた。案の定、予定していた候補者に断られたための窮余の一策であったらしい。ただ、私としては、ボランティアについては知識も経験もあったことから、ある意味、渡りに船で、喜んで引き受けることにした。ボラセンとの唐突な出合いであった。

明学のボラセンは、1995 年の阪神・淡路大震災の際、明学生が神戸の賀川記念館を拠点に被災地でボランティア活動に取り組んだことがきっかけになっている。ヘボン博士の教育理念である Do for Others（他者への貢献）の影響でボランティアが盛んな大学であったが、いち早く学内にボランティアセンターを設立するなど制度面でも先進的に動いていた。それだけに期待は大きかったが、実際に赴任してみると、多くの良い点がある半面、物足りないところもあった。

運営面でいうと、白金、横浜とキャンパスがわかれているため、両方のボラセンの連携が弱いことが大きな課題で、せっかく横浜でボランティアに関わっても 3 年生になって白金に行くと、そうした学生をうまく受け入れる態勢ができていなかった。ボランティア自体もやや内向きで、地域の中に籠って細々と活動している印象であった。ボランティアというのは社会にかかわり、社会を変えていく大きな可能

性を秘めており、困難な課題に取り組むことで自身も成長していくものである。従って、積極的に社会の中に入っていく必要がある。社会と没交渉のような状態でいいことをしていても意味がない。これは困ったと頭を抱えていたところ､米国からサービスラーニングの専門の先生が本学にやってきた｡確か、コーディネーターの紹介であったと思う｡私の問題意識を打ち明け､思い切って尋ねてみた｡米国では、ボランティアという形で社会にかかわるのにどんな方法をとっているのか、と。その先生はにっこり笑い、こんな答えを返してくれた。

「簡単なことよ。白いペンキと刷毛をもって街へ行き、芝生のところにはげた柵があったら、ペンキを塗りましょうかと声をかければ、そこに住んでいる人と会話が始まるわ」

まさに目からウロコであった。難しく考えるからいけないんだ。まず、1 日でいいから、街に出てみることから始めればいいんだ。いいアドバイスをもらったことで生まれたのが「1 Day for Others〜街へ出よう」である。地域にあるボランティア団体だけでなく、NPO,NGO,さらには社会起業家、そして企業まで枠を広げた｡利益を追求する企業とボランティアは関係ないのではと思った人もいたようだが、それは違う。ボランティアは無償で公益のために非営利活動する。NPO はそれを組織化した存在だが、私益のために営利活動をしている企業も、公益を意識した CSR（企業の社会的責任）活動に取り組むようになっているのが世界の潮流だ。ボランティアを狭い枠の中にとどめず、赤十字、国連、そして企業にまで広げたいと思った。キーワードはボランティア・スピリッツであり、社会課題の解決であった。

この 1 Day for Others は予想以上にうまく行き、ボランティアをしたいが何をしたらいいかわからないという学生に「初めの一歩」を提供することができた。今では毎年、70 プログラム、700 人ほどの参加者があるが、相手先と相談して、1 日だけでなく継続的に活動している学生も多いと聞く。

当時、私は神奈川県の依頼で社会貢献活動の委員をしていたが、主題は「NPO と行政の協力」で、企業のことは県のお役人もまったく念頭になかった。だから「これからは大学と NPO、企業の連携が必要な時代」とアドバイスしたが、理解されなかった。そういう中で明学生は企業の CSR を体験したのだから社会に対する目が開かれたと思う。国連が SDGs（持続可能な開発目標）で企業への期待感を表明したのはようやく 2015 年になってからであることを考えると、いかに斬新なプログラムだったかわかる。

私の夢について触れたい。参加学生を早く 1,000 人に持っていくことだ。数は力なりなので、そうすれば勢いが出る。そうしたら、学生だけでなく、先生方、職員にも参加してもらい、ボラセン主導ではなく、自分でボランティア先を開拓してもらえばいいと思う。年に 1 日、「1 Day for Others の日」を設定し、この日は授業はなしにして全学でボランティアに行くのである。教育効果は大きいし、社会的評価が上がるのは間違いない。受験生の間で人気が沸騰し、こういう大学の学生なら採用したいと考える企業も出てくると思う。

この 1 Day for Others 企画は他大学からも高く評価され、同様のイベントを実施しようと思うらしいが、今のところ追随する大学はない。アイデアには感動するが、実際にやってみると、ボランティア先の確保や、ボランティア当日の手配、学生指導、そのフォローアップなど複雑で困難な仕事が山ほどあるからだ。本学のボラセンの職員、コーディネーターは血のにじむような努力で、その苦労を乗り越えている。学生スタッフの協力が大きいことも論を待たない。これこそ明学の強みに違いない。

この 1 Day for Others が大学としての教育効果をあげ、ボラセンの発展に寄与したことは間違いないが、それと同じくらい、あるいは、それ以上に影響を受けたのが 2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災・津波である。もう 7 年もたつが、あの日のことは今も忘れないし、これからも一生記憶にとどまるだろう。多くの犠牲者を出し、未だ復興の途上にある東北のことを思うと胸が痛むが、あの悲劇にあった現地に明治学院大学が微力ながらも心からの支援を届けたという歴史は記憶されるべきだと思う。

地震が発生したあの日、真っ先に頭に浮かんだのは、ボラセンとして一刻も早く現地入りして支援を開始するにはどうしたらいいかということだった。私は海外で紛争や自然災害が起きた時、難民や被災者を支援する緊急人道支援組織「ジャパン・プラットフォーム」の理事をしており、現場の経験から、緊急時には早く現地に入ることが鉄則だということを知っていた。現場はそれを当然待っているし、支援する側も早い着手は活動の展開がスムーズにいき、継続性につながるからだ。ところが被災地は大混乱。学生が宿泊する場所どころか食べるものもないという情報が入ってきて二の足を踏んだ。支援を始めた知り合いの NGO に連絡をとったが、「まだ学生ボランティアが入れる状態ではない」という返事ばかり。そうこうして 10 日ほどたったころ、ニューヨークのユニセフ本部で働いている友人から電話が入った。国連機関であるユニセフは途上国支援を原則にしており、日本では伊勢湾台風の際に支援しただけであるが、今回の東日本大震災・津波では日本ユニセフ協会と一緒に支援活動を実施するという。友人はそのために来日したというわけだ。「学生のボランティアは必要では？」と聞くと、「そうなんだ。これから探さなくては」という返事。ボランティアに熱心な明治学院大学の学生を派遣すると約束したことは言うまでもない。

ところが難問が待っていた。ボラセンの学生スタッフに「東日本へ支援に行こう」と声をかけたが、皆、怖がってしまって、下を向くばかりである。阪神・淡路大震災をきっかけにできたボラセンだが、その後、緊急支援は経験がなく、津波の映像を見て足がすくんでしまったようだ。ところが救世主が現れた。途上国支援で鍛えられている学内の JUNKO Association と Habitat MGU の学生から是非支援に行きたいとの希望が寄せられたのである。彼らが先兵となって地平を開いてくれれば、後に続く学生も出てくるに違いないと大いに期待を抱かせたし、実際、その通りになったのである。

学生はそんな感じで、次々と集まってきた。一方、ボラセンの教職員は極めて保守的で対応に苦労した。半分の教職員は学生の派遣に賛成してくれたが、残りの半分は反対であった。前述した通り、支援は早期でないと意味がない。ユニセフと一緒に活動できることがはっきりし、積極的な学生も確保した以上、1 日も早く現地入りしたいと考えていたが、ボラセン内の抵抗も大変なものであった。彼らの主張は「余震があってボランティアの学生になにかあったらどうするのか」「原発事故で放射性物質が飛んでいる時に被害が出たらどうするのか」という声に集約される。万一、学生に何かあったら誰が責任を取るのか、という論理だては大学においてはかなり説得力を持つようだ。この一言で大抵の企画はつぶれてしまう。しかし、何事にもリスクはつきものである。リスクはあってもそれが社会的に意味のある行動なら、対応策をとりながら一歩踏み出す。何もしないのではなく、どうしたらできるのかを考える。それが一般社会では当然の行動である。

そこで知恵をしぼった。余震はあるに決まっているので、その場合の避難路を確保し事故を予防し、原発事故現場周辺には近づかない。それで、反対派を説得したが、最後に言ったのは、ボランティアセンターは何のために存在しているのかということである。ここで東日本に支援に行かないなら、ボラセンは存在する意味がないと言って説得した。

忘れられないのは当時の学長、大西晴樹さんの英断である。大西学長には「緊急時のボランティアだからさまざまな危険があるのは当然。それを恐れないでしっかり予防策をとり、現地に行ってほしい」と言っていただいた。大学というのは、さまざまな声に耳を傾け、失敗の怖れがないように慎重に判断することは得意であるが、その逆に、前例のない事態に直面するなかで、チャレンジングな課題に果敢に取り組むような決断をすることには躊躇する傾向がある。大事な息子さん、娘さんを預かっている教育機関として理解できる考え方には違いないが、それにあまりに固執すると判断を誤る。何もしないのがベストでは困るのである。先陣を切ってボランティアに参加した学生に「君たちは勇気ある決断をし

て参加してくれたが、親御さんは心配していないの？」と聞いてみた。その返事を思い出すと今も胸が熱くなる。「いま東北は大変な事態になっている。現地に行けるお前は幸せ者だ。親の分まで頑張ってきてくれ」。親にはそう励まされたという。

そんな経緯をへて、仙台入りしたのが４月４日であった。ユニセフ側が借りたマンションの一室（地震で水道が破壊され住人は避難）で寝泊まりし、シャワーはホテルで交代で使用しながら支援活動に取り組んだ。宮城県全域の避難所で子どもの心のケア、ストレス緩和の活動をする一方で、県庁、市町村の会議に出席して情報収集をし、文房具や学校用備品の供与など学校再開に向けた始業式のサポートを行った。合わせて、戸惑いの多かった現地の大学生をコーディネート、現地で出会った東北学院大学や宮城学院女子大学の学生 40 名と連携体制を構築した。

このプログラムが動いたことで、追いかけるように岩手県立大学や東北学院大学との協働プログラムも始動、明学の東日本大震災・津波支援「Do for Smile@東日本」が動き出した。学生のボランティアは大変な盛り上がりを見せ、これ以外にも日本財団学生ボランティアセンター、生活協同組合、日本赤十字などとの連携も実現した。

その後、活動拠点は岩手県陸前高田市、大槌町吉里吉里、宮城県気仙沼市と３か所で形を変えて展開、東日本の被災地支援は今も継続されている。大槌町での吉里吉里カルタ、陸前高田に東京の小学生を連れて行く「かわいい子には旅をさせよ」など印象的な企画も多い。やはり、早く現地に行ったことが、ボランティア・ニーズの把握やその後の活動の継続につながったのは間違いない。他の大学も頑張ったが、多くは夏休みに入ってから、早くてもゴールデンウィークだったことを考えると、明学の始動は全国の大学の中でも断トツに早かったし、質も高かった。意図したわけではないが、「ボランティアの明学」は、これまで縁の薄かった東北でも知名度をあげた。昨年度の私の授業、ボランティア特別研究の受講生は 25 人だが、宮城県出身が３人もいる。支援に駆けつけてくれたことで、明治学院大学と言う名前を心に刻んだ学生たちである。

支援活動にかかわった学生は、被災者が「かわいそうな人たち」ではなく、勇気をもって苦境に挑戦している人たちであることを知ったし、現地では NPO や企業が連携して一緒にサポートしている実態をつぶさに見ることができた。またボランティアにも限界があり、肉親を失った人の心の傷はどんなに寄り添っても癒やせないこと、それでも顔に出さずに「ボランティアに来てくれて本当にありがとうね」と声をかけてくれる現地の方の心情を察することもできるようになった。そうした経験のすべてが学生の成長につながったと信じている。

こうした思い出に満ちたボラセンだが、今年 2018 年の 11 月で、創立 20 周年を迎える。そこで何が課題で、今後、どうあるべきかということについても考えてみたい。

① 全学イベント「1 Day for Others の日」の新設

ボランティアは明学の MG Decade Vision の柱の一つであり、本学の魅力である。一層、充実させることが望ましい。

まずは前述した通り、1 Day for Others の強化、拡大が重要である。1 日、全学の教職員、学生が自らボランティアに出かける日を設けることを目標にしてほしい。そのために必要なのは、先生方の意識改革だ。狭い意味のボランティア概念にとらわれ、自分は、あるいは自分の授業はボランティアとは関係ないと思い込んでいる先生も多い。社会福祉学科は障がい者、高齢者のことを学んでいるし、経済学部は企業 CSR と直接関係があるからわかりやすいが、例えば、法学部は法律相談などで行政窓口と協力して住民にアドバイスをしたりできるし、芸術学科であれば、アートや音楽を通して街づくりや、子ども支援などが可能だ。語学の先生は多文化共生で貢献できるし、体育の先生は地域スポーツなどにか

かわってもいい。

学生の連携先ももっと増やせる。現在は、ボランティア団体、NPO,NGO,社会起業家、企業が中心だが、自治体や、社会福祉法人、国連、赤十字、ユニセフといったところもアプローチする価値がある。要は社会を構成するどんな組織でも可能性はあるということである。

学内での連携にも目を向けるべきだろう。JUNKO Association はじめ活発な学生団体は多い。大学のサポートセンターとも協力できる。障がいを持っている学生とも何かできないだろうか。若い教職員の子育てを手伝うのもいい。とにかくボランティアの枠をタテヨコに広げよう。夢は広がるばかりである。

② 高大連携の促進

明治学院はせっかく高校を持っているのだから高大連携を進めたい。若い時からボランティアに関心を持つことはその人の人生を豊かにしてくれる。白金と東村山の高校生にまずは 1 Day for Others に参加してもらったらどうだろうか。ボラセンの活動にかかわってもらうのもいい。被災地支援の機会があれば、それに参加してもらうというのも一つのアイデアである。

③ ボラセン所属の専任教員を

ボラセンの運営にかかわる専任の教員が必要だと思う。ボラセン担当の専任講師、准教授、教授である。例えばボラセンのスタッフをしながら、ボランティア学を担当するといったイメージである。早稲田大学にはそういう教員がいるし、関西学院大学の国際教育・協力センターにも似たような形の教員が存在するので参考にすべきである。

職員とコーディネーターという職種の異なった人が一緒に働くというのはさまざまな困難がともなうが、仕事の内容は異なるので、お互いに立場を尊重しながら仲良く働くことが大事である。その前提として仕事の範囲と指揮命令系統はしっかりしておくことが必要となる。

④ 学生の役割に期待

かつては地域活動しかなかったが、現在は被災地支援のほか、海外プログラム事業部、明学レッドクロス、SHIP など、学生の希望を取り入れ、組織を拡大、強化している。それを学生事務局が統括する仕組みである。学生は可能性に満ちている。時代とともにボランティアの対象も変わる。臨機応変に対応していくことが求められる。

⑤ 明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム

開始して間もないサティフィケイト・プログラムだが、うまく行っているのだろうか。熱心に取り組んでいる学生が存在しているのは知っているが、私の周辺の学生に聞くとあまり評判は芳しくない。3 年を機に見直しが必要だ。大学としても明学の売りの一つとして広報戦略を展開しているので止めることは考えず、いかによくするかを考えるべきだろう。ボランティア実践と授業の融合を目指すという視点は理解できるが、それを「ボランティアの評価」という風に短絡的に矮小化してしまった点に問題があったような気がする。ボランティアというのは成績のために行うのではなく、ボランティアそのものが教育であるという考え方が根強くある。サティフィケイト制度の導入前は、学生は成績を意識することなく、前向きにボランティアに取り組んでいた。いわば理想的な姿だったわけである。そうした良さを損なうことなく、皆が取り組みやすい形を模索してほしい。今の制度は内容も手続きも問題が多いような気がする。ボランティア活動を活発化する工夫、指定科目の再編、インテグレーション講座の見直し、教員のかかわり方など改善点はいくつもある。ボラセンの皆さん、学生に期待するところ大である。

（2018 年 3 月　原田勝広）

※ 原田元センター長/教養教育センター教授は、2018 年 3 月に退官

特集２　明治学院大学と岩手県大槌町との協働・連携の未来に向けて

本学はボランティアセンターを中心として、東日本大震災直後から多くの学生・教職員が被災地で活動を展開してきた。なかでも岩手県大槌町とは特別な関係を築いてきた。2012 年 3 月に、明治学院大学と大槌町との間に「協働連携に関する基本協定書」が締結され、ボランティアセンターの活動の一環として数多くの学生が大槌町でのボランティア実践に参加してきたからである。2012 年 4 月 1 日に発効したこの協定は、3 年後の 2015 年に更新された後、2 度目の更新が合意された。それを受けて 2018 年 2 月 6 日に、杉山恵理子ボランティアセンター長、波多野洋行次長、高橋千尋課長、この協定書の策定に関わり、その後も何度も大槌町を訪れて調査研究活動などを展開してきた浅川達人社会学部教授（キャリアセンター長）、中原美香ボランティアコーディネーター、そして 2 人の学生（社会福祉学科 2 年の佐藤さんと消費情報環境法学科 1 年の山本さん）とともに、私も初めて大槌町を訪れた。

私自身、故郷の水戸市滞在中に震災に遭い、実家が大規模半壊の被害を受けた。3.11 後の数日間にわたる避難生活とその後の実家家屋再建という被災経験を通じて、津波被害の大きかった東北地方の被災地のようすがずっと気にかかっていた。にもかかわらず、これまで足を運ぶことができずにいた。今回の大槌町訪問は、本学／ボランティアセンターにとってのみならず、個人的にも大きな転機となった。

まず訪れた町役場で開催された連携推進委員会では、平野公三町長や関連部署の部長・課長などの方々に向けて、学生代表の 2 人が大槌町吉里吉里地区での活動を報告した。大槌町の方々からは、明学生との交流が子どもたちにとって大きな刺激になっているとの、肯定的評価のお言葉をいただいた。

その後に、明学側から今後に向けて、いくつかの提案をするかたちで協議を行った。浅川先生と杉山先生から、専門性を生かした調査研究や臨床支援の提案があったほか、波多野次長から滞在中の学生たちの移動手段としてレンタサイクルの利用、大学祭での大槌町特産品販売などが提案された。学生たちも、小学校低学年の子どもたちへの防災教育や高齢者への支援など、活動対象の幅を拡げる可能性を提案した。大槌町側からは、町役場での学生たちのインターンシップのお話しも出た。これらの提案の実現可能性は、継続して協議することとなった。最後に、松原学長からのメッセージを私が代読して、委員会は終了した。

会議冒頭の挨拶で平野町長が「震災から 7 年経って、ようやく目の前の再建だけでなく、多様なニーズに対応した支援に眼が向けられるようになった」と発言されたことが私の印象に残った。大槌町は今、転機を迎えているという。委員会後に、町のようすを視察させていただいたが、大槌駅の駅舎建設が始まり、その周辺の店舗や住宅の建設も徐々に進んでいる。吉里吉里地区の吉祥寺では、高橋英悟住職や芳賀博典（大槌町公民館）吉里吉里分館長のほか、地元の皆さんとお話しする機会を得た。移設された公民館分館での学生たちの新たな活動が期待されているとのこと。その後、吉里吉里学園小学部と中学部を訪問し、本明校長および柳田校長と個別に意見交換させていただいた（吉里吉里学園中学部では学習支援活動中の明学生たちにも会えた）。児童・生徒数の減少が顕在化する一方、震災の記憶のない子どもたちが入学してきており、新たな支援ニーズが生まれていることも認識できた。

吉里吉里学園中学部の柳田校長と
活動中の学生たちを訪問

復興が進む現在、町の長期的な将来展望の構築が課題になってきている。本学がそこにいかに貢献できるかが問われている。多様な次元での対話を通して、道を模索する必要があると感じながら帰途についた。

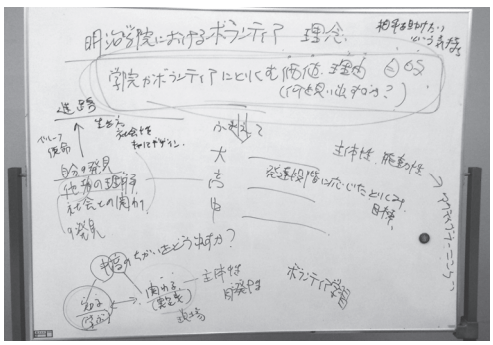
（副学長　野沢慎司）

特集３　20 周年を迎えるにあたって

ボランティアセンターは 2018 年度に設立 20 周年の節目の年を迎える。本学ボランティアセンターの設立のきっかけとなったのは、1995 年に発生した阪神・淡路大震災である。このとき、約 350 人の学生が支援活動に自発的に参加した。個人の判断で関西へ足を運ぶ状況を見ていた森田武理事長（当時）が、ボランティアセンター設立を提言し、支援活動に参加した学生・教職員も賛同した。本学では創設者 J.C. ヘボンが生涯貫いた精神“Do for Others”を受け継ぎ、震災発生以前から大学公認・未公認を問わずボランティア団体が存在していたが、センター設立により質の高いボランティアを提供できると考え、ボランティアセンター準備委員会が発足した。1 年間の準備期間を経て、1998 年 11 月にボランティアセンターがまずは横浜キャンパスに開設された。

設立当初の取り組みとして挙げられるのが 2001 年の「ソニーマーケティング学生ボランティアファンド」である。資金面はソニーが担当し、事務全般は本学が担当するという、これまでに例のない産学協働による全国の学生団体への支援が関心を呼んだ。また、2003 年度の文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム」に選定された「大学教育における社会参画体験の取込と実践～ボランティアセンターによる教育支援の試み～」は、ボランティアセンターの取り組みが内外に評価されたものであったといえる。

このほか 2005 年秋学期からスタートした明学グッズの本体価格の一割を「ボランティアファンド」としてセンターの活動に活用する取り組みは、明学グッズを購入することで誰もが気軽にボランティア活動に参加できるという仕組みでもある。このファンドを原資として資金面で明学生を支援する「ボランティアファンド学生チャレンジ賞」が 2007 年に生まれた。また、2011 年の東日本大震災では、本学が持つ学内外のネットワークを活用し、いち早く現場のニーズに応えるべく復興支援活動を開始した。「Do for Smile@東日本」プロジェクトと命名したこのプロジェクトは 7 年経過した現在も支援内容を変えながらも活動を継続している。同年に開始した、主にこれからボランティア活動を始めようと考えている新入生を対象とした 1 日社会貢献プログラム「1 Day for Others」は受け入れ団体の協力を得て、初年度参加者 245 名から 2017 年度には 762 名へと増加し、参加学生だけでなく、他大学からもこの取り組みに対して関心が寄せられている。さらにはセンターの活動を支える学生メンバーによる 8 つの活動セクションは教職員・ボランティアコーディネーターとともに幅広い活動を行っている。近年では大学による「MG Decade Vision」、明治学院による「教育ビジョン」におけるボランティアセンターの役割も視野に入れ、活動を行っている。



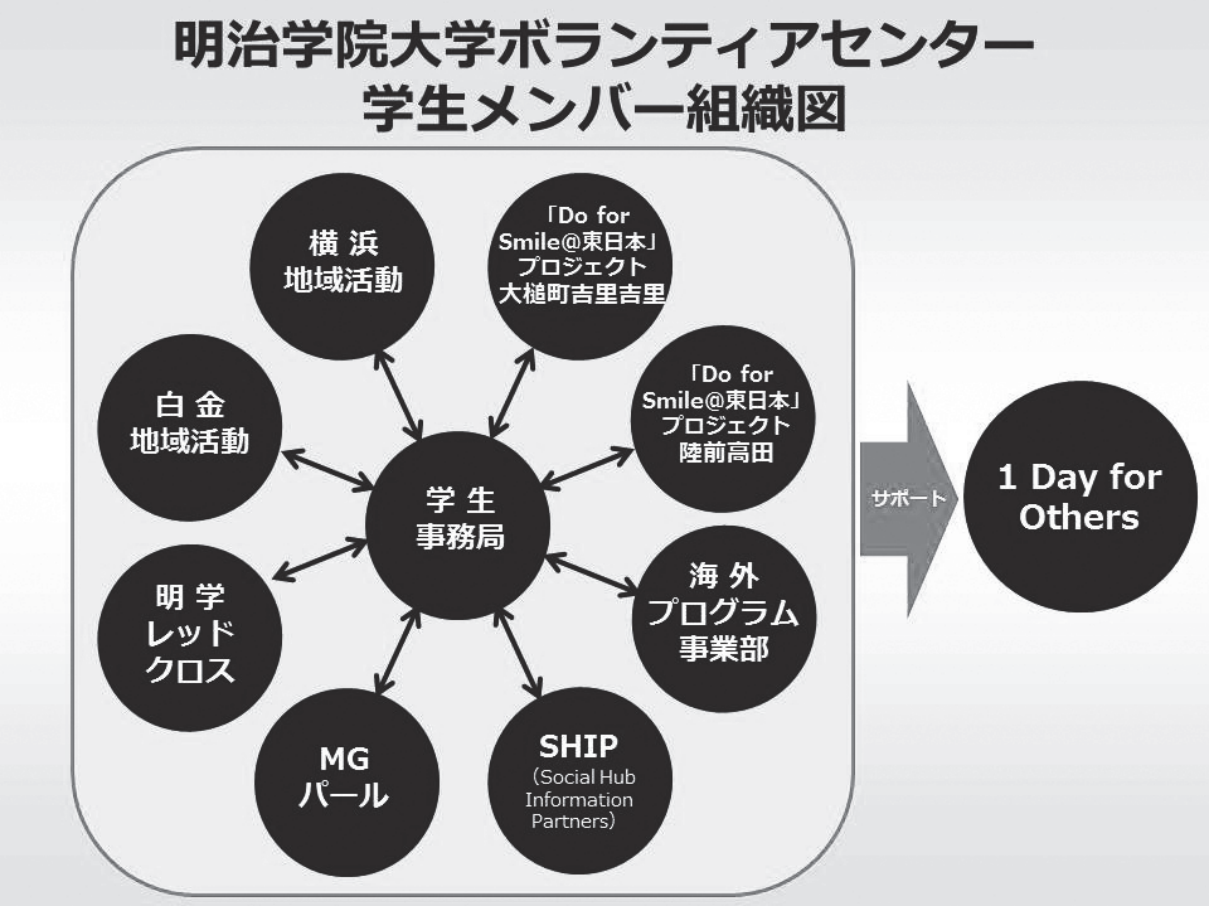
教育ビジョンにともないボランティア
理念を中高大の発達段階ごとに検証する

現在のボランティアセンターがあるのは、学内外のさまざまな方からご支援やアドバイスをいただいたおかげである。設立 20 周年を迎えるにあたり、大学組織の一つとして存在するボランティアセンターとして、活動を振り返り、行く末を見据えたメッセージを学内外に向けて発信すべく準備を始めている。比較的歴史の浅い大学ボランティアセンターの老舗として、節目の年にふさわしい足跡を残したいと考えている。

（職員　波多野洋行）

Ⅰ　2017年度活動報告

明治学院大学ボランティアセンター
学生メンバー組織図



ボランティアセンターには「学生メンバー」として登録している学生が211名（2018年2月現在）おり、セクションに分かれて活動している。複数のセクションに所属する学生もおり、セクション間の交流を図りながら積極的に活動に参加している。

＜ボランティアセンターの学生セクション＞

1. **地域活動**：大学近隣地域をベースに地域の一員として取り組む
2. **「Do for Smile@東日本」プロジェクト**：東日本大震災の復興支援活動
3. **明学レッドクロス**：日本赤十字社とのボランティア・パートナーシップのもと活動
4. **海外プログラム事業部**：地球規模で課題となっているさまざまな問題に取り組む
5. **MGパール**：マレーシア・ボルネオ島の森林保全・動物保護活動に取り組む
6. **SHIP（Social Hub Information Partners）**：本学学生の愛校心を喚起する活動や、学生が社会とつながるためのハブのような役割を目指す
7. **学生事務局**：各セクションの横のつながりを維持し、さらには各セクションとボランティアセンターとをつなぐ役割を担う

また、各セクションから選出された学生メンバーと公募の一般学生がリーダーとなり、1日社会貢献プログラム「1 Day for Others」を運営している。

2017年度ボランティアセンター行事一覧

センターとしての活動一覧です。学生セクションの活動はⅠ.3～Ⅰ.9をご参照ください。

4月	新入生対象学科別ガイダンス 新入生対象ボランティア活動アンケート実施 ボランティアセンターオリエンテーション（①②） 1 Day for Others 説明会（①②③） 明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム ガイダンス（①） 吉里吉里学園中学部が来校 「大神楽」披露
5月	横浜キャンパス 学生・職員協働防災訓練 ボランティアセンター学生メンバーオリエンテーション 明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム ガイダンス（②） 国際機関実務体験プログラム説明会（夏期） 第3回 Gakuvo Style Fund 活動報告会 2017年度第1回ボランティアセンター運営委員会 明治学院大学大学祭「戸塚まつり」
6月	1 Day for Others 春開催（一部プログラムは5月・7月に開催） 国際機関実務体験プログラムオリエンテーション（夏期） 第4回 Gakuvo Style Fund 募集 白金台児童館地域懇談会に出席 第1回インテグレーション講座（①②）
7月	第1回インテグレーション講座（③） 明治学院同窓会ウィメンズクラブ「くらら会」総会に出席 夏のボランティアフェア 2017年度第2回ボランティアセンター運営委員会 2017年度（横浜）近隣自治会等役員との懇談会に出席 第4回 Gakuvo Style Fund プレゼン審査会 学生事務局主催「勉強会」の開催
8～9月	第1回インテグレーション講座（④） オープンキャンパスへの参加（ボランティアカフェ） 「Do for Smile@東日本」プロジェクト夏期プログラム実施（明治学院高等学校の生徒参加） 国際機関実務体験プログラム実施（夏期）
10月	東京都港区「みなと区民まつり」にボランティア参加 国際機関実務体験プログラム説明会開催（春期） ボランティアファンド学生チャレンジ賞2016最終報告会 1 Day for Others 秋開催（10～12月）
11月	明治学院大学大学祭「白金祭」 ボランティアファンド学生チャレンジ賞2017募集 ボランティアセンター活動報告会 第2回「学びに基づくボランティア実践プレゼンテーション大会」 第2回 インテグレーション講座・前編 国際機関実務体験プログラムオリエンテーション（春期）
12月	明治学院同窓会ウィメンズクラブ「くらら会」クリスマス会に出席 神奈川県社会福祉協議会より「神奈川県社会福祉協議会会長表彰」を受賞 1 Day for Others 秋「振り返り会」開催 ボランティアファンド学生チャレンジ賞2017授与式 第2回「学びに基づくボランティア実践プレゼンテーション大会」授与式 2017年度第3回ボランティアセンター運営委員会
1～3月	第2回 インテグレーション講座・後編 2017年度第4回ボランティアセンター運営委員会 1 Day for Others 2018 運営委員キックオフミーティング 国際機関実務体験プログラム実施（春期） 「Do for Smile@東日本」プロジェクト春期プログラム実施 オープンキャンパスへの参加（ボランティアミュージアム）

ボランティア活動保険の加入手続き代行（4月・5月・7月・10月・1月）

1　明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム

1.1　総括

「明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム」は、本学で活発に行われているボランティア実践と、大学の学びを融合する全学的な取り組みとして2016年度から始まった。

このプログラムは、①135 時間以上のボランティア実践、②各学部学科と、共通科目を担当する教養教育センターが指定した科目のうち16単位の修得、③ボランティア実践と、大学での学びを結びつけるための手がかりをつくる「インテグレーション講座（3回 ※2018年度から4回）」を受講した学生に、サティフィケイト（修了証）を授与するものである。

本年度は2年目となり、92名の新入生がプログラムに登録するとともに、昨年登録した2年生が第2回インテグレーション講座に臨んだ。大学でのボランティア活動を始めたばかりの1年生を対象とする第1回インテグレーション講座は、実践を通じて学ぶことに留意し、ボランティアセンターが実施している（6月、7月、8月に全4回実施）。これに対して、2年次の秋学期の学生を主たる対象とする第2回インテグレーション講座は、各学部の運営委員の教員の協力を受けながら、それぞれがこれまで行ってきたボランティア活動の経験を、専門の学びと結びつけるためのものである。本年度は、その前編として「学びに基づくボランティア実践プレゼンテーション大会」に参加し、ボランティア活動を通じて大学の学びを深めてきた3・4年次生のプレゼンテーションを聞いた後、各学部に分かれてディスカッションを行った（11月11日）。その後、各学部の運営委員の指導によって、後編が実施されている。当初より、本プログラムは全学的な取り組みとしてはじまったものだが、各学部の運営委員の協力を得ることによって、本格的な展開が始まったといえる。

本年度特筆すべき点は、プログラムを担当する非常勤コーディネーターを任用した点である。週2回の勤務であるが、学生から提出される実践の記録に対して実践からの学びを深めるためのフィードバックコメントをするとともに、昼休みを利用したショート講座の実施や、「サティフィケイトプログラムだより」の発行などが行われるようになり、プログラム登録学生が気軽に相談できるような体制が整えられつつある。来年度は、登録学生のプログラムの継続の状況やボランティア実践の状況を踏まえながら、ボラセンとして効果的な実践指導を探っていく。

2018年度は3年目で、いよいよ完成年度を迎える。第3回インテグレーション講座を受講する3年生が、自身のボランティア活動と学びを融合させて、一人ひとりの「Do for Others」を言語化させられるように、教学に携わる各学部・教養教育センターの教員と連携してサポートしていくとともに、プログラム自体がより意味を深められるような検証と改善を適宜行っていく。

（ボランティアセンター長補佐　猪瀬浩平）

1.2　2017 年度スケジュール

日にち	内容
4 月	新入生向け学科別ガイダンスにて「明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム」について告知（別日程で説明会も実施した）
5 月 17 日（水）	第 1 回インテグレーション講座の告知・エントリー受付開始
① 6 月 27 日（火） ② 6 月 28 日（水） ③ 7 月 8 日（土） ④ 8 月 1 日（火）	第 1 回インテグレーション講座　対象：主に 2017 年度生 【テーマ】「ボランティア実践から学ぶとは」 【内　容】「大学での学び」と「ボランティア実践からの学び」の違いについて理解を深めた。 【講　師】猪瀬浩平（ボランティアセンター長補佐　教養教育センター准教授） 中原美香（ボランティアコーディネーター）
11 月 11 日（土）	第 2 回インテグレーション講座（前編）　対象：2016 年度生 【テーマ】「ボランティア実践と大学での学びを結びつける」 【内　容】「ボランティア実践」と「大学での学び」を結びつけるとはどういうことか、先輩学生の発表や、教職員からのレクチャーとディスカッションを通して理解を深めた。 【講　師】各学部の運営委員の先生方、先輩学生
11 月 28 日（火） 12 月 18 日（月）	ショート講座Ⅰ　対象：全学生 「障がいのある方や子どもとの接し方を考えよう」 ショート講座Ⅱ　対象：全学生 「発達障がいの子どもとの接し方を考えよう」
学部ごとの日程	第 2 回インテグレーション講座（後編）　対象：2016 年度生
各月初め （秋学期より）	「サティフィケイトプログラムだより」発行

1.3　2017 年度プログラム登録者数

	学部						合計
	文	経済	社会	法	国際	心理	
2016 年度生 （第 2 回インテグレーション講座を受講した者）	1	1	13	3	7	2	27
2017 年度生	17	13	12	7	29	14	92
合計	18	14	25	10	36	16	119

1.4　取り組みのようす

①　第 1 回インテグレーション講座

第 1 回インテグレーション講座は、通常は 3 年間かけて取り組む「サティフィケイト・プログラム」

のスタート地点である。主に1年生を対象としている。多くの学生が参加できるように、曜日や日程を変えて同じ内容の講座を4回にわたって実施した。「サティフィケイト・プログラム」の趣旨や取り組み方法を知ったうえで、「大学での学び」「ボランティア実践からの学び」という本プログラムの二つの大きな柱について理解を深める内容であった。

この講座を通して、2017年度は92名の1年生が本プログラムに登録した。

②　第2回インテグレーション講座（前編）

第2回インテグレーション講座は、本プログラムに約1年半の期間取り組んできた主に2年生が参加する講座である。

インテグレーション講座の実施前に、前年度に本プログラムに登録した学生に対して、出席するかどうかを確認した。登録学生はボランティア実践の進み具合などに応じて、各自で判断して27名がインテグレーション講座への出席を希望した。

当日は、大きく前半の全体会と後半の学部分科会とで成り立っている。

前半は全員で「学びに基づくボランティア実践プレゼンテーション大会」を聴講して、先輩学生の発表から学びとボランティアをつないで双方の成果をさらに深める具体的な事例を知った。

後半の学科ごとでの分科会では、各学科の運営委員の先生がファシリテーターとなり、参加学生が「これまで取り組んできたボランティア実践」「ボランティア実践とつなげて、今後大学で学びたいこと」を共有し、交流した。学科の先生からは学びとボランティア実践をつなぐためのさまざまな研究手法や参考となる文献などが紹介された。

参加学生は後日「第2回インテグレーション講座ワークシート」を提出した。提出のあったワークシートにはボランティアコーディネーターがフィードバックを記入して返却した。

なお、この講座は1回限りの開催であったことから、授業等の都合で参加できない登録学生もいた。授業等のやむを得ない事情であると判断した場合は、当日の講座のようすを記録ビデオで視聴して、「ワークシート」を提出することで参加とみなすこととした。

第2回インテグレーション講座（前編）
学科ごとの分科会

第2回インテグレーション講座ワークシートより

A さん「政治学科で学んでいることから発展途上国の問題を解決するために日本は何ができるのかを考えたい。政治・行政的な観点から考えることで一時的な解決でなく根本的に解決する方法を探りながら、国際問題に関わるボランティアに取り組んでいきたい。」

B さん「外国籍の子どもや障がいのある子どもの支援に関わっています。ここからつなげられる授業としてジェンダー・マイノリティー・異文化などをキーワードとして考えています。」

コーディネーターコメント

A さんのように学びから見つけた課題をボランティアにつなげる方法や、B さんのようにボランティア実践での体験をもとに学びたいことにつなげる方法など、それぞれに合ったさまざまな形で学びとボランティア体験をつなぐことができますね。自分に合った方法を探っていってください。

③　第２回インテグレーション講座（後編）

第２回インテグレーション講座（前編）を受けて、学科ごとに日程を設定して（後編）が行われた。

再び各学科運営委員の先生方や学科主任の先生方が指導してくださり、具体的に「ボランティア実践と大学での学びをどのように結びつけるか」について理解を深めた。各登録学生が深めようとしている内容が徐々にはっきりしてくるなかで、ここではボランティア実践と結びつくことができるであろう学びの授業科目名なども挙げて今後の取り組みへの見通しをもった。

講座終了後に「第２回インテグレーション講座後編レポート」を提出した。提出のあったレポートにはボランティアコーディネーターがフィードバックを記入して返却した。

第２回インテグレーション講座後編レポートより

C さん「被災地復興支援をボランティア実践の大きな枠として考えているが、そのなかでも子どもとの関わりにおいては、教職課程で子ども期の発達の特性や指導法、関わり方を具体的に学ぶことで、子どもたちと楽しく関わりながら、心の声を引き出せるようになりたい。」

コーディネーターコメント

第２回インテグレーション講座前編・後編を通して、大きな枠のままで考えていたものが「この部分はこの学びとつなげたい」というつながりの矢印が少しずつはっきり見えるようになってきましたね。これからは矢印がどんどん太くなるような取り組みができるとよいですね。

④　ショート講座Ⅰ・Ⅱ

サティフィケイト・プログラムやボランティア実践に取り組むなかでの疑問の解決や問題点の解消に役立つように、昼休みに気軽に参加できる「ショート講座」を横浜キャンパスでお昼休みに実施した。

どちらも、本プログラム登録学生以外の学生も参加した。

ショート講座Ⅱで参加者から共有された支援の事例

・言葉のやり取りが苦手な中学生への支援→ビンゴカードのマス目にどんな言葉を書きたいか見本を示して選べるようにして、一緒に書く作業に取り組んだ。

・水泳指導で耳をふさいでうずくまるなどの行動がある小学生への支援→ジェスチャーを使って伝えようと試みた。

ショート講座

コーディネーターコメント

それぞれに相手の苦手な関わり方でなく、受け入れやすそうな関わりを試みているところがよいですね。その支援が有効かどうかを評価しながら、よりよい支援方法を探りながら支援する相手と一緒に一歩ずつ歩んでいきましょう。

⑤　「サティフィケイトプログラムだより」発行

本プログラムの登録学生や、ボランティア実践に取り組む学生が気軽にボランティアセンターに足を運んだり、ボランティアに親しみをもったりすることができるような情報を提供するための通信を 10 月から毎月月初めに発行した。

本プログラム登録学生のテーマの紹介や、読み物としてボランティアコーディネーターのボランティ

ア体験などを掲載した。

あわせて横浜ボランティアセンターコーディネーターの勤務日も紹介して、登録学生がボランティアセンターを利用しやすい情報を提供した。

サティフィケイトプログラムだより
1月

コーディネーターより

サティフィケイト・プログラムが始まって来年度はいよいよ 3 年目となり、2016 年度生はプログラムのまとめの年になります。みんなでゴールを目指して進んでいきましょう。

1.5　学びに基づくボランティア実践プレゼンテーション大会

「明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム」の関連企画として、3、4 年生をエントリー対象として開催した。自身が取り組んだボランティア実践と、学部・学科の授業における学びを関連付け、双方の深まりを図った事例の発表の場を提供し、優れた発表に対して学長賞等を授与するものである。

一次審査（エントリーシート）を通過した学生が、2017 年 11 月 11 日に発表を行った。この発表を 2016 年度登録学生が「第 2 回インテグレーション講座（前編）」の先輩学生の発表として聴講した。

「学びに基づくボランティア実践プレゼンテーション大会」では、厳正なる選考の結果、下記の学生の入賞が決定した。

【テーマ】“Do for Others”の実現のために　「大学での学び」と「ボランティア実践」との連携

学長賞		1 名
	国際学部国際学科 4 年	大竹菜緒
ボランティアセンター運営委員長賞		2 名
	社会学部社会学科 4 年	佐藤大樹
	社会学部社会福祉学科 3 年	五十嵐有沙
ボランティアセンター長賞		1 名
	経済学部経営学科 4 年	野村奈央
奨励賞		2 名
	社会学部社会福祉学科 3 年	飯田大誠
	社会学部社会福祉学科 3 年	松下梨那

（学科別 50 音順）

学長賞の大竹さんの学びの軌跡はボランティアセンターウェブサイトで紹介しています。

https://www.meijigakuin.ac.jp/volunteer/certificate/news/2017/2017-12-23.html

（ボランティアコーディネーター　田口めぐみ）

2　1 Day for Others (1 日社会貢献プログラム)

職員総括

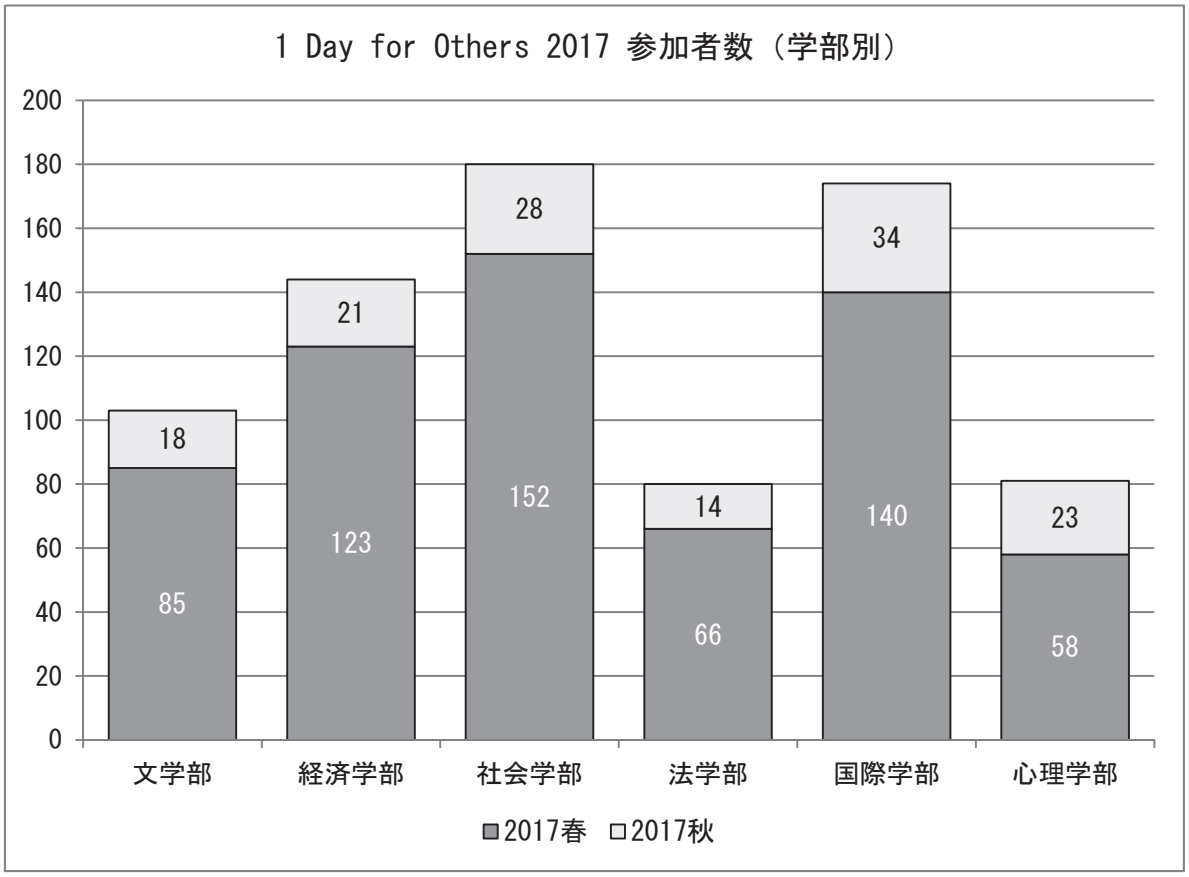
2011 年度よりスタートした 1 Day for Others（以下、1Day）は、2017 年度で 7 回目の実施となった。今年度は、昨年度より開始した、春学期・秋学期の 2 期制を引き続き実施し、プログラム数は昨年度比 1 プログラム減少したものの、春学期 52 プログラム、秋学期 14 プログラム、計 66 プログラム（プログラム開催予定数 68。雨天等の影響で 2 プログラム実施中止）を開催することができた。また、参加人数においては、昨年から 59 名増と大幅に増加し、762 名（延べ）を数え、過去最高参加人数を達成することができた。参加者増の要因としては、今年度より、参加学生募集の際にポータルサイトを利用したことで学生の申込手続き方法が簡易になったこと、広報に力を入れ、学生に宣伝したことで、各プログラムの定員充足率が上がったことが考えられる。

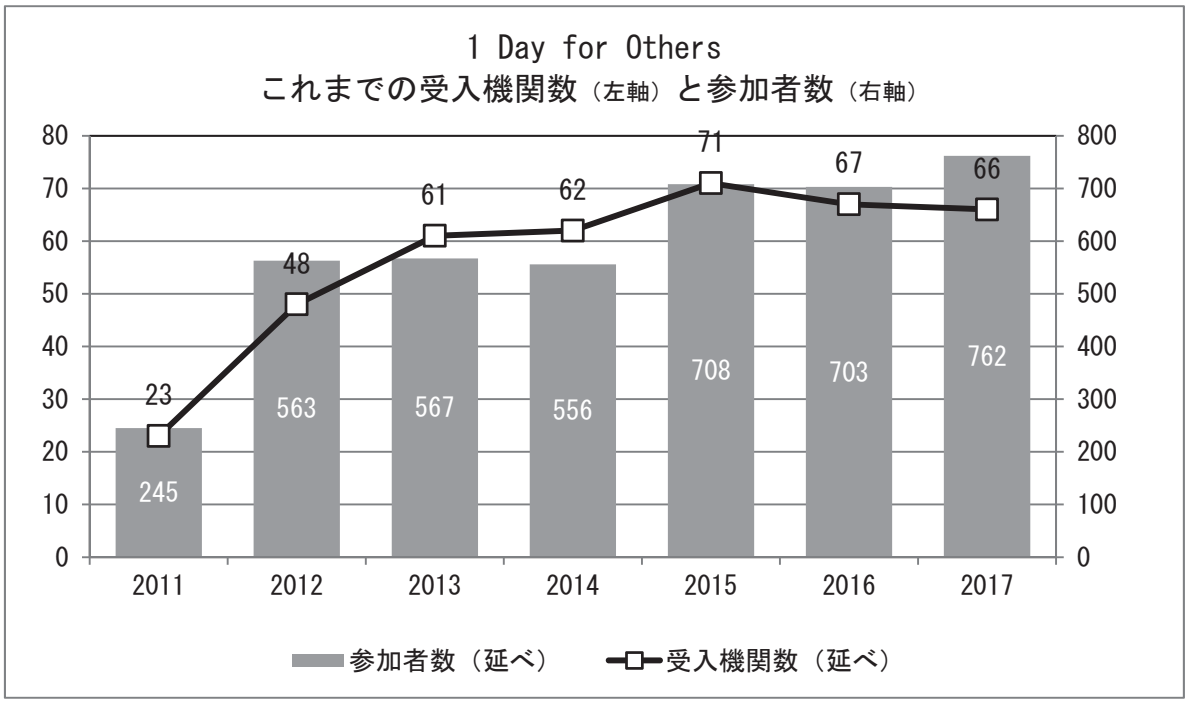
また、参加学生に行ったアンケート調査では、参加者の約 94 パーセントにあたる 719 名より回答を得た。満足度を問う項目では、「大満足」「ほぼ満足」「普通」「やや不満足」「不満足」の選択肢のなかから「大満足」「ほぼ満足」を選んだ学生が「91.5%」を占め、仮に未回答者がすべて「普通」以下の満足度だったと結果を仮定して集計に含めても、「86.4%」の参加者が満足しているという結果となった。満足度が高くなった要因としては、受入団体の方々が質の高いプログラムを準備してくださっていることが最大の要因として挙げられる。今年度においては、1Day に参加した学生が受入先の活動に共感し、インターンシップ生として 1 日に留まらない活動をさせていただいた事例も発生した。学生の興味やニーズにあったプログラムを学生たちにきっかけとして提供いただいている各受入団体関係者の方々には、この場を借りてお礼を申し上げたい。また、各企画の担当として、当日までの打ち合わせや実施日当日の学生引率を務めたサポート学生が意欲的に企画実施に向けて取り組み、一般参加者をまとめたことも高い満足度を得ることができた要因であると感じている。延べ 75 名の学生がサポート学生を務めたが、主体的に動き、自らの手で企画を成功させようと努めたサポート学生が多かった。プログラムの一つの目的として挙げられる、リーダーの学生に受入団体とのやり取りを通して、社会とのつながりを考える機会を提供するということ、その目的に違わぬ役割を果たしてくれ、その成長が目に見えて感じることができたことを嬉しく思う。実際に次年度企画においてサポート学生の募集をした際に、自らの参加した企画のサポート学生の姿を見て憧れを抱き、応募を決めたという学生が一定数おり、サポート学生申込者が例年よりも増加したことからもサポート学生の活躍は裏付けられる。

一方で、昨年からの課題である受入団体の負担軽減に対する施策考案や、サポート学生の事務負担軽減の施策考案、アンケートの回収率を 100 パーセントにするための施策考案等、検討しなければならない事項も山積している。次年度のスムーズなプログラム運営や企画実施に向け、対策を取るとともに、引き続き、学生の期待に応えることができるよう努力したい。

最後に、1Day を実施するにあたって、学生の成長を促すため、ご厚意にて学生をお受入いただいた外部の受入団体、企業の皆さまに多大なるご協力をいただいたことを改めて心より感謝申し上げ、結びとしたい。

（職員　青木洋治）


1 Day for Others 2017 参加者数（学部別）
200
180
160
140
120
100
80
60
40
20
0
18
85
21
123
28
152
14
66
34
140
23
58
文学部
経済学部
社会学部
法学部
国際学部
心理学部
2017春
2017秋


1 Day for Others
これまでの受入機関数（左軸）と参加者数（右軸）
80
70
60
50
40
30
20
10
0
800
700
600
500
400
300
200
100
0
23
48
61
62
71
67
66
245
563
567
556
708
703
762
2011
2012
2013
2014
2015
2016
2017
参加者数（延べ）
受入機関数（延べ）

1 Day for Others 2017 春　プログラムリスト

コース分類	NO	企業および団体名	プログラム名	実施日	募集人数
①人とのつながりを実感	1	戸塚区地域子育て支援拠点 とっとの芽	とっとの芽で子どもたちと遊ぼう！	5/20	6 名
	2	宗教法人 善了寺	デイサービス「還る家ともに」 ～穏やかな一日をともに体験～	6/3	3 名
	3	芝の家	多世代交流拠点「芝の家」体験	6/3	6 名
	4	フードバンクかわさき	届ける人と食＜貧困家庭を支えるネットワーク＞	6/3	7 名
	5	戸塚原宿商店街 松栄会	ふれあいフリーマーケット 子ども向けブースを運営しよう！！	6/4	22 名
	6	ことぶき学童保育	Let's enjoy 学童保育　～遊びから学ぶこと～	6/10	15 名
	7	社会福祉法人 世田谷区立特別養護老人ホーム 芦花ホーム	特別養護老人ホーム芦花ホームの体験 ～利用者の生活を知ろう～	6/10	6 名
	8	公益社団法人 ジュニア・アチーブメント日本	共存社会を子どもたちと一緒に学ぼう！ ～スチューデントシティでの体験を通して～	6/10	13 名
	9	特定非営利活動法人 放課後 NPO アフタースクール	小学生に戻って、思いっきり遊ぶ！！	6/10	6 名
	10	スープの会	スープで温める路上生活者との絆 ～あなたが気づく等身大の彼らの姿～	6/10	10 名
	11	社会福祉法人 のびのび福祉会	障がい者支援に 1 日参加しよう	6/14	8 名
	12	特定非営利活動法人 日本ファンドレイジング協会	（ソニー生命×日本ファンドレイジング協会）寄付で社会がどう変わる（あなたの選択でどう変わるかグループワークしよう）	6/14	27 名
	13	とつか区民活動センター	地域から広がれ！みんなのわ ～人と人をつなぐボランティアの楽しさを感じよう！～	6/18	9 名
	14	NPO 法人 ぱれっと	「わんさか渋谷まつり♪」を盛り上げよう！	6/18	15 名
	15	特定非営利活動法人 マドレボニータ	学生時代からまなぶワークライフバランス ～産後の社会課題を見据えて～	6/24	8 名
	16	港区立麻布子ども中高生プラザ	子どもたちと一緒に仲良く楽しく遊ぼう！	6/24	6 名
	17	ボランティアセンター（スポ GOMI MG 大会）	ゴミ拾いで頂点を目指せ！スポ GOMI MG 大会	7/8	20 名
②地球規模で社会課題に取り組む	18	認定 NPO 法人 地球市民 ACT かながわ /TPAK	アジアの子どもたちに明るい未来を！ ～国際協力の必要性と意義を知ろう～	5/20	5 名
	19	認定 NPO 法人 地球市民 ACT かながわ /TPAK	アジアの子どもたちに明るい未来を！ ～国際協力の必要性と意義を知ろう～	5/21	5 名
	20	特定非営利活動法人 ワールドランナーズ・ジャパン	「マジメ」だけがボランティアじゃない！！ ～ Run For Africa! ～	5/21	31 名
	21	横浜自然観察の森	自然あふれる森の中でホタルを観察しよう！ ～環境保全ボランティア体験～	6/10	5 名
	22	特定非営利活動法人 国際連合世界食糧計画 WFP 協会	世界の飢餓問題や国連 WFP 協会の食糧支援活動について学ぼう	6/10	32 名
	23	見沼田んぼ福祉農園	見沼田んぼ福祉農園	6/11	9 名
	24	公益財団法人 プラン・インターナショナル・ジャパン	世界の女の子たちの現状を知ろう。 ～私たちが今動けば未来は変わる！～	6/14	16 名
	25	NPO 法人 Café dela Terra	夏至　Candle Night 2017	6/16	6 名
	26	特定非営利活動法人 国際交流ハーティ港南台	日本語学習ボランティア ～様々な国の方々と国際交流をしよう～	6/16	6 名
	27	日本赤十字社神奈川県支部	あなたの一歩が命を救う ～赤十字救急法基礎講習～	6/17	21 名
	28	株式会社 大地を守る会	でんきを消して、スローな夜を ～ 100 万人のキャンドルナイト～	6/17	6 名
	29	Y's farm	「田畑から食卓まで」 ～無農薬田んぼ体験と手作り Pizza Lunch ！～	6/17	21 名
	30	久地円筒分水サポートクラブ	住宅街にも国の登録文化財はある！ 円筒分水、広場の美化活動に参加しよう！！	6/17	10 名
	31	ファイバーリサイクルネットワーク（FRN）	古着から考えるリサイクル ～タンスの奥に眠った着物等を呼び覚ます！～	6/18	10 名
	32	特定非営利活動法人 アクションポート横浜	戸塚の魅力を歩いて食べて発見しよう！	6/18	16 名
	33	特定非営利活動法人 ボルネオ保全トラスト・ジャパン（BCTJ）	オランウータンから学ぼう！ボルネオ島の環境問題	6/18	16 名
	34	エコキャンパスミーティング／コミュニティスペース ふらっとステーション・とつか	ふらっと ECO 活　～戸塚の食材で料理しよう～	6/18	6 名
	35	認定 NPO 法人 国際協力 NGO センター （JANIC）	世界の貧困問題を学ぶ ～参加型ワークショップで自分の世界を広げよう！～	6/24	15 名
	36	ミャンマー祭り実行委員会	異文化とスキルを学べる場！ミャンマー祭り 2017	6/24	11 名
	37	NPO iPledge	逗子海岸クリーン & ピースプロジェクト 2017	7/15	12 名

コース分類	NO	企業および団体名	プログラム名	実施日	募集人数
③ビジネスで社会課題に挑戦	38	株式会社 ユーズ	あなたの街にも回収ステーションがあるかも？ 油のリサイクルを学ぼう！	6/3	5 名
	39	株式会社 スワン	障がいのある方たちとともに働くことを考える	6/5	6 名
	40	株式会社 マザーハウス	「1 Day for Others」異文化理解のはじめに@マザーハウス	6/17	30 名
	41	公益社団法人 難民起業サポートファンド	日本に暮らす難民との交流を通じて、難民問題について考えよう。	6/23	5 名
	42	株式会社 アットマーク・ラーニング	親コーチング研修～親子の信頼関係を築くために～	6/24	10 名
	43	第３世界ショップ / 株式会社 プレス・オールターナティブ	フェアトレード・コミュニティートレードを学ぼう 株式会社 プレス・オールターナティブ！	6/24	6 名
	44	リングロー 株式会社	笑顔 (^-^) の作り方　社会を変えるパソコンの復活ビジネスを体験しませんか？	6/24	11 名
④企業の社会的責任CSRについて知る	45	資生堂ジャパン 株式会社	資生堂 ライフクオリティー メーキャップ ～化粧の力で笑顔を増やそう！～	6/7	18 名
	46	株式会社 セールスフォース・ドットコム	グローバル IT 企業とイノベーションで社会貢献？！ ～学んで実践する 1 日～	6/7	16 名
	47	ソニーマーケティング 株式会社	社会貢献につながる、SONY の商品・サービスを企画しよう。	6/14	32 名
	48	株式会社 イオンフォレスト(ザ･ボディショップ)	ザ・ボディショップ コミュニティ活動体験	6/14	10 名
	49	株式会社 大川印刷	横浜名物を支える環境にやさしい印刷会社！ユニークな CSR 活動について学ぼう！	6/21	18 名
	50	日本電気 株式会社（NEC）	イノベーションで笑顔あふれる社会に ～ NEC の社会貢献活動を学び参加しよう～	6/21	31 名
	51	堀江車輌電装 株式会社	パラスポーツを体験しよう！ Let's try 車椅子スポーツ	6/24	24 名
	52	株式会社 エイチ・アイ・エス	H.I.S.×明治学院大学　夢のコラボ！目指せ商品化！スタディツアーのプランニング	7/1	73 名

1 Day for Others 2017 秋　プログラムリスト

コース分類	NO	企業および団体名	プログラム名	実施日	募集人数
①	1	とつか宿場まつり実行委員会	とつか宿場まつり －地域のお祭りを一緒に運営しよう！－	10/8	20 名
	2	一般社団法人 スマイルウォーキング倶楽部	元パリコレモデルから学ぶ障がい者の可能性！ 一緒に創ろう、クリスマスファッションショー	12/2	25 名
	3	芝の家	子どもたちと遊ぼう！「芝の家」で地域交流！	12/2	6 名
	4	神奈川県動物保護センター	神奈川県動物保護センターの役割とは ～動物福祉を学ぼう～	12/6	16 名
	5	NPO 法人 みなと子ども食堂	夕食を通じた子どもたちとのコミュニケーション体験	12/6	4 名
	6	コミュニティスペース ふらっとステーション・とつか	みんなで作ろうクリスマスデコパージュ	12/10	12 名
②	7	国連ウィメン日本協会よこはま	フォーラムまつりで途上国女性の支援活動を理解するとともに地域の繋がりを深める	10/29	8 名
	8	株式会社 オルタナ	Instagram で社会問題を発信してみよう！	11/4	8 名
	9	見沼田んぼ福祉農園	農園実践！里芋堀イベントで福祉について学ぼう！	11/12	5 名
	10	特定非営利活動法人 国際連合世界食料計画 WFP 協会	みんなで考えよう！世界の飢餓問題や世界食糧計画	11/18	32 名
	11	認定特定非営利活動法人 JUON NETWORK（樹恩ネットワーク）	多摩の森・大自然塾～学生編～	11/23	11 名
	12	ミャンマー祭り実行委員会	異文化とイベント運営を学べる場！ミャンマー祭り 2018	12/2	9 名
③	13	パタゴニア 東京・渋谷	アウトドアアパレルメーカーの環境 CSR 活動について理解を深めよう	11/18 11/19	6 名
	14	パタゴニア 横浜・関内	アウトドアアパレルメーカーの環境 CSR 活動について理解を深めよう	11/22	11 名

3 「Do for Smile@東日本」プロジェクト（東日本大震災復興支援）

3.1 明学・大槌町吉里吉里復興支援プログラム

コーディネーター総括

2011年3月11日の東日本大震災直後から2017年3月まで、大槌町で住民の皆さまや学生、大学関係者とゼロから活動を作り上げてきた市川コーディネーターが退職し、私がこれまでの陸前高田での活動に加え大槌町での活動も担当させていただくこととなった。私自身は陸前高田復興支援プログラムの学生たちとの合同スタディツアーなどもあり何度か大槌町を訪れてはいたが、新しくかさ上げされた土地のうえに住宅が建設され、子どもの自転車や洗濯物など「生活感」が沿岸部の一部に戻ってきているようすや、防潮堤が造られている場面などを目の当たりにして、震災から「もう」7年か「まだ」7年かと考えながらもまずは学生たちの活動を地域に必死につなげようとした1年だったと実感している。

住民の方や学生メンバーにとっては、最初からいろいろ話し合いながら活動してきた市川コーディネーターから担当が替わることに大きな不安があったに違いない。その意味でも、この1年我々の活動を見守り、ご協力・ご支援くださった皆さまに心からお礼を申し上げたい。上級生にも今までどのように活動を進めていたのかを訊きながら、できる限り現地の活動を一通り見ていくことを心がけた。

とはいえ、この1年、活動のほとんどが吉里吉里学園小学部および中学部での活動であったため、学校関係者の皆さまや一部の小中学生との関わり以外の部分が手薄になってしまったことは否めない。吉里吉里地区の方々とは2017年3月の陸前高田セクションとの合同スタディツアーでの「お茶っこの会」の次にお会いしたのは、ほぼ1年後の2018年2月の、やはり合同スタディツアーの「お茶っこの会」だった。地域の方々に支えられている活動ゆえ、2018年度は、担当コーディネーターとして私も地域の方々との交流をさらに深め、私たちに求められていることは何か感じ取っていきたい。

大槌の町を歩いていると、「明学さんはずっと来てくれていてありがとう」などと、あたたかく声をかけてくださる方々も多い。継続することに意義を見出す一方、震災から7年経ち、私たちのような遠方の大学・大学生が求められることも変わってきているとも感じている。例えば、吉里吉里学園中学部での学習支援活動は、今年度の春活動のときに生徒、教員、そして保護者の皆さまを対象にアンケートを実施したが、その結果からも、活動の軌道修正をする必要がありそうだ。また、2018年4月には、震災で全壊した吉里吉里地区の公民館分館が新たに建設され、利用が開始される。地域の方々の新たな「拠点・居場所」ができたことで、住民の皆さまたちの笑顔があふれることを期待したい。また、私たちにできることがあれば、この分館で多世代交流や文化・芸能交流など、さまざまな分野で関わらせていただきたい。それにより、学生もやりがいを感じることとなるだろう。新しいこの分館を、地域の方々とともに利用させていただきながら活動できるのを楽しみにしている。

さらに、2018年度は、吉里吉里地区以外の大槌町での活動についても検討している。明治学院大学は大槌町と「協働提携に関する基本協定書」を締結しており、2018年に同協定が更新されたことから、ご縁と地域のニーズがあれば、吉里吉里地区以外でも学生の活動を検討したい。

震災からの時間の経過によって変わりゆく地域のニーズに、私たちも対応していく必要がある。そうしなければ「するための活動」となってしまい、本来の目的を忘れてしまう。活動の継続にも撤退にも勇気とエネルギーが要る。学生が「先輩が築いてきた活動を自分たちの代でやめてしまうのは・・・」という思考回路に陥らぬよう、「私たちはどこを向いて、何のために活動しているのか」ということをあらためて学生たちと考えつつ、次年度は活動していきたいと思う。

（ボランティアコーディネーター　中原美香）

●2017 年度「明学・大槌町吉里吉里復興支援プログラム」の主な活動

日にち（移動日含む）	内容（参加人数）
4/14（金）	吉里吉里学園中学部 3 年生が修学旅行の一環で明治学院大学に来校し、合唱や郷土芸能「大神楽」を披露
5/19（金）～5/22（月）	吉里吉里学園小学部運動会に参加（7 名）
6/2（金）～6/5（月）	スタディツアー（14 名）
8/1（火）～8/5（土）	・吉里吉里学園小学部で「コラボ・スクール」に参加（10 名） ・吉里吉里学園中学部で「学習支援」を実施（10 名）
9/3（日）～9/8（金）	吉里吉里学園小学部での授業「ふるさと科」に参加（8 名）
9/29（金）～10/2（月）	「吉里吉里大運動会」（地域の運動会）に参加（7 名）
11/17（金）～11/20（月）	吉里吉里学園小学部で「わんぱく広場」を実施（8 名）
2/4（日）～2/10（土）	吉里吉里学園中学部で「学習支援」を実施（6 名）
2/13（火）～2/18（日）	合同スタディツアー（陸前高田セクションと）（9 名）
2/16（金）～2/19（月）	吉里吉里学園小学部で「わんぱく広場」を実施（5 名+合同スタツアメンバー）
3/11（日）	「3.11 被災地応援イベント『～あの時と今～』」（8 名、職員 1 名） 横浜市民防災センターで横浜地域活動、「Do for Smile@東日本」プロジェクトの学生メンバーがワークショップ、パネル展示を実施
3/22（木）・3/23（金）	「大槌復興支援マルシェ」の「おおつちおばちゃんくらぶ」ブースにて出店ボランティア@有楽町駅前（延べ 12 名（陸前高田セクション 2 名含む））

◇吉里吉里学園中学部が修学旅行で明学を訪問

目　的	・明治学院大学を訪問することにより、刺激を受け、将来さまざまな選択肢があることを知ってもらう ・多くの人の前で、郷土芸能を発表することにより、自分たちの地域の魅力に改めて気づくきっかけとなる
場　所	明治学院大学白金キャンパス
活動内容	吉里吉里学園中学部 3 年生による郷土芸能の大神楽（だいかぐら）、合唱発表/大学内キャンパスツアー
活動日時	2017 年 4 月 14 日（金）9：50～13：00

実施概要

普段から学習支援活動で関わっている吉里吉里学園中学部 3 年生が、修学旅行の一環として明治学院大学を訪問した。はじめに、生徒がアートホール内で吉里吉里の郷土芸能である大神楽（だいかぐら）の発表と、合唱の発表を行った。その後、チャペル内を見学し、オルガニストによる演奏や実際に生徒がオルガンを弾いたりして楽しんだ。キャンパスツアーでは、班に分かれて、学生の案内で、図書館・教室・ヘボン像を見学した。

感想・活動を通して得た学び

郷土芸能・合唱の発表は、迫力があり、素晴らしかった。普段、吉里吉里での学習支援活動の時とは違う一面を見ることができた。初めて明治学院大学を訪れた生徒たちは、食堂で学食を食べたり、大学内のさまざまな場所を見学して楽しんでいるようすであった。

中学生が､大学で多くの人の前で郷土芸能･合唱を発表することはとても意味のあることだと考える。このような経験をすることは貴重であるし、この経験を今後に生かしてほしいと感じる。

今後に向けて

私たち学生が吉里吉里を訪れて活動することは多くあるが、吉里吉里の中学生がこちらを訪れて学生と関わる機会は滅多になく、このような機会は貴重であり重要である。明治学院大学がどのような場所なのか、普段吉里吉里で会っている私たち学生の大学内でのようすを知ること、自分たちの郷土芸能を発表することなどは、中学生にとってかけがえのない経験となるだろう。今後も続けていきたい。

（学生メンバー　社会学部社会福祉学科）

◇吉里吉里学園小学部運動会

目　的	新たなつながりを作ること。震災から経過した町の歩みを再確認すること
場　所	大槌町立吉里吉里学園小学部校庭
活動内容	吉里吉里学園小学部運動会の設営のお手伝い（ビデオでの記録等）
活動日時 参加人数	2017 年 5 月 20 日（土）8：00～5 月 21 日（日）20：00 7 名

実施概要

吉里吉里学園小学部の運動会に、テント設営や各プログラムで使用する備品の準備、運動会の記録としてのビデオ撮影等のお手伝いとして参加した。主に運動会の開会準備および閉会準備が中心となった活動である。また、運動会に関する活動以外では、吉里吉里カルタにも出てくる浪板不動滝へ実際に歩いて向かうといった「町を歩く」という活動も行った。震災から経過した町の歩みを再確認することで、学びを深めることを趣旨としたものである。

感想・活動を通して得た学び

普段わんぱく広場の活動に参加してくれている子どもたちが、学校という場で一生懸命に競技に参加している姿を見て感動した。また、明学生に気がつき声をかけてくれた時、嬉しく思うと同時に先輩方が築いてきたつながりを実感した。準備時は、普段関わることの少ない保護者の方々と関わる機会となり、貴重な時間を過ごさせていただいた。町歩きでは初めて浪板不動滝を訪れることができ、新入生も 2 名いたため、よい経験になったと思う。

今後に向けて

私たちの知っている子どもたちの違った一面を見ることのできた活動であり、普段関わることの少ない世代の方々と一緒に作業ができたりと貴重な時間を過ごした。少しでもニーズがそこにあるのであれば新たなつながりを築く機会にもなることが期待されることから続けていきたいと感じる。しかしながら、次にこの活動をするときは、もう少し内容を考えてから臨みたいと考える。参加学生各自が感じた反省をしっかりと還元したいと思う。

（学生メンバー　法学部法律学科）

◇スタディツアー

目　的	以前から活動を継続している学生が知った吉里吉里の魅力を、新しく私たちの活動のメンバーとなった学生に伝え、大槌の今とその魅力を知ってもらうこと
場　所	大槌町吉里吉里地区
活動内容	語り部による大槌町の案内/地域住民の方々から震災や町についての話を直接伺う/活動を継続している学生による町案内/調べ学習
活動日時 参加人数	2017年6月3日（土）～6月4日（日） 14名

実施概要

今年度のスタディツアーは、活動を行うなかで以前から活動を継続している学生が知った吉里吉里の魅力を、1 年生を中心に新しく私たちの活動のメンバーとなった学生に伝え、大槌の今とその魅力を知ってもらいたいという思いから行われた。実際に私たちの活動場所である大槌町に足を運び、東日本大震災の現状、命、町の魅力、そして私たちにできることは何かを考え、学ぶことを目的とし、2 日間かけて実施された。また、日頃の活動でお世話になっている地域住民の方々から震災当時のお話や、現在の町と地域住民のようすについて直接お伺いし、今後の活動について一人ひとりが考える時間となった。

感想・活動を通して得た学び

このスタディツアーは、4 月に明学に入学し、私たちの活動に参加を決めてくれた 1 年生にとって、初めて吉里吉里を訪れる活動となる。そのため、今年度は「見る」「知る」「伝える」という三本柱のテーマを立て、初めての学生でもわかりやすく、なおかつ吉里吉里で活動するうえで覚えておきたい場所についての事前学習と発表を課したことで、参加学生全員が主体的に学べるような工夫をした。結果、参加した学生からは、「実際に足を運んでみて、報道と現実の差を知ることができた」「事前学習が有効活用できた」といった意見が多く聞かれ、新入生にとっても上級生にとっても充実した活動となったと考える。

今後に向けて

震災から 7 年目を迎える今、私たちが地域のためにできることは何か、あらためて考える必要があると感じている。これまで多くの先輩方や先生方、職員の方々がこの活動に携わり、一つずつ築き上げてきた「つながり」を大切にしながら、地域の人たちとともに、町の復興に少しでも力になれたら嬉しく思う。貴重な生の声を聞ける環境や、活動をするうえで数多くのサポートがあることに感謝の気持ちを持ちながら、これからも活動を続けていきたい。

（学生メンバー　社会学部社会福祉学科）

◇コラボ・スクール

目　的	子どもが本来持っている力を引き出す
場　所	大槌町立吉里吉里学園小学部
活動内容	・学習の支援 ・体力向上のため、子どもたちとともにプールで遊ぶ
活動日時 参加人数	2017年8月2日（水）～8月4日（金） 13名（内、明治学院高等学校生徒2名、教員1名）

実施概要

コラボ・スクールは、大槌町教育委員会の主催で実施されている。私たちは夏休みの宿題を教えたり、ドリルの問題を一緒に考えたりした。その際子どもたち一人ひとりと向き合い、個人に合わせた支援を行うことを意識し取り組んだ。3 日間にわたる活動だったため、1 日の終わりにミーティングを行い、反省を次の日に生かすことに努めたので、臨機応変に活動できた。

また、今年は明治学院高等学校からも 2 名の生徒と 1 名の教員の参加があり、私たちとは異なる視点での活動への意見も伺えた。

感想・活動を通して得た学び

今年は例年の活動と異なる点が多く、戸惑うこともあった。しかし、自ら子どもたちに声を掛けたり、周りを見て動いたりしたことで次第に馴染むことができ、積極的に行動することの大切さを改めて意識する活動となった。

勉強の際には、ただ教えるだけにならないよう注意した。一緒に調べたり、ヒントを出したりし、子どもたちが答えを見つけられるように工夫した。

今後に向けて

活動の終わりには、多くの子どもたちから「また来てね」と声を掛けてもらった。この言葉から子どもたちに私たちとの関わりを楽しんでもらえたことが伝わってきて、やりがいを感じた。

ミーティングでは、3 日間子どもたちと過ごし距離を縮めるうえで役立ったことや工夫した点があがった。一方、反省点や課題もある。これらを生かし、子どもたちにとって良い環境がつくれるよう努めていきたい。そして、次回も「また来てね」と言ってもらうことができるよう、メンバーで協力して活動をつくっていきたいと考える。

（学生メンバー　心理学部教育発達学科）

◇学習支援

目　的	・「個」を尊重し、生徒一人ひとりが必要としているサポートをする ・生徒の「人間力」を育てる後押しをする
場　所	大槌町立吉里吉里学園中学部
活動内容	・学習会（8 月）：夏休み期間に学習会へ参加する生徒の勉強（夏休み課題や苦手な教科など）を支援する ・授業サポート（2 月）：生徒が学年末テストや高校受験を控えた時期に、私たちが実際の授業へ参加することでそれらの対策を支援する
活動日時 参加人数	・学習会：2017 年 8 月 2 日（水）13：00～15：00、10 名 8 月 3 日（木）・4 日（金）各 9：30～15：00、10 名 ・授業サポート：2018 年 2 月 5 日（月）～2 月 9 日（金）各 8：35～17：00、6 名

実施概要

8 月の学習会では、3 日間にわたって午前中は 9 年生、午後は 7、8 年生の学習を支援した。夏休み期間であるため生徒は主体的に、または先生方から声をかけていただくことで学習会に参加してくれた。生徒は主に夏休みの課題や、自力で解けない問題を持ち寄ったため、私たちは勉強を分かりやすく教えることや、生徒にとって学習そのものに対する興味・関心が高まるように努めた。

2 月の授業サポートでは、5 日間にわたって授業（主に英語と数学）に入り、各生徒に合った勉強を支援した。授業以外にも、9 年生の勉強を支援する放課後学習を実施し、学年末テストや高校受験の対策などに一緒に取り組んだ。登校から下校まで学校で過ごし、学校生活のようすがわかるように努めた。

感想・活動を通して得た学び

8 月の学習会では、3 年生のメンバーから「3 年間学習支援に関わり続けることで中学生の成長が感じられた」という声があり、本活動を継続してきたからこそ得られるものがあると感じた。他にも、生徒から大学生活のことや将来のことなどについて質問攻めにあった学生がいるなど、学習以外でも生徒にとって私たちの存在が少しでも刺激になればよいと思った。

2 月の授業サポートでは、6 日（火）に生徒朝会が行われ、生徒会やそれぞれの委員会の生徒が全校生徒の前で発言する姿が印象的であった。生徒数が少ないことは、生徒にとって人前に出る機会が多くなることも意味する。一人ひとりに役割が求められる点で「個」が尊重されていると感じた。

今後に向けて

8 月の学習会では、生徒に対して学生の数が多くなり、生徒 1 名対学生 3 名になるなど、生徒に負担をかけてしまった。本活動のあり方について再考する時期だということを学生メンバーで共有するようになった。そこで、2 月の授業サポートの時、私たちの活動を客観的に評価していただくために生徒や保護者の方々、先生方を対象としたアンケートを実施した。率直かつ多様な回答を得ることができ、現在その結果を精査中だ。本活動は今まで以上にその意義が問われている。常に地域の方々の声に耳を傾け、私たちにできることは何かを学生間で議論していきたい。

（学生メンバー　法学部消費情報環境法学科）

◇ふるさと科

目　的	自分たちの住む地域の文化や方言の良さを再確認してもらう
場　所	大槌町立吉里吉里学園小学部
活動内容	吉里吉里カルタを使用し、吉里吉里の方言や文化に触れる
活動日時 参加人数	2017年9月4日（月）～9月7日（木）（※4日は準備日） 8名

実施概要

「ふるさと科」は、大槌町が震災後に導入した復興教育科目である。この科目の授業の一部として、明学生が3日間､吉里吉里学園小学部3年生の授業に入り、吉里吉里の豊かな方言や文化を記録し明学生と地域の方々との協働で2015年に完成した「吉里吉里カルタ」を生かした授業を、明学生主導で展開した。カルタを使用することで児童も簡単な方法で吉里吉里の魅力に触れることができ、疑問として出てきたことを、地域の方にインタビューという形で質問することで、子どもたちと地域の方をつなぐ機会ともなった。

感想・活動を通して得た学び

今年度ふるさと科の活動を行うにあたり、吉里吉里カルタの制作に携わった学生メンバーが卒業してしまった状況で、私たちだからできるふるさと科の活動をするという目標を立てて臨んだ。最終日に子どもたちに描いてもらった絵日記から吉里吉里語を楽しみながら学べたということがわかり、また参加学生メンバーも本活動を通して吉里吉里の魅力に再度触れることができたことから、この目標が達成できたと感じる。また、ふるさと科を通して子どもたちが吉里吉里語や文化について積極的に学ぶ姿が印象的であった。

今後に向けて

活動実施後のミーティングでは具体的な反省点や改善点が出てきた。来年度も実施することが計画されているため、そこに向けて準備を進め、今年度以上の成果が出せるよう取り組みたい。また、私たちにとっても、授業に入れていただき進行を務めるのは大変貴重な機会であることを自覚し、ふるさと科を通して、吉里吉里の方言や文化の継承に関わりながら吉里吉里の復興に貢献していきたい。

（学生メンバー　社会学部社会福祉学科）

◇吉里吉里大運動会

目　的	新たなつながりを築くこと
場　所	大槌町立吉里吉里学園小学部校庭
活動内容	吉里吉里大運動会前日および当日準備のお手伝い
活動日時 参加人数	2017 年 9 月 30 日（土）8：00　～10 月 1 日（日）20：30 7 名

実施概要

吉里吉里の地域の皆さんが集まり行われる吉里吉里大運動会の前日のコースの線引きなどの会場設営の準備や当日のイス出し、備品の出し入れ、運営の手伝い、閉会後の片付けの手伝いをさせていただいた。競技には吉里吉里カルタを取り入れていただいたものもあった。運動会後の懇親会にもお招きいただくなど、地域の方々と一緒に体を動かす活動となった。

感想・活動を通して得た学び

普段の活動では子どもたちとの関わりが中心であり、このような形で地域の方々と関わる機会はとても貴重であると感じた。お祭りと同じように吉里吉里大運動会は吉里吉里の地域の方々にとって重要なイベントであり、地域の活気が伝わってきた。そういった「場」に明学生が参加させていただいていることの意味を学生各自が考える活動となったと考える。新たなつながりを築いた学生も多く、今後の活動に何らかの形で還元して行けたらよいと思った。

今後に向けて

吉里吉里の地域の皆さんが集まる場所に明学生が参加させていただいていることの貴重さを忘れてはならず、また感謝の気持ちも常に持たなければならないと考える。先輩方が築いてきたつながりと私たちが新たに築いていくつながりを確認する場としても、吉里吉里大運動会への参加は有意義であると感じる。また、岩手大学の学生との交流があったことも、我々の活動の今後についてのヒントになった。

（学生メンバー　法学部法律学科）

◇わんぱく広場（11 月）

目　的	子どもが本来持っている力を引き出すこと
場　所	大槌町立吉里吉里学園小学部
活動内容	体力向上のための体育館での運動や、工作などの創作活動、学力向上のための勉強会を行う
活動日時 参加人数	2017年11月18日（土）13：00～15：00、11月19日（日）9：30～11：30/13：00～15：00 8 名

実施概要

わんぱく広場は、震災によって安心して遊ぶ場所がなくなってしまった子どもたちに、安心安全な遊び場を提供することを目的に始められた。震災から 7 年たった現在は地域のニーズ変化にともない、「子

どもが本来持っている力を引き出すこと」を目的に活動を行っている。吉里吉里学園小学部の体育館をお借りし、ドッジボールなどの動の遊びと折り紙などの静の遊び、勉強会を行うなかで子どもたちに楽しんでもらうだけでなく、自分の持っている力に気づくことができるようにすることを心がけている。

感想・活動を通して得た学び

今回のわんぱく広場では、動の遊びのなかで子ども同士のトラブルが発生する場面があった。事前のリスク管理で対処法を考えてあったものの、子どもたちの勢いにうろたえて対処が遅れてしまい、私たちも子どもたちも、どう決着をつければよいかわからなくなってしまった。子ども相手でも、その場しのぎの言い訳やとりなしは通用しないし、かえって混乱を招いてしまうこともある。監督者として、毅然とした対応が求められると感じた。

今後に向けて

吉里吉里学園に通う子どもたちは学年問わず仲がよく、思いやりのある子どもが多いと感じる。小学部から中学部までの9年間同じクラスで過ごす彼らの団結力は素晴らしく強い。その反面で、我々のような大学生や他の地域の人と関わる機会は非常に少ないのではないだろうか。この活動は、その貴重な機会であるといえるだろう。わんぱく広場を通して、吉里吉里の未来を担っていく子どもたちに成長や刺激を与えることができたらよいと思う。

（学生メンバー　社会学部社会福祉学科）

◇わんぱく広場（2月）

目　的	子どもが本来持っている力を引き出すこと
場　所	大槌町立吉里吉里学園小学部体育館
活動内容	体力向上のための体育館での運動や、工作などの創作活動、学力向上のための勉強会を行う
活動日時 参加人数	2018年2月17日（土）13：30〜15：30、14名 2月18日（日）10：00〜11：30/13：00〜15：00、 9名

実施概要

今回のわんぱく広場では、合同スタディツアーに参加した陸前高田セクションのメンバーとともに活動した。17日にはドッジボールや鬼ごっこなどの動の遊びと、折り紙やミサンガづくりなどの静の遊びに分かれて子どもたちと遊び、18日には午前中に宿題や自主学習をする勉強会、午後に「スノードーム」「円筒飛行機」「けん玉」の三つに分かれて工作を行った。学生の数が普段の活動よりも多かったため、子どもたちのようすや成長を見守ることができ、有意義な活動となった。

感想・活動を通して得た学び

今回の活動は震災から7年が経過し、今後の活動について考え、模索するなかでの活動となった。吉里吉里には公園などの遊ぶ場所が少なく、休日は家で一人で過ごすことが多いという子どもたちにとって、わんぱく広場は学校以外で友だちと会うことができて、思う存分遊ぶことができる重要な機会であることがわかった。また、子どもたちと学生がお互いに顔と名前を覚えているという関係性も大事にしていくべきだと感じた。今後もわんぱく広場の活動を続けていく意味があると感じた。

今後に向けて

今回の活動では陸前高田セクションのメンバーから客観的な視点の意見をもらうことができ、わんぱく広場の活動の必要性を再確認することができた。また、大きな喧嘩や怪我が起きることなく、円滑に活動を進めることができた。これからもリスク管理を徹底しながらわんぱく広場の活動を継続し、この活動が子どもたちが安全で安心して遊ぶことができる場所であり続けられるよう尽力していきたい。

（学生メンバー　社会学部社会福祉学科）

◇学生による現地での自主活動

セクションとしての公式活動以外の自主的な活動について報告する。

お祭りへの参加

吉里吉里天照御祖神社例大祭への参加は、一昨々年までアーカイブ活動の一環として行っていた。一昨年からは、セクションのメンバーが自主的に参加、見学する形となった。

このお祭りで披露される郷土芸能は「大神楽」「虎舞」「鹿子踊り」の３団体ある。私はそのうちの一つである「大神楽」に所属し、甚句や「ちゃかまこ」と呼ばれる楽器を担当させていただいた。活動は、大神楽の皆さんの練習に３日間入り、その後２日間にわたり行われる祭りに参加した。準備では、餅作りを手伝わせていただいた。

当日は、吉里吉里を練り歩き、各家庭や御宮前で神楽を披露した。自身の地元の祭りとは規模も内容も異なり、地域全体で祭りを作り上げていくところを見て、人々の強い結束力を感じた。そして、吉里吉里の郷土芸能を身近で見ることができ、とても感動した。

お祭りを通じて、吉里吉里の方々と密接に関わることができた。新参者の私でも快く迎え入れてくださり、困ったことがあれば助けてくださる親切な方ばかりで、温かさを感じた。非常に貴重な機会をいただけたことに感謝したい。

（学生メンバー　文学部フランス文学科）

きりっ子文化祭

吉里吉里学園小学部の文化祭である「きりっ子文化祭」。ここで子どもたちは学年ごとに発表を行う。各学年学んできたことを生かす発表が印象的だった。３年生の発表では、９月に私たちが関わった「ふるさと科」での学びを生かした劇を披露していて、一緒に学んだ吉里吉里カルタの内容も入っていたことが印象的であった。今回きりっ子文化祭を訪れた学生２名は、PTA 発表のダンスに参加させていただいた。事前に披露する演目のビデオをいただき練習していったが、現地を訪れるのは当日になるため、合同での練習はできなかった。しかし PTA の皆さんは優しく受け入れてくださり、私たちにとって普段関わる機会があまりない保護者の方々に混ぜていただくことができたのはとても貴重な機会であると感じた。ふるさと科で関わることのない学年、わんぱく広場で会うことのない児童もいるなかで、子どもたちのようすを目の当たりにするのはとてもいい機会であった。また、作品展示もあり、家庭科や図工で作った作品たちを見ることで、普段子どもたちがどのような取り組みをしているのかを感じることができた。

（学生メンバー　社会学部社会福祉学科）

3.2 合同スタディツアー

目　的	普段異なる場所で活動を行う大槌町吉里吉里・陸前高田の両セクションが互いの活動場所を訪れ、町を知り、地域の方と交流することでさまざまなことを吸収し今後の活動につなげる
活動日､場所	2018 年 2 月 14 日（水）～2 月 17 日（土） 宮城県気仙沼市、岩手県陸前高田市、岩手県上閉伊郡大槌町
参加人数	大槌町吉里吉里復興支援プログラム：5 名、陸前高田復興支援プログラム：4 名、 引率 1 名（中原ボランティアコーディネーター）

●行程

日程	場所	活動内容
2/13（火）	東京都	夜、池袋から夜行高速バス「けせんライナー」で陸前高田へ
2/14（水）	陸前高田市	朝、陸前高田市役所到着
	陸前高田市	被災地見学 気仙中学校跡地､一本松遠景､かさ上げ地商店街（アバッセたかた）､普門寺、海岸沿いを見学
	気仙沼市	リアス・アーク美術館にて常設展示「東日本大震災の記録と津波の災害史」､南町紫神社前商店街を見学
2/15（木）	陸前高田市	長洞元気村の方々と昼食づくり。お話を伺う
	陸前高田市	アバッセたかた見学
2/16（金）		陸前高田から大槌へ移動
	大槌町	一般社団法人おらが大槌夢広場による語り部ガイドツアー
	大槌町	おおつちおばちゃんくらぶにてデコ鮭を作成
2/17（土）	大槌町	町立公民館吉里吉里分館（体育館）にて「お茶っこの会」参加。 地域の方々と交流
	大槌町	町立吉里吉里学園小学部体育館にて､「わんぱく広場」実施。 地域の子どもたちと交流
	大槌町	夜、吉里吉里一丁目バス停から夜行高速バス「遠野釜石号」で上野駅へ
2/18（日）	東京都	朝、上野駅着、解散

（学生メンバー　心理学部心理学科）

●それぞれのセクションからの参加学生の声

【大槌町吉里吉里セクション】

感想・活動を通して得た学び

印象に残ったことは、陸前高田と吉里吉里では大きく復興の状況に違いがあること。過疎化や産業の問題、特にコミュニティの問題が深刻であることは、陸前高田も吉里吉里も共通していたと思う。さらに、語り部さんのお話や現地の方々から現状や心境を伺ったことで、地域の方から望まれるボランティアとは何かをしっかりと吟味し、次回に生かすための経験を身につけることができた。

今後に向けて

陸前高田・吉里吉里のどちらも、お会いした方々の「伝えたい」という思いを強く感じた。津波への対策は、ただ「防潮堤を築けばいい」のではなく、知識をしっかりと身につけ自主的な行動ができるようになってほしいと私たちに投げかけていた。この皆さんの思いを発信していくことも、私たち学生の役割の一つであると感じた。多くのことを学ばせていただいていることに感謝し、望まれるボランティア活動を目指すためにも自ら知る姿勢を持ち続けることが重要であると考える。

（学生メンバー　心理学部教育発達学科）

【陸前高田セクション】

感想・活動を通して得た学び

今回の陸前高田・吉里吉里の合同スタディツアーでは、普段の活動に加えてもう一方のセクションの活動をともに行ったため、両地域に共通する問題やそれぞれの復興状況を知ることができた。共通する問題としては「心の風化」があげられ、震災の記憶を薄れさせないためにも語り継ぐことが重要であるということを実感した。

今後に向けて

東日本大震災から７年が経ち、ボランティアとして大学生である自分たちにできることは、「心の風化」を防ぐために、現地を訪れて学んだことを他の人たちに伝えていくことであると感じた。また、今後は現地を訪れて学ぶだけでなく、きらりんきっずでの活動、けんか七夕まつり・うごく七夕まつりの活動を通して地域の方々との交流を深めていきたい。

（学生メンバー　経済学部経営学科）

3.3 陸前高田復興支援プログラム

コーディネーター総括

2017 年度も、多くの方々のご理解・ご協力をいただき、無事に 1 年の活動を終えることができた。お礼を申し上げたい。今年度は前年度の路線をおおむね継承し、「震災を風化させない」「自分たちの住む地域での防災を考える」「陸前高田の魅力を発信する」ことを意識した活動となった。

昨年度から継続の活動としては、7 月 15 日（土）の「きらりんきっず」での夕涼み会と、8 月 7 日（月）の「けんか七夕」「うごく七夕」の活動がある。夕涼み会では、昨年同様「お化け屋敷」の運営のほか、盆踊りなどに学生たちが加わった。毎年 8 月 7 日に開催される、市内高田町の「うごく七夕」（昨年度に続き、荒町組にお世話になった）および気仙町の「けんか七夕」の二つの七夕まつりも、学生が毎年楽しみにしている伝統行事の一つである。今回は台風が近づくなかでの開催となった。

この台風の影響で、8 月 8 日（火）～9 日（水）に予定されていた市教育委員会主催の市内小学生を対象とした宿泊型のイベントも 7 日夜に開催中止が決まり、東京から陸前高田へ向かう予定だった学生たちに出発予定数時間前に「来なくてよい」旨連絡し、バスチケットのキャンセルを手配するなど、「七夕まつり」の引率中に対応に追われた。引率者がいる場合といない場合の対応に差が出ることも考えられ、危機管理は、今後も取り組むべき課題であると感じた。

今年度の新しい取り組みとしては、市教育委員会が実施している「たかた子どもキャンパス」の活動がある。市内の小学生を対象に土曜日の午前中に工作をしたり遊んだりするこの活動に今年度は 2 回参加し、2 度目は学生たちの「持ち込み企画」として、子どもたちと「バルーンアート」を作って楽しんだ。小学生からも「時間が経つのを忘れた」など好評で、学生たちも活動に手ごたえを感じたようだ。

また、かさ上げされた土地に 2017 年 4 月に完成した商業施設「アバッセたかた」に入居している店舗や隣接してオープンした図書館へのヒアリングに、岩手大学の五味壮平教授らのご厚意により参加させていただいた。商売をされている方の声を伺う機会が今まであまりなかったこと、また、図書館では、ただ本が借りられればよいのではなく、利用者にとって居心地の良い「滞在型図書館」を目指した思いやお話を伺えたことは、参加した学生たちの大きな学びの機会となった。

ほかにも、学生たちだけで現地で数時間テーマを決めながら「まちあるき」をしつつ土地勘を養い、町で会った方々との会話を通じて、陸前高田の「いま」を感じる活動も導入した。学生たちが陸前高田の方々の「生の声」を知り、市の魅力を発信するためにも、もっと積極的に町に出てほしい。

また、本ボランティアセンターの他の学生たちとともに、横浜市民防災センターにおける陸前高田の現状や学生の活動を発信するパネル展示や、学内のイベントでの陸前高田の郷土料理等の調理・販売など、震災の風化を防ぎ地域の魅力を発信する活動も、徐々にだが広がりを見せてきている。

陸前高田市では、市役所の新庁舎が旧高田小学校の跡地に建てられることが決まった。また、2017 年 4 月には、前述のように「アバッセたかた」が完成。周辺にスーパーや図書館、飲食店などが次々とオープンし、市内の別の場所で仮設営業していた飲食店などが今も続々と店舗を建設している。そしてアバッセたかたのそばには、2018 年 4 月から「BRT 陸前高田駅」が現在の市役所近くから移転する。このように、沿岸部に新たな「市街地」が生まれつつある。防潮堤を造り土地もかさ上げしたとはいっても、震災から 7 年で海に向かって町を作っていくことに懸念を表明される方もいらっしゃる。さまざまな声に耳を傾けながら陸前高田のこれからを見守り、また自分たちの地域の沿岸地域の防災・減災を考えていくことは、私たちができる一つの役割かもしれない。

（ボランティアコーディネーター　中原美香）

●2017 年度「陸前高田復興支援プログラム」の主な活動

日にち（移動日含む）	内容（参加人数）
5/1（月）	横浜キャンパス・学生職員協働「防災訓練」で「災害○×クイズ」を実施
5/11（木）・5/18（木）	新入生勧誘説明会
5/27（土）・5/28（日）	大学祭「戸塚まつり」で岩手県の郷土料理「ひっつみ」を販売
6/2（金）～6/5（月）	スタディツアー（8 名）
7/14（金）～7/17（月）	きらりんキッズ「夕涼み会」に参加（6 名）
8/5（土）～8/9（水）	・「けんか七夕」に参加（4 名） ・「うごく七夕」に参加（4 名）
11/1（水）～11/3（金）	大学祭「白金祭」で陸前高田の味噌を使用した「玉こんにゃく」を販売
11/24（金）～11/27（月）	「たかた子どもキャンパス」に参加（2 名）
2/13（火）～2/18（日）	合同スタディツアー（大槌町吉里吉里セクションと）（9 名）
2/23（金）～2/25（日）	「たかた子どもキャンパス」に参加（5 名）
3/2（金）～3/5（月）	「陸前高田グローバルキャンパス大学シンポジウム 2018」に参加（5 名）
3/11（日）	「3.11 被災地応援イベント『～あの時と今～』」（2 名、職員 1 名） 横浜市民防災センターで横浜地域活動、「Do for Smile@東日本」プロジェクトの学生メンバーがワークショップ、パネル展示を実施
3/22（木）・3/23（金）	「大槌復興支援マルシェ」の「おおつちおばちゃんくらぶ」ブースにて出店ボランティア@有楽町駅前（2 名。大槌町吉里吉里セクションの活動に参加）

◇横浜キャンパス防災訓練での防災講座

目　的	参加学生の防災意識を高める、震災について伝える
場　所	明治学院大学横浜キャンパス体育館
活動内容	防災クイズ
活動日時	2017 年 5 月 1 日（月）11：00～11：20
参加人数	14 名（陸前高田メンバー）

実施概要

「Do for Smile@東日本」プロジェクト陸前高田復興支援プログラムは、これまでの復興支援活動での学びを生かし、防災講座として集まった学生に向けて防災クイズを行った。発生から約 7 年が経過する東日本大震災をいつまでも忘れないでほしい、そして、今後いつ起こるかわからない災害に対して防災の意識を高めてほしいという思いで企画した。また今回は、対象が学生であったため、楽しみながら学んでもらうためにクイズ形式を選び、防災を呼びかけた。

感想・活動を通して得た学び

出題する問題についてチーム内で議論した際、震災に関してチーム内では共通の理解があっても他の

学生にとっては初めて聞くようなことを、どうすればうまく伝わるかについて最も時間をかけて考えた。一つの工夫として、○×クイズで場所を区切るために使用したテープは、震災当日、実際に岩手県陸前高田市の市民体育館に到達した津波の高さと同じ長さにした（15.8 メートル）。この工夫により、参加学生に津波の高さに関して当時のリアルなようすが、より強く伝わったのではないかと思う。

今後に向けて

イベント終了後、参加学生からは、「初めて知ることが多くて勉強になった」や「体を動かすクイズだったので楽しめた」などの声をもらい、この企画に意味があったと実感し嬉しく感じたと同時に、チームとしても個人としても、もっと多くの人に現地で得た学びや防災について伝える機会を増やしていきたいと強く思った。そのために、今後より一層、震災や防災についての知識を増やす努力をしていきたい。

（学生メンバー　社会学部社会福祉学科）

◇スタディツアー

目　的	震災を知る、陸前高田の今を知る、今後自分たちに何ができるかを考える
場　所	岩手県陸前高田市、大船渡市
活動内容	被災地見学、現地の方のお話を伺う、産直はまなす感謝祭への参加
活動日時	2017 年 6 月 3 日（土）～6 月 4 日（日）
参加人数	8 名

実施概要

新メンバーが、活動拠点の一つである岩手県陸前高田市を知るためのツアーとして実施された。1 日目は被災地見学として、旧道の駅タピック 45 や旧気仙中学校などをめぐり、語り部の實吉義正さんから当時の状況や現在の陸前高田についてのお話を伺った。さらに田村満さんにキャッセン大船渡を案内していただき、現在の陸前高田が抱える問題についてお話を伺った。2 日目は産直はまなすで開催された感謝祭に参加し、戸羽初枝さんらにお話を伺った。

感想・活動を通して得た学び

初めて被災地に足を運び、実際に震災当時のまま残る建物を目にしたときは衝撃だった。一方で、復興が進んでいるともいえる「かさ上げ」が行われ、工事用の車両が多く走っている高台の風景が広がっていたことも印象に残っている。当時の状況についてのお話は生々しく悲しいものだった。「風化させてはいけない」という言葉の意味を強く実感し、同じ震災でもそれぞれ違う受け止め方があることを改めて知ることができた。

今後に向けて

現地の方々にお話を伺った際、皆さんが必ず「自分たちのこの経験を防災・減災に生かしてほしい」とおっしゃっていた。震災から時間が経ち、支援の方法も変化するなかで、首都圏で暮らす大学生の私たちに何ができるのかを考えたとき、このことは常に共通で意識しているべき課題である。そして、これからの活動のなかで、より異なる立場、世代の方々からさまざまな視点からのお話を伺い、震災や陸前高田への理解を深めていく必要があると感じた。

（学生メンバー　社会学部社会学科）

◇「きらりんきっず」夕涼み会

目　的	・陸前高田の皆さんと子どもたちにとってよい思い出になるように盛り上げる ・地域の方々と交流し、リアルタイムでのニーズを知って今後の活動に生かす
場　所	高田大隅つどいの丘商店街（陸前高田市高田町）
活動内容	陸前高田市の子育て支援団体NPO法人きらりんきっず主催の夕涼み会での運営準備の手伝い、お化け屋敷の企画・運営/被災地見学
活動日時 参加人数	2017年7月15日（土）～7月16日（日） 6名

実施概要

7月15日に陸前高田市の子育て支援団体NPO法人きらりんきっず主催の夕涼み会で運営準備の手伝い、お化け屋敷の企画・運営を行い、夜には地域の方と一緒に盆踊りをした。7月16日には、旧道の駅タピック45、奇跡の一本松、旧気仙中学校、八木澤カフェに行き、被災場所を見学した。

感想・活動を通して得た学び

地域の方と交流することで、地域の方の陸前高田を大切に思う気持ちや、子どもたちへの愛情を感じることができた。夕涼み会が、地域の方にとって心の支えであることや、多くの人をつなぐ必要不可欠な存在であると感じた。そして、被災場所を実際に訪れたことで改めて被害の大きさを感じ、風化させてはいけないと思った。実際に陸前高田に足を運んでわかることがたくさんあると強く感じた活動になった。

今後に向けて

お化け屋敷に何度も来て楽しんでくれる子どもが多かったため、次年度も夕涼み会でお化け屋敷を企画させていただけたら嬉しい。そして、他の場所から来ていたボランティアの方もいたため、地域の方だけでなく、ボランティアの方からも話を聞き、私たちの活動に生かすきっかけにできたらよいと思う。

（学生メンバー　社会学部社会福祉学科）

◇けんか七夕

目　的	・伝統ある「けんか七夕まつり」を盛り上げる ・まつりに携わる方々の、まつりに対する思いを知る
場　所	本来は陸前高田市気仙町だが、かさ上げ工事のため、市内高田町
活動内容	祭りの準備、参加、片付け
活動日時 参加人数	2017年8月6日（日）8：00～8月8日（火）12：00 4名

実施概要

けんか七夕まつりは900年の歴史を持ち、ロープを引っ張り合い、山車をぶつけ合うまつりである。本番は8月7日と決まっていて、前日にはけんか七夕まつりの準備、当日は祭りに参加、翌日は片付けを行った。具体的には、山車の装飾や会場の整備をした。作業の合間に、地元の方や私たちのように他の地域からのボランティアの方々からお話を伺った。

感想・活動を通して得た学び

開催が難しくなってきているまつりであり、ボランティアなしでは山車を引くことも難しい現状になってきていることを知った。しかし、地元の方々はまつりに対して強い思いがあることを、実際にまつりに参加することで知り、触れることができた。

今後に向けて

まつり会場や参加者など、年々状況は変わっていくため、今後も継続して関わって町の変化も見ていきたい。まつりに参加して感じた魅力や、地元の方々のまつりに対する思いを発信していきたい。

（学生メンバー　社会学部社会福祉学科）

◇うごく七夕

目　的	・まつりに参加することで、地域の活性化に貢献する ・長年続いているまつりに参加することで、現地の人々がまつりにかける思いを知る ・準備や片付け、当日のまつりを通じて、自分たちから積極的にコミュニケーションを取る
場　所	陸前高田市内アバッセたかた周辺、荒町地区
活動内容	まつり前日にまつりの準備、山車の飾りつけ/まつり当日の山車引き、まつりの手伝い
活動日時 参加人数	2017年8月6日（日）～8月7日（月）（※8日はけんか七夕片付けお手伝いに参加） 4名

実施概要

陸前高田市高田町で毎年8月7日に行われている歴史あるまつりを盛り上げる手伝いをさせていただいた。高田町内のさまざまな地区で山車を作り練り歩くが、昨年同様、今年も荒町組の皆さんにお世話になった。本学のボランティア以外にも、お茶の水女子大学や、関西大学からボランティア学生の方々が来ていた。まつりの前日は、山車の飾りつけの準備後、近くの温泉に行き夕食は懇親会を通じて交流した。まつり当日は、台風が近づいていてあいにくの大雨だったが、山車を中田団地付近の倉庫から4月にオープンした商業施設「アバッセたかた」まで引き、他の地区の山車との見せ合いをした。その後、荒町地区で女性陣が用意してくださった昼食をいただいた後、小さい山車を引いて老人ホームを訪問した。夜にはライトアップされた山車を引き、アバッセたかた周辺を練り歩き、倉庫まで戻り活動を終えた。

感想・活動を通して得た学び

この活動を通して、まつりが地元の人に与える影響を感じることができた。また高田町の皆さんがまつりを必要としていて、さらにそれらは、彼らをつなげるのに大きな役割を担っていると感じた。今回は、他大学の方とも一緒に活動したので、同じ陸前高田で活動している学生から意見を聞くことができ、よい経験になった。今年のまつりは、かさ上げ地での初めての開催だった。一からまちを再びつくって

いる地域なので、復興がまた一歩進んだことを感じた。

今後に向けて

高田町の方々にとって大切な伝統行事であるこのまつりは、地域には必要なものであると感じた。私たちボランティアがこれからやるべきことの一つとして、被災地としての陸前高田を発信するのではなく、このような伝統があることや、伝統行事であるうごく七夕まつりを大切している方々の思いなどを伝えることがある。これからも陸前高田の人々の地元愛や思いを理解し、考え、つながっていきたいと思う。

（学生メンバー　法学部法律学科）

◇たかた子どもキャンパス（11 月）

目　的	・市内の小学生たちに勉強や遊びの充実した時間を過ごしてもらう ・陸前高田市内の小学生たちと交流する
場　所	陸前高田市コミュニティホール
活動内容	子どもたちの工作（クリスマスリースや飾り作り）の手伝い
活動日時、参加人数	2017 年 11 月 25 日（土）9：30～12：00（※25 日午後、26 日は「アバッセたかた専門店街＆図書館紹介プロジェクト」に参加。 https://www.meijigakuin.ac.jp/volunteer/activity/doforsmile/news/rikuzentakata/news/201804-houkoku.html） 2 名

実施概要

陸前高田市教育委員会主催の「たかた子どもキャンパス」で、クリスマスリースや飾り作りの運営の手伝いを行った。また、子どもに怪我のないよう見守った。

＊たかた子どもキャンパス：土曜日午前中に市内の小学生が学習活動や文化体験活動、地域住民等との交流活動などさまざまな体験活動に取り組む、市教育委員会が主催するプログラム。

感想・活動を通して得た学び

子どもたちが安全で楽しい活動をするサポートができればよいと思い、今回の企画に参加させていただいた。静かに制作したり、走り回ったりなど、個性豊かな子どもたちに対して、職員の方々がそれぞれに合った対応をしていた。子どもたちと職員の間には強い信頼関係があるように感じた。

今後に向けて

子どもたちが楽しむことのできる企画を提案する。そして、子どもたちや職員の方々とより強い関わりをもてるように、たかた子どもキャンパスに継続的に参加したいと思った。

（学生メンバー　経済学部経営学科）

◇たかた子どもキャンパス（2 月）

目　的	・高田に住む子どもたちと関わることで、子どもたちの視点から考え、「憩いチーム」の活動に生かしていく ・子どもたちに楽しんでもらう
場　所	陸前高田市コミュニティホール
活動内容	バルーンアート
活動日時 参加人数	2018 年 2 月 24 日（土）9：00～12：30（※午後は「食」をキーワードにまちあるき） 5 名

実施概要

たかた子どもキャンパスへの持ち込み企画として、市内に住む小学生 12 名とバルーンアートを実施した。参加学生は事前に練習を行い、作り方を覚えて当日に臨んだ。作り方を教え、一緒に作ることを通して、子どもたちと近い距離で交流することができた。

感想・活動を通して得た学び

子どもたちは吸収が速く、作り方をすぐに覚えていたのが印象に残った。はじめからバルーンが割れることを恐れずに思い切りよく、目の前のことに全力で取り組む子どもたちの姿はとても輝いていて、よい刺激になった。終了後提出されたアンケートでも「楽しかった」「あっという間に時間がすぎて、おなかがすいていたのを忘れてしまった」「またやりたい」など、楽しんでくれたようすがわかり、この企画を実施してよかったと思った。

今後に向けて

私たちが事前に用意していた 4 種類の作り方を小学生がすべて覚え、自分で応用して新しく作っている子どもが多かった。そういった場合にもしっかりと対応できるように、学生はより多くの作り方やアイデアを用意しておくべきである。

（学生メンバー　社会学部社会学科）

◇陸前高田グローバルキャンパス大学シンポジウム 2018

目　的	市外から訪れて復興支援活動などに携わる方や若者も含めた市内の方が、陸前高田へどのような思いを抱き活動しているのかをつかみ、私たちの活動に生かすために大切なことを改めて学ぶ
場　所	陸前高田グローバルキャンパス
活動内容	シンポジウムに参加し、さまざまな団体・大学の方の取り組みについて学び吸収するとともに、交流を図る
活動日時 参加人数	2018 年 3 月 3 日（土）～3 月 4 日（日） 5 名

実施概要

陸前高田グローバルキャンパス大学シンポジウムは、陸前高田で活動する大学や市内で活動する団体などの取り組み内容の発表を通じて、市民と大学関係者の相互交流を目指して2017年から年に1度実施されている。今年は3月3日（土）・4日（日）にかけて行われた。私たち学生メンバーは今回が初参加である。また3日には市街地も歩いて回った。

感想・活動を通して得た学び

今回の活動を通じて、私たち自身から陸前高田の方とつながりを作り続ける姿勢が大切であると感じた。つながることを通じて、陸前高田の方の思いを知ることができる。そして思いを知ることで初めて私たちの活動は成り立つのだと思う。とても重要な視点であると気づくことができた。

今後に向けて

震災から7年が経ち、既存の活動にとらわれない活動が求められるなか、私たちは改めて活動を見直す必要がある。そしていかにして陸前高田の方の思いと活動を結びつけるのか、今後はより地域の方の思いに寄り添えるような、元気を届けられるような活動を目指していきたい。

（学生メンバー　法学部法律学科）

3.4 大学間連携災害ボランティアネットワーク

◇仙台七夕まつり

目　的	東北学院大学を中心に 2011 年夏に立ち上がった「大学間連携災害ボランティアネットワーク」に本学も継続的に参加している。仙台七夕まつりのボランティアはその活動の一つである。
場　所	宮城県仙台市 勾当台公園市民広場
活動内容	会場運営補助/ゴミの回収・分別/パンフレット等の配布
活動日時 参加人数	2017 年 8 月 7 日（月）16：00～22：00 10 名（一部引率あり）

実施概要

・会場運営補助（七夕伝承館、織姫像「ORIHIME 短冊」コーナー、浴衣着付け体験コーナー等）
・ゴミの回収・分別
・パンフレット等の配布

感想・活動を通して得た学び

仙台七夕まつりは、東北三大まつりの一つと称賛されるだけあり、想像以上に大規模なまつりで驚いた。また、東日本大震災後もこうして伝統が受け継がれていることに対し、仙台の強さを感じた。台風の影響で 2 日目が中止になってしまったことは残念だったが、運営側という貴重な経験をさせていただくことができた。来場者が会場で過ごすひとときに関わることができ、充実した活動となった。

今後に向けて

たとえ現地に行き継続的に活動することは難しくても、今自分にできることをしていきたい。現地に行かせていただいたからこそ知ったことがあり、それを周囲の人に伝えていくことは、この経験を自分だけのものにせず、かつ今できることだと考えたからだ。また、今回は仙台七夕まつりという、仙台の魅力を知ることができた。私は別の機会で東日本大震災による仙台の被害を目にしたことがあるが、こうした被災地といわれる現地の現状だけでなく魅力を伝えていくことも大切にしたい。

（社会学部社会福祉学科）

4　明学レッドクロス（日本赤十字社とのボランティア・パートナーシップ）

職員総括

明治学院大学が日本赤十字社とボランティア・パートナーシップを締結してから５年目を迎えた。その時結成された明学レッドクロス学生メンバーの活動も、日本赤十字社から依頼されるボランティア活動に留まらず、自分たちでやりたい活動を見出せるようになってきた。

年２回（4 月・10 月）行われる白金キャンパスでの学内献血呼びかけ活動では、献血者数の減少に苦慮していた。1 年生メンバーより、授業のあるなか 40 分間の献血時間を取ることが難しいこと、都内の献血ルームが魅力的に変貌していることから、献血促進に向け特色ある献血ルームを紹介するリーフレット作成の提案がなされた。

この作成に関し、事前に東京都赤十字献血センターに連絡し許可を得て、印刷前に内容等を確認いただくこととした。そして、夏季休暇中、都内の主要な献血ルームを４グループに分かれ訪問・インタビューをした。それぞれのグループがインタビュー結果を持ち寄り、まとめ方を協議してリーフレットを完成させ配付することができ、達成感を得られた。

また、新しい試みとして防災に興味を持つメンバー3 名とともに、10 月に港区高松地区で行われた防災炊き出し訓練に参加した。やはり、見聞きするのと実際に体験するのとでは、学びの内容に大きな差があり、このような訓練を重ねることが、災害に見舞われた時の迅速な判断・行動に結びつくことを実感した。日本赤十字社主催の防災関係のイベントもあり、そこで学んだことを地域につなげるなど、今後の自主的な活動に期待が持てそうである。

その他、日本赤十字社との連携としての活動を挙げると、スマイルチルドレンプロジェクトに本学より５名の学生が参加した。これは子どもの貧困をテーマとする香港ユースと日赤ユースとのボランティア協働活動の一環であり、日赤ユースは、NPO 法人キッズドアと連携し、生活困窮者の子どもたちに学習支援を行っている。また、RCV（赤十字ボランティア情報誌）編集委員となりボランティア活動情報を広める役を担ったり、全国赤十字大会、災害時の連携を考える全国フォーラム、赤十字シンポジウム（NHK E テレ番組収録）、「NHK 海外たすけあい」キャンペーン等の行事にボランティアとして当日の運営手伝い等で参加したりした。

（職員　北野順子）

●2017 年度「明学レッドクロス」の主な活動

日にち	内容（参加人数）
4/18（火）	学内献血会@白金キャンパス　献血呼びかけ活動（7 名、職員 1 名）
5/25（木）	「平成 29 年全国赤十字大会」ボランティア（1 名）
5/26（金）・5/27（土）	「第 2 回災害時の連携を考える全国フォーラム」ボランティア（2 名）
6/17（土）	日本赤十字社神奈川県支部にて「救命救急基礎講習」受講（1 Day for Others 協働プログラム）（18 名）
7/5（水）	取材・編集を担当した赤十字ボランティア情報誌『RCV　No.66』完成（2 名） 特集：炊き出しを考える http://www.jrc.or.jp/activity/volunteer/news/170712_004861.html

8/21（月）、9/15（金）	都内献血ルームを訪問・取材（4 か所を 10 名で分担）
9/15（金）	日本赤十字社本社見学、献血ルーム紹介リーフレットの作成会議（12 名、職員 1 名）
10/17（火）	学内献血会@白金キャンパス　献血呼びかけ活動（3 名、職員 1 名） ・学生が作成した都内の献血ルームを紹介する「献血ルーム紹介リーフレット～献血に行こう～」を配付
10/22（日）	港区高松地区の「防災炊き出し訓練」に参加（3 名、職員 1 名）
10/27（金）	取材・編集を担当した赤十字ボランティア情報誌『RCV　No.67』完成（2 名） 特集：ボランティアの敷居は高くない http://www.jrc.or.jp/activity/volunteer/news/171102_005015.html
12/13（水）～12/22（金）	横浜図書館展示 テーマ：赤十字について　～争いのない世界へ～
2/19（月）	取材・編集を担当した赤十字ボランティア情報誌『RCV　No.68』完成（1 名） 特集 1：地域とボランティア、特集 2：海外たすけあい 2017 http://www.jrc.or.jp/activity/volunteer/news/180219_005156.html
《その他通年活動（日本赤十字社のプロジェクトに参加）》	
4 月～3 月	スマイルチルドレンプロジェクトメンバーとして活動（5 名）
8 月～12 月	海外たすけあいユースボランティアとして活動（1 名）

◇日本赤十字社との協働「スマイルチルドレンプロジェクト」

目　的	子どもの貧困状況を知り、子どもへの学習支援を行っているボランティアとつながる
日時、場所	2017 年 7 月 19 日（水）17：30～21：00　目黒区中目黒 ほか参加日：5 月 10 日（水）、31 日（水）、6 月 6 日（火）、27 日（火）、10 月 4 日（水）
参加人数	毎回約 15～20 名（運営スタッフと学習会生徒）

実施概要

日本の子どもの貧困状態について自分たちが把握をし、貧困世帯の子どもが参加している学習会（NPO 法人キッズドアが運営）に積極的に参加する。学習会は、各々通いやすい場所に参加する。活動は毎週のキッズドア、1 か月に 1 度のプロジェクトメンバーのミーティング。日本の貧困世帯の子どもに積極的にアプローチしていくことで、いずれは自分たち日赤のユースで貧困世帯の子どもたちに向けて学習会を開くことを目標としている。

感想・活動を通して得た学び

中学一年生の女子生徒に数学と理科を教えた。とても出来のよい子で 1 度間違えた問題を解き直しさせると、解答を見ずに自分の力で解くことができた。解いてわからない問題があれば、自分から質問をして理解しようという意欲がとても見受けられた。1 時間学習した後の休憩時間では、生徒から私に大学生活についていろいろと質問してくれた。「大学生って大変？」「先生は何のサークルに入ってるの？」「大学の勉強って楽しい？」などである。それを聞いて、大学生活にとても憧れをを持っているのを感じ、貧困の家庭であっても決して将来の夢を捨てないでほしいと思った。

この活動を始めた時は、日本の貧困世帯が意外にも多くあることを知らなかったし、将来の夢を持っ

ているにもかかわらず、貧困のためにその夢が断たれていることも知らなかった。そのような子どもに一人でも多く手を差し伸べられたらと思った。

今後に向けて

プロジェクトメンバーが、それぞれ学習会の活動を充実させて、プロジェクトとして学習会への参加を定着させる。月１回のミーティングで各学習会の状況を共有し、プロジェクトとして開く学習会に向けて話し合う。また学習会で少しでも子どもたちとの距離を縮めたり、質のよい学びを提供できるように現役の教師を日赤に招き、研修会等を行う。

（学生メンバー　社会学部社会福祉学科）

◇献血ルーム紹介リーフレットの作成

目　的	献血ルームの利用促進
活動期間	2017 年 9 月 15 日（金）～10 月 17 日（火）、東京都内の献血ルーム
参加人数	15 名

実施概要

学生の献血そして献血ルームの利用促進を図るために献血ルーム見学を行った。その理由は学内に献血車が来た際に呼びかけを行い、その場で献血をするのが難しいと考える学生が多いと感じたためである。どうしても時間がかかってしまうため授業の関係などで参加できない学生が多い。またその場ですぐに献血を行うことに抵抗のある学生も多い。そのためミーティングのなかで１年生から「献血ルームの紹介を行ったらどうか」という提案があった。赤十字社は各地に献血ルームがある。チームに分かれ４か所の献血ルームを見学し、紹介リーフレットを作成した。

感想・活動を通して得た学び

献血ルームの紹介リーフレットをどのように作成したらよいのかを多くのメンバーで考えることができた。明学レッドクロスでは日赤本社からの紹介により個々人で活動に参加する機会が多い。またミーティングも横浜と白金キャンパス間をテレビ中継でつないで行っているため全員で会う機会もなかなかない。そのため今回のリーフレット作成では全員で一つのことに取り組むことができ、よりメンバー同士で協力することができた。献血ルーム見学時もそれぞれの献血ルームの特徴を細やかに取材することができた。赤十字について、より関心を持つことのできたメンバーが多かった。

今後に向けて

個々人の活動になってしまいがちになる環境のため、明学レッドクロスとして一つの活動ができるようになればと考える。個々人の活動をメンバーに紹介・報告し、意見交換やアドバイスなどを行い、活動の幅をより広げられように努めたい。そして今回の活動のように定例化している献血の呼びかけの際

に感じた課題をメンバー同士で考え向き合い、改善策を考案できたのは大きい。赤十字、そして大学、学生に明学レッドクロスとして貢献できることは何かを、これからもメンバー同士で探し続けられる団体を目指したい。

（学生メンバー　社会学部社会福祉学科）

◇港区高松地区防災炊き出し訓練

目　的	地域の防災訓練を通して防災意識を高めるため
日時、場所	2017 年 10 月 22 日（日）9：00～16：00、東京都港区立高松中学校
参加人数	3 名、職員 1 名

実施概要

今回の防災炊き出しは港区高松地区の主催のもと、高松中学校のピロティを利用して炊き出し訓練を実施し、地域の皆さんと一緒に非常食のアルファ米（白米）と豚汁を作った。私たち明学レッドクロスからは 3 名の学生が参加した。通常、明学レッドクロスの活動として行われるものは日本赤十字社との協働プロジェクトなどである。日本赤十字社は国内救護活動など災害時の支援も多く行っている団体であり、防災に対する知識や理解を深めるという意味でも実際に地域の防災訓練などのボランティアに参加してみるのもよいのではないかという思いから高松地区の炊き出しボランティアへの参加を希望した。この日は台風 21 号が近づいており、実施が危ぶまれたが、災害はいつ来るかわからないという想定のもと無事実施することができ、中学校内に来ていたスポーツ大会等で体育館を利用している家族連れやお年寄りの方々に豚汁とアルファ米を振る舞った。

感想・活動を通して得た学び

今回の炊き出しで感じたことは人数を想定した炊き出しの読みは難しいということである。当日は 200 食分を用意していたが、どれくらいの人が当日スポーツ大会等で体育館を利用しているか把握していなかったため、どれくらいの配分で配膳するかを読むことができなかった。また、200 食分の豚汁を作る際にも予想以上に調味料や水の量が必要で、火を起こしてからお湯が沸騰するまでも結構時間がかかった。また大量の野菜の水分で味がどうしても薄まってしまい、味噌の量が読めず途中で買い出しに行くなど炊き出しならではの学びが多くあった。

災害対策においては「自分の身は自分で守る自助」と「行政や国が対策する公助」と「地域の共助」とが重要といわれている。そのなかでも「共助」にあたる今回の防災炊き出しは地域の方との交流という意味でも重要であったと感じた。このように日々地域の方が協力して実施されるイベントがあるということは地域コミュニティの強化にもつながり、それが一つの防災対策として成り立つと感じられる。今後の明学レッドクロスの活動としてもこのように防災について考える機会を増やしていけたらよいと思う。

今後に向けて

災害はいつどこで起こるか予想は不可能であるが、少しでも災害に対する意識を持ち、準備をしてお

くことで減災につながると感じる。今回は高松地区の方々の主催で参加者としての一面が強かったため、このような防災炊き出しや防災訓練を学生主体でできたら大学生などの若い世代にも防災の重要性が伝わると思った。また今回の防災炊き出しの参加や日赤の防災教育について改めて考えて、メンバー内に共有していきたいと思った。

（学生メンバー　国際学部国際学科）

◇日本赤十字社本社見学

目　的	赤十字について学ぶ
日時、場所	2017 年 9 月 15 日（金）14：00～15：30、日本赤十字社本社
参加人数	12 名、職員 1 名

実施概要

今年度、明学レッドクロスはたくさんの 1 年生を新たにメンバーとして迎えることができた。そこで、赤十字について興味を持ってくれたメンバーとともに赤十字の原点について学びを深めるために、夏休みを利用して日本赤十字社本社を訪れ、施設内の見学をさせていただいた。

感想・活動を通して得た学び

赤十字の活動や歴史などについて、当時の貴重な資料とともに赤十字奉仕団（ボランティア）の方に説明いただき、赤十字の基盤には人と人が互いに支えあうことの大切さがあり、その基盤が現在まで引き継がれて多種多様な分野へ生かされていることを学んだ。また、救護倉庫の中は緊急時素早く対応できるように、また被災者の不安を少しでも軽減できるような物資の備えと工夫がなされていた。この他にも普段は入ることができないフロアの見学もさせていただき、貴重な体験となった。

今後に向けて

今回の日本赤十字社本社見学では 1 年生はもちろんのこと、2・3 年生もさらに赤十字についての理解を深めることができた。今後も日本赤十字社とのボランティア・パートナーシップを強みに、赤十字に関連するさまざまな活動へ各メンバーが積極的に参加し、明学レッドクロスとしての活動の幅を学内・学外問わずさらに広げていきたい。

（学生メンバー　社会学部社会福祉学科）

◇『RCV』（赤十字ボランティア情報誌）編集委員

目　的	日本赤十字社ボランティア情報誌の作成
活動期間	2017 年 6 月～2018 年 3 月
参加人数	2 名

実施概要

日本赤十字社の情報誌『RCV』作成のため、各号のテーマに沿って活動をしている全国の赤十字奉仕団を調べ、アポイントを取り取材を行った。今年度は、神奈川県・大阪府などで取材を行った。その後、

取材を基に記事を作成した。

感想・活動を通して得た学び

今まで取材をしたり、記事を書いたりという経験がなかった初心者であったが、日本赤十字社の職員の方が手厚くサポートしてくださるので不安もなく楽しく活動できた。『RCV』の編集を通して、日本全国には今まで知らなかったボランティア活動がたくさんあることを学んだ。

今後に向けて

編集作業を通して、ボランティア活動の楽しさ、大切さに改めて気づかされた。今回の活動で無事任期を終えたが、この活動で得た気づきを忘れずにこれからもボランティア活動は続けていきたいと思う。

（学生メンバー　心理学部心理学科）

5　地域活動（キャンパス周辺地域での活動）

5.1　横浜地域活動

職員総括

今年度は、昨年度からの多くの学生が継続して活動したため、多くの１年生を受け入れることができた。さらに、加入した１年生が活発に活動し、充実した１年となった。

以前から活動の内容や運営方法の引継ぎが課題であった。その課題に対し、チーフ・サブチーフを中心に全体ミーティングを実施するとともに、マニュアルを作成して共有できたことを評価したい。

継続して活動を行っている「戸塚原宿ふれあいフリーマーケット」「とつか宿場まつり」では、子ども向けのブースを複数出店している。このイベント準備を計画的に行えた。具体的には、春学期においては、２年生を中心に１年生と合同で班分けし、分担して準備並びに運営を行った。これにより、ミーティング中心になりがちだった活動から、メンバー同士が協働して作業を行う時間を増やすことができ、活動が活性化した。さらに、春学期の後半から秋学期にかけて、１年生中心の班分けを行い、１年生が活発に活動を行える環境を整えた。１年生が中心となったことで、より活動が活発化し、多くの１年生の活動が継続された。実際に活動するメンバーが増えたことにより、横浜市民防災センターでの「防災カフェまつり」が、新規に活動として追加された。この「防災カフェまつり」では、学生自ら横浜市消防局の方々と連絡を取りあい準備を進められただけでなく、他の学生セクションとも協働したセクション横断型プロジェクトとして実施することができた。次年度においても、より多くの学生で協働して地域貢献活動を行えるようになるとともに、自ら新たな企画に取り組めるように成長することを願っている。

なお、今年度も、戸塚区近隣ならびに横浜市内の多くの皆さまに、多大なるご協力・ご理解のもと、学生に活動の場をいただいたことに感謝したい。

（職員　松本剛）

学生総括

横浜地域活動チーフとしての１年は大変なことがたくさんあった。１年生でこの横浜地域活動に参加し、２年生で早くもチーフになるということでさまざまなことを手探りでやってきた。４月当初のオリエンテーションを精力的に行ったおかげで、今年は自分たちの代の２倍に近い人数の１年生に参加してもらうことができた。人数が多いというのはそれだけでメリットであり、仕事の分担、新しいブースの考案など、以前より余裕をもって各々がやりたいと感じる活動内容に取り組むことができたように思う。できた余裕のなかで今年度は横浜市民防災センター主催の「防災カフェまつり」へのご協力もさせていただき、そのなかで自分たち考案の「防災劇」をやらせていただくことができた。今後も地元の皆さんと一緒に楽しめる活動を行っていきたい。

（学生メンバー　心理学部教育発達学科）

●2017 年度「横浜地域活動」の主な活動

日にち	内容（参加人数）
4/11（火）・4/12（水）・4/13（木）	「ボランティアサークル合同オリエンテーション」 ※ボランティアに興味のある新入生、さらに今まで興味を持ったことが無かった新入生に、明治学院大学のさまざまなボランティアサークルを紹介

	（4/11：運営学生 2 名、参加者 83 名、4/12：運営学生 2 名、参加者 85 名 4/13：運営学生 3 名、参加者 90 名）
4/22（土）	「とっとの芽」（3 名）
5/20（土）	・「とっとの芽」（1 Day for Others 協働プログラム）（6 名） ・戸塚区青少年指導員協議会主催「チャレンジフェスティバル」
5/28（日）	大学祭「戸塚まつり」に参加（戸塚まつり準備会をバックアップ）
6/4（日）	「ふれあいフリーマーケット」（1 Day for Others 協働プログラム）（36 名）
6/24（土）	「とっとの芽」（3 名）
7/22（土）	・「とっとの芽」（3 名） ・「小田急分譲地自治会夏祭り」にボランティア参加
9/16（土）	「とっとの芽」（2 名）
10/8（日）	「とつか宿場まつり」（1 Day for Others 協働プログラム）（33 名）
10/28（土）	「とっとの芽」（7 名）
11/18（土）	「とっとの芽」（4 名）
12/9（土）	「とっとの芽」（3 名）
12/23（土）	「防災カフェまつり」（40 名、職員 2 名） 横浜市民防災センターで横浜地域活動を中心に白金地域活動、MG パール、防災士講座受講生がブース運営を実施
1/20（土）	「とっとの芽」（4 名）
3/11（日）	「3.11 被災地応援イベント『～あの時と今～』」 横浜市民防災センターで横浜地域活動、「Do for Smile@東日本」プロジェクトの学生メンバーがワークショップ、パネル展示を実施

◇とっとの芽（戸塚区地域子育て支援拠点）

目　的	・戸塚区地域子育て支援拠点「とっとの芽」で子どもたちとふれあう ・明学生に「とっとの芽」での活動について知ってもらう
場　所	戸塚区地域子育て支援拠点「とっとの芽」
活動内容	子どもたちや保護者の方々とのふれあい
活動日時 参加人数	1.　2017 年　4 月 22 日（土）9：00～12：00、3 名 2.　2017 年　5 月 20 日（土）9：00～16：00、6 名（1 Day for Others 協働プログラム） 3.　2017 年　6 月 24 日（土）9：00～12：00、3 名 4.　2017 年　7 月 22 日（土）9：00～12：00、3 名 5.　2017 年　9 月 16 日（土）9：00～12：00、2 名 6.　2017 年 10 月 28 日（土）9：00～12：00、7 名 7.　2017 年 11 月 18 日（土）9：00～12：00、4 名 8.　2017 年 12 月　9 日（土）9：00～12：00、3 名 9.　2018 年　1 月 20 日（土）9：00～12：00、4 名

実施概要

戸塚区には「とっとの芽」という地域の子育て支援拠点がある。そこは、親子のたまり場となっており、子育ての悩みを相談することもできる子育て支援の場である。「とっとの芽」での活動は、掃除をすることから始まり、親子が集まってきたら、広場で子どもたちとふれあったり、保護者とお話をしたりする。お昼前になると、おもちゃの片付けをして、大型絵本の読み聞かせをしたり、手遊びをしたりする。利用者が帰った後には、子どもたちが使用したおもちゃの消毒をする。今年度は「ふたご・みつごの会」や「手話の会」というプログラムにも参加させていただいた。

感想・活動を通して得た学び

施設を利用している保護者から話を聞くことで、子育てをしていて心配なことや大変なことを知ることができた。実際に子どもを育ててみないと気がつけないような、些細な点に不便を感じていることが多いということがわかった。たくさんの子どもたちとふれあうことで、学生のうちから子どもとの接し方について学ぶことができてよかった。職員の方々が、保護者や子どもたちと主体的に、親身になって関わっており、子育て支援拠点の必要性を感じ、「とっとの芽」という場所の大切さを知ることができた。

今後に向けて

自分の子どもをもったとしても、子育ての仕方や子どもとの関わり方がわからない人が増えてきているという。明学生や、地域の方々に、子育てに悩んだときや疲れてしまったときに助けを求められる場所があるということを知ってもらいたい。また、学生のうちから子どもと関わることによって、将来、自分が子どもを育てるときに、子どもとのふれあい方がわかるように、より多くの学生に「とっとの芽」の活動に参加してもらいたい。

（学生メンバー　文学部英文学科）
（学生メンバー　社会学部社会福祉学科）

◇ふれあいフリーマーケット

目　的	フリーマーケットに参加した親子に楽しんでもらう
場　所	横浜医療センター公開空地（戸塚区原宿）
活動内容	戸塚原宿商店街のフリーマーケットに家族で来場された方向けのブースを運営
活動日時	2017 年 6 月 4 日（日）10：00～
参加人数	36 名（学生メンバー19 名、1Day 参加学生 17 名）

実施概要

横浜市戸塚区原宿の商店街「松栄会」主催の「ふれあいフリーマーケット」にて、子ども向けのゲームのブース並びにスタンプラリーなどのアトラクションの企画や、運営などを行った。そこでは、フリーマーケットに来たすべての来場者の方が気持ちよく時間を過ごすことができるために、自分たちがどうすればいいのか、地域の人々のために何ができるのかを考えながら活動し、交流を深めた。

感想・活動を通して得た学び

活動を通して、自分たちで何かを作りあげることの大変さや、一つのことを作りあげることでの達成感を得ることができた。また、それぞれのアトラクションを作る作業で、多くの人と協力することでさまざまな世代の人に楽しんでもらえる方法や、考え方の違いについて学ぶこともできた。また、集団で活動することの難しさや、同じ目標に向かって行動を起こす際の意見のまとめ方に工夫することの重要さについても学ぶことができたと感じる。

今後に向けて

協同関係を構築した経験やその大切さを学んだことにより培った協調性を、今後のボランティア活動で発揮するとともに、今後の社会生活にも生かせると感じている。また、今回の活動やその過程で手に入れた技術や知識を、他の世代や、自分とは立場の異なる人たちに伝え、多くの方々が私たちと同様によい経験ができるよう手助けを行いたい。活動を通して人と人との交流を広げられるよう、本イベントも含め、横浜地域活動セクションを発展させたい。

（学生メンバー　心理学部心理学科）

◇小田急分譲地自治会夏祭り

目　的	地域の活性化
場　所	上倉田町
活動内容	夏祭りに参加し、盆踊りを地域の方と踊る
活動日時 参加人数	《練習会》2017年7月5日（水）、7月12日（水）、7月19日（水）いずれも19：00～ 《本番》2017年7月22日（土）19：00～

実施概要

小田急分譲地自治会夏祭りで、地域の方と盆踊りを一緒に踊った。そのために、地域の方とともに、夏祭り開催日の1か月前から週1回、盆踊りで踊る音頭の振り付けを教わり、練習をした。夏祭り当日は教わった盆踊りを踊り、屋台のお手伝いも行った。そして、夏祭りを華やかにするために、浴衣やハッピを着て踊った。音頭は約五つあり、戸塚音頭といった地域の音頭も地域の方に教わり踊った。

感想・活動を通して得た学び

今回の活動では、特に地域の特性を理解することができた。地域の音頭を踊り、地域の方と関わることで、上倉田町の地域の特徴を理解することができた。地域を理解することで、地域活性化に繋げることができたと考える。地域の方は皆温かく、優しかった。盆踊りを通して、この地域の方のためにも、地域活性化を目標に活動していこうという気持ちを再確認できた。さまざまなことを学び、自分も楽しみながら活動ができたので嬉しかった。

今後に向けて

お祭りを通して地域をより理解することができたので、今後はそれを生かし、地域活性化に向けて活動内容をまた考えていこうと思う。ただ毎年、例年と同じように盆踊りに参加し、踊るというだけではなく、昨年とは違い、新しいことを理解することができたなどと思えるように活動を行っていきたい。そのためには目標を持って、新しい気持ちで活動に参加していきたい。たくさん学んで、今よりももっ

とよい横浜地域にしたい。

（学生メンバー　社会学部社会福祉学科）

◇とつか宿場まつり

目　的	新総合庁舎の利用を増やす
場　所	戸塚駅周辺
活動内容	子ども向けブースの展開
活動日時	2017 年 10 月 8 日（日）8：30〜17：00
参加人数	33 名（学生メンバー23 名、1Day 参加学生 10 名）

実施概要

2015 年から開催している「とつか宿場まつり」に参加しヨーヨー、輪投げ、空気砲、クイズラリー、ギネス記録に挑戦するといった子ども向けブースを運営した。輪投げの景品として、バルーンアートを作った。また、クイズラリーでは学生が実際に戸塚を歩き歴史を学んだうえで問題を作成し、新総合庁舎へより多くの人に入ってもらうためにクイズラリーを実施した。

感想・活動を通して得た学び

宿場まつりを成功させるために、準備の段階から学生が意見を出し合って活動したことで密度の濃い活動になった。活動を通してボランティアを成功させるためには個人の力だけでなくそれぞれの連携や協力が必要不可欠であるということを改めて感じることができた。また各班それぞれが準備の段階から自主的にミーティングや活動をしたことにより、より充実したボランティア活動ができた。最初は 1Day 参加の一般学生とうまく連携を取ることができなかったが、活動していくうちに仲を深めることができ協力して活動することができた。

今後に向けて

今回の活動では連携を取りやすいようにブースごとに各班分かれて計画・準備を行った。それによってスムーズに行動することができた。また、外部の方々との連絡も班制にしたことにより取りやすくなった。しかし班ごとで活動したことにより他の班がどのようなことを計画し準備しているかといったことが見えづらくなっていたということが課題に挙げられた。今後は今回の反省を生かしてミーティングの際に他の班の進行具合や活動内容を話す機会を多く取った方がよいと思った。

（学生メンバー　社会学部社会学科）

◇防災カフェまつり

目　的	子どもたちに楽しく防災を学んでもらう
場　所	横浜市消防局横浜市民防災センター
活動内容	子ども向けブースの出店
活動日時 参加人数	2017 年 12 月 23 日（土）11：00～14：00 20 名（ほか、他セクションからも参加。総勢 40 名）

実施概要

横浜市消防局や、(株) クレティセゾンの方々の協力のもと、横浜市民防災センターにて実施した。防災カフェまつりは今年度、初の試みの活動であるため、消防局と学生との間で何度も打ち合わせを重ねた。当日は、劇を通して防災を伝える「寸劇」、消防士の方と一緒に行う「消防士さんと体力測定」、子どもたちにクリスマスツリーのプレゼントをする「クリスマスツリー工作」というブースを出店した。また、景品として災害時にも作れるクッキーを提供した。

感想・活動を通して得た学び

私は、クリスマスツリー工作班の班長を務め、メンバーの役割分担や、他班、スタッフの方との情報共有を行った。皆をまとめる経験があまりなかったため、今回班長になり、前もって計画を立てることの大切さと、他のメンバーに指示を出すことの大変さを学んだ。当日は、子どもたちがツリー作りに熱心に取り組むようすを見て、やりがいを感じた。自分自身も防災を学びながら、子どもたちや大人の方々と楽しく交流することができ、よい経験になった。

今後に向けて

今年度、新たに追加した活動であったため、来場者数やどれくらい楽しんでもらえるかなど不明点が多かったが、実施して雰囲気をつかむことができたため、来年度も引き続き防災カフェの祭りに参加しようと思う。しかし、他のブースの活動が把握仕切れなかったため、より定期的に情報共有をするよう心がける。また、防災カフェでは学生が主体となって防災局の方と会議を行うことができたため、来年度はさらに新たな活動に参加し、社会とふれあう場を増やす。

（学生メンバー　国際学部国際学科）

5.2　白金地域活動

職員総括

白金地域活動は、2017 年度からセクションとしての活動を再開した。3 年生メンバーが多く、授業やいろいろな講座が入って来る時期でもあるため、春学期・秋学期それぞれ二つの活動を行うことにした。

春学期は、毎年ボランティアを送っている「ふれあい運動会」（白金小学校で開催）に、公募ではなく白金地域活動セクションメンバーが参加し、地域の方々と交流した。もう一つは NEC との協働プロジェクトで、「子どもの貧困」をテーマに公益社団法人チャンス・フォー・チルドレン代表の今井氏の講演を NEC 職員とともに聴き、その後グループに分かれ意見交換会を行った。

仕事をしている人、学生それぞれの視点・考え方を学ぶことができ、双方にとって有意義な会となった。欲を言えば、意見交換会後の展開をどのようにするかまで考えられればよかったと思う。

秋学期は、当初より自分たちで企画から着手したいとの希望があったため、白金台児童館主催のワンパクまつり（10 月目黒駅近くのどんぐり公園にて開催）に出店したい旨を児童館に交渉し、テント二つ分を任されることとなった。今年度は子どもに関する活動を目的にしてきたため、子ども向けゲーム 2 種（ペットボトルボウリング・魚釣り）を手作りし、景品としてバルーンアートを渡すことにした。まつり当日にブース内を円滑に回すには、多くのメンバーがバルーンアートを作れる方がよいとの判断から、夏休みには講師を招いてのバルーンアート講習会も行った。まつり当日は、他のセクションからの応援を得て、300 名近くの子どもたちを手作りゲームで楽しませることができ、練習したバルーンアートも好評で、達成感を得られる活動となった。また、各セクションを越えた絆も生まれた。

もう一つ 12 月に行われた防災カフェまつりへの出店では、10 月のまつりで使用した釣りゲームの「魚」を「防災グッズ」に変更し、防災に必要な物とそうでない物などを取り混ぜて作成した。ここでもバルーンアートを景品にしたため、子どもたちの人気を集めた。今回は単独ではなく、いくつかのセクションがそれぞれのブースを持ち活動した。

セクション活動再開 1 年目のため、手探り状態で始めたものもあるが、活動を重ねるごとにセクションとしての団結を感じられた。しかし、白金は上級生が多いことから、土曜日に開催されるイベントに資格取得講座（授業）等が重なり、活動できる人員を確保できない状況にも直面し、他セクションに動員をお願いした。これが、セクションを越えた交流にもつながり、協力の輪が広がった。

（職員　北野順子）

●2017 年度「白金地域活動」の主な活動

日にち	内容（参加人数）
4/29（土）	白金小学校での地域運動会「ふれあい運動会」（10 名、職員 1 名）
6/19（月）	NEC との意見交換会（11 名、職員 1 名）
6/24（土）、6/25（日）	（公募プログラム）「スリランカフェスティバル」 （6/24：29 名、6/25：30 名）
9/17（日）	（公募プログラム）「目黒区民まつり（目黒さんま祭り）」（27 名）
9/27（水）	専用ツイッター開設　@SrknvcStudent
10/7（土）、10/8（日）	（公募プログラム）「みなと区民まつり」（10/7：19 名、10/8：18 名）
10/14（土）	白金台児童館主催「ワンパクまつり」にブース出店（18 名、職員 1 名）

12/23（土）	「防災カフェまつり」（40 名、職員 2 名） 横浜市民防災センターで横浜地域活動を中心に白金地域活動、MG パール、防災士講座受講生がブース運営を実施
2/10（土）	（公募プログラム）港区高松地区青少年委員会主催「三浦半島いちご狩り」（12 名）

◇ふれあい運動会（白金小学校での地域運動会）

目　的	地域の方々と交流を図るため
場　所	港区立白金小学校　グラウンド
活動内容	運動会の司会進行/運動会の補佐（ラジオ体操・競技のデモンストレーション、競技具の準備など）
活動日時、参加人数	2017 年 4 月 29 日（土）9：30～12：30 10 名、職員 1 名

実施概要

町のふれあいの輪を広げるために開催されている「ふれあい運動会」は今年、第 33 回目を迎えた。白金にキャンパスを構える明治学院大学も白金地域の一員として、地域交流を図るべきと考える。移り変わる時代のなかで、開催当時から今もなお続いている運動会の歴史を感じつつ、当日は、会場の準備から片づけまで行い、運動会終了後の懇親会で地域の方々との交流を深めた。

感想・活動を通して得た学び

白金地域活動が再始動して初めての活動であったため、メンバー同士活動が上手くいくか不安であった。しかし、地域の方々が優しく丁寧に接してくださった。そのため、徐々に緊張がほぐれ地域の方々だけでなく、自分たち自身も心から楽しむことができた。「ふれあい運動会」は子どもからお年寄りまで幅広い年代の方が参加していたため、多世代交流をすることができた。そして、地域の方々の笑顔がなによりの癒やしであり、活動を通して人々と楽しみを共感する喜びを感じることができた。

今後に向けて

「ふれあい運動会」は、学生が地域活動に参加する大きな一歩となった。そのため、この活動を来年も継続していき、この行事がより活発なものとなるように全力でサポートしていきたい。また、受け身の姿勢で参加するのではなく、自ら積極的に地域住民に声をかけ、地域の課題や問題を発見していくアウトリーチも必要である。

（学生メンバー　社会学部社会福祉学科）

◇NEC 意見交換会

目　的	企業と協働して活動する
場　所	日本電気株式会社（NEC）本社会議室
活動内容	子どもの貧困問題についての講演を聴き、何ができるかを NEC 社員と考える
活動日時、参加人数	2017 年 6 月 19 日（月） 11 名、職員 1 名

実施概要

NEC 社員の方々と公益社団法人チャンス・フォー・チルドレンの代表である今井氏による「子どもたちの教育・経済格差の現状」と題する講演を聴き、その講演を受け、自分たちに何ができるかについてワークショップを行った。学生、社員双方で意見を出し合い、それらを全体で共有し、理解を深めた。50 名近くが参加した意見交換会は大盛況に終わった。

感想・活動を通して得た学び

白金地域活動のメンバー、NEC の社員を混ぜてグループに分かれ、ワークショップを行った。よかった点として、日頃大学生同士の交流しか主に経験できないなか、企業の方と深いお話や意見交換ができ、企業の方が取り組んでいること、考えていることなど企業側の視点が得られ、新鮮な機会だった。一方で、事前学習会を行ったものの、当日積極的に発言できないといったことがあった。事前学習会における準備の大切さ、深いところまでつめることの重要性を感じた。

今後に向けて

企業側の深い視点が得られ、とても貴重な機会であった一方で、インプットで終わっており、アウトプットの機会がなく、今回の体験が生かせていないという改善点が出て、学内でのワークショップなど次に生かせる機会を設けるなどの案が出た。事前学習会を行ったものの、一度だけではなく継続させるなど工夫して準備することの大切さを学んだ。この体験を通して、気づいたこと、反省点はたくさんあり、それをブラッシュアップし、伝えていくことで白金地域の活性化、そしてさらなる飛躍を誓いたい。

（学生メンバー　社会学部社会福祉学科）

◇ワンパクまつり

目　的	白金台児童館を中心とする地域のお祭りにおいて、ブース出店をすることで地域連携を強化
場　所	白金台どんぐり児童遊園（港区白金台 5 丁目）
活動内容	子ども向けブースの出店
活動日時、参加人数	2017 年 10 月 14 日（土）9：30～16：30 18 名（内、学生メンバー14 名）、職員 1 名

実施概要

白金台児童館主催で行われる「ワンパクまつり」で、子ども向け手作りブースを出店した。その制作のため、日本財団学生ボランティアセンターが行っている Gakuvo Style Fund 2017 の「ゆるぼ」に申請し、3 万円の協力金をいただいた。協力金を用い、ペットボトルボウリングと魚釣りブースを制作し、景品として子どもにあげるバルーンアートのバルーンも購入した。当日は、たくさんの子どもたちに楽しんでもらい、地域交流の貴重な機会となった。

感想・活動を通して得た学び

この活動は皆が一致団結しないとできなかったものだと考える。最初は、なかなか活動に参加できないメンバーやこの活動とはまったく違うボランティアをしていたメンバーなどもおり、ブースの完成のイメージがつかめず制作には時間がかかった。しかし、次第に経験のあるメンバーはリーダーシップを取り、他のメンバーもさまざまな形で作業を行い、無事子どもたちに楽しんでもらうことのできるブースが完成した。さまざまな経験のあるメンバーたちだらからこそ、成功ができたのだと感じる。

今後に向けて

今回は、初回ということもあり、子どもたち一人ひとりと関わる時間が少なかったので、長期休みを活用して、児童館で子どもとの交流を図るとともに、地域の方とのつながり作りのために、この活動以外にも、地域の方と共同で行う活動をしていけたらよいと考える。そのためにも、まずは自分たちで、白金周辺を歩いてみて、名前の通り白金地域活動として、よりよい活動をしていきたいと思う。

（学生メンバー　社会学部社会福祉学科）

6 海外プログラム事業部（国際協力、国際支援）

コーディネーター総括

2017 年度も、前年度に引き続き「食糧問題」「ジェンダー」そして「格差」に焦点をあてた活動を行った。活動にご支援、ご協力いただいた皆さまに、まずはお礼を申し上げたい。

今年度は、本セクションの活動で大きな位置をしめていた海外へのスタディツアーが実施できなくなり、学生たちにとって、「どういう活動をするか」を模索する 1 年となってしまったことは否めない。しかし、後述のように、そのおかげで学生たちが地域で子どもたちを対象にワークショップを行うなど、国内外の問題について学ぶだけでなく「伝えたいことが相手に伝わる」には、「聞き手」を意識した学びや発信が大切であること気づけたのではないだろうか。

そのほか、（公財）プラン・インターナショナル・ジャパン（以下、「プラン」）の活動支援としての未使用はがきの回収・寄付プロジェクトも休止した。このはがき回収プロジェクトは、海外プログラム事業部の「ガールズ・プロジェクト」の一環で参加してきた。従来は、プランが指定する複数のプロジェクトから女性・女児に関するプロジェクトを一つ選んでそのプロジェクトに少しでも多く寄付できるように、はがきを回収し、最終的には金券を換金して寄付してきた。しかし、今年度は、支援プロジェクトを指定できなくなり、こちらの学生の人数も多くないことから、すべてのプロジェクトを学びながらはがきを回収することが難しくなってしまい、寄付には意義があるものの、大学でこの活動をする意義を考える「学び」の効果が弱まってしまうことが懸念されたため、休止となった。2018 年度はどうするか、プランのご担当者や学生たちとも相談して検討したい。

学生たちが大いに学びを得た活動もある。一つは、継続して行っている「ペットボトルキャップ回収」活動に関連した、学習会の開催である。ペットボトルキャップを学内で集めており、回収されたキャップは「誰の手に渡ってどのようにワクチンが調達されるのか」という事実の確認だけではなく、「キャップを回収するということは、ペットボトルは生産・消費され続けているということでもあるが、環境への負荷をどう考えるか」などについても議論した。今後も、学生たちには、自分たちの活動を単純に「よいことをしている」ととらえるのではなく、さまざまな角度から問題提起し検討してほしい。

今年度の新しい活動として、小中学生を対象とした「国際的な問題を身近に感じてもらうワークショップ」がある。横浜市戸塚区の大正地区センターのご協力のもと、大正地区センターに近隣の学校に働きかけをしていただいて同センターで実施した。2017 年 7 月には、小学生を対象に世界の飢餓や格差を体感してもらう「ハンガーバンケット」および中学生向けには「ジェンダー」、さらに 2018 年 3 月には小学生高学年向けに「フードロス」（食品廃棄）に関するワークショップを行った。学生たちは、小学生や中学生が「参加したい」と思うだけでなく、校長先生が学内での広報を許可し、そして親が自分の子どもたちの参加を許可・奨励するには、ワークショップの内容の充実以前に、まず企画書やチラシの書き方から工夫が必要だと学んだと思う。

前年度末の 2017 年 2 月、ユニクロなどを展開する株式会社ファーストリテイリングの店舗で、難民支援のために衣服を回収した。今年度はその活動の事後学習として、同社サステナビリティ部の方などを大学に迎え、同社のサステナビリティの理念や難民支援の活動などをお話していただいた。

今後も、学生たちには異なる角度から検討しながら、「聞き手」は何を知りたいか、聞き手に誤解を与えないかなどを考えながら活動してほしい。2018 年度には、海外での活動も再開されるので、十分な準備をしながら現地での活動と国内での活動が相乗効果を生むよう、学生たちとともに工夫していきたい。

（ボランティアコーディネーター　中原美香）

●2017 年度「海外プログラム事業部」の主な活動

日にち	内容（参加人数）
4/18（火）・4/24（月）	新入生勧誘説明会＜世界を変える企画を作ろう＞
5/27（土）・5/28（日）	大学祭「戸塚まつり」でペットボトルキャップを回収 （5/27：2 名、5/28：6 名）
7/5（水）	「放課後大作戦」（運営学生 8 名、参加者 29 名） 戸塚区大正地区センターで地域の小中学生を対象にワークショップを開催 小学生：「貧困の差」をテーマにハンガーバンケット 中学生：「ジェンダー」をテーマにワークショップ
9/14（木）	事後学習会「UNIQLO×UNHCR 共同回収イベント『難民に服を送ろう』」（7 名） ※2017年2月に行われたユニクロ戸塚店での難民支援のための衣服回収プロジェクトの事後学習会。（株）ファーストリテイリングの方をお招きし、同社のサステナビリティ活動・難民支援活動を学んだ
10/5（木）～10/15（日）	「GIRLS Book Fair in MGU」（13 名） ※国際ガールズ・デーにちなみ、女性問題に関連した書籍を SNS で紹介
10/26（木）・10/27（金）・10/30（月）	ペットボトルキャップ回収イベント「Cap for Treat」 （10/26：3 名、10/27：3 名、10/30：3 名）
3/7（水）	「フードロス鬼ごっこ企画」（運営学生 3 名、参加者 6 名） 戸塚区大正地区センターで地域の小学生を対象に「フードロス」をテーマにワークショップを開催

◇ペットボトルキャップ回収（5 月、10 月）

目　的	・ボランティアを身近に感じてもらい、関心を持ってもらうため ・イベントを通して普段よりも多くのワクチンを集め世界の子どもたちの健康支援に貢献し、普段の回収活動の認知度も高めるため
日時、場所	2017 年 5 月 27 日（土）・28 日（日）、10 月 26 日（木）・27 日（金）・30 日（月） いずれも昼休み、横浜キャンパス 4 号館ボランティアセンター付近
参加人数	5 月 27 日（土）2 名、28 日（日）6 名、 10 月 26 日（木）3 名、27 日（金）3 名、30 日（月）3 名

実施概要

5 月の戸塚まつりでは主に地域住民を対象に、10 月のハロウィンイベントでは横浜キャンパスの学生を対象にキャップ回収の呼びかけをし、収集した。5 月、10 月の実施ともにキャップを持ち寄ってくれた方にはお菓子をプレゼントし、キャップは 860 個でポリオワクチン 1 人分相当の 20 円になること、回収業者がキャップをリサイクル資源として売却した利益によってワクチンがつくられることの紹介をしたりなどして、積極的に声かけを行った。5 月は事前にリサイクル協会の方との勉強会を行ってキャップ回収の理解を深め、10 月はハロウィンにちなんで仮装を行ったりポスターを作って学生たちの興味をひけるよう努力した。事後にはキャップの個数を数え、キャップから作られるワクチンの量を計算しボランティアセンターに提示した。

感想・活動を通して得た学び

海外プログラム事業部の活動のなかでも、最も身近にボランティアを感じることのできる活動であり、また、最も地道に声かけを行った大変な活動でもあった。どちらの呼びかけでも大きな声を出し、ハロウィンの時には仮装をしたメンバーもいたため、恥ずかしさもあるなかでの回収だった。しかし、このような地道な努力が、海外の子どもたちにワクチンを届ける、という自分たちにとっては遠い存在の人々への支援につながる。これがボランティアの原動力にもなった。1 人分のワクチンを作るのがどれほど大変なのかもわかり、ボランティアの根本的な活動を知ることができた。

今後に向けて

普段からペットボトルキャップの回収は行っているが、こういったイベント時はキャップの量を多く集めることができるし、呼びかけというボランティアの根本的な体験ができるいい機会のため、これからも戸塚まつり・ハロウィンイベントともに継続して行っていきたい。また、私たちがキャップを集めていることやその意義を学内でさらに広める方法を考えて、普段からもキャップ回収をより多く行っていきたい。

（学生メンバー　社会学部社会学科）

◇放課後大作戦

目　的	小中学生の放課後を有効活用する
日時、場所	2017 年 7 月 5 日（水）15：00～18：00 、大正地区センター（横浜市戸塚区）
参加人数	8 名、小学生 25 名、中学生 4 名

実施概要

横浜市戸塚区の大正地区センターで、小学生・中学生を迎えてワークショップを実施した。小学生には食糧問題や格差について考えてもらう「ハンガーバンケット」、中学生には、男女の平等について考えてもらう「ジェンダーに関するワークショップ」を実施した。

感想・活動を通して得た学び

小学生が、身近な学校生活や家庭での行動を見つめ直し、世界的な問題の改善点を一生懸命見つけている姿にこの企画を実施した意味を感じることができた。小学生・中学生の参加者たちがワークショップを自分たちの日常生活にあてはめて考えてくれたことと、私たちが伝えたかった「食糧問題」「格差」についてもしっかり考えてくれたことが事後アンケートからも見受けられ、大きな達成感を得ることができた。

今後に向けて

今回の企画をきっかけに、次の企画を実施することになった。今度は、フードロス（食品ロス）問題を考えてもらうことを目的に、小学生を対象に「フードロス鬼ごっこ」を実施する。今回は、事前準備

が不足していたことが大きな反省点となった。今後の活動は事前準備を入念に実施し、内容をより充実させたい。また、世界規模で起こっているさまざまな問題を小・中学生たちと一緒に考えるきっかけをこれからも作っていきたい。

（学生メンバー　法学部政治学科）

◇フードロス鬼ごっこ企画

目　的	小学生に楽しみながらフードロス問題を理解してもらう
日時、場所	2018 年 3 月 7 日（水）13：00～17：00 、大正地区センター体育館
参加人数	3 名、小学生 6 名

実施概要

横浜市戸塚区の大正地区センターに小学生を迎えてフードロス（食品ロス）鬼ごっこを企画したが、当日は人数不足のためフードロスに関するワークショップを実施した。日常生活で起きる身近なフードロスの事例を挙げながら、フードロス問題について考えてもらった。

感想・活動を通して得た学び

企画実施前に参加人数が少ないことが報告されていたので、フードロス鬼ごっこの準備と人数が少ない場合に備えてワークショップの準備もして当日を迎えた。企画自体の準備はうまくできたが、広報に準備不足を感じた。当日は人数が少なかったので簡易型のワークショップを実施し、余った時間をつかって小学生と一緒に遊ぶことで距離を縮めることができた。前回の企画に参加してくれた子が今回も参加をしてくれたので、企画を継続させる意味を感じた。

今後に向けて

今回は、広報活動にあまり力を入れなかったため参加人数が少なかった。大正地区センターの方からは、今後の活動についてのお話をいただいたので、次回は学生も大正地区センターの人とともに広報活動に力を入れていきたい。

（学生メンバー　法学部政治学科）

◇ユニクロ衣料回収プロジェクト

目　的	海外プログラム事業部のメンバー一人ひとりが難民の定義や問題、CSR（企業の社会的責任）などについて勉強し、活動に参加することやお話を聞くことでより理解を深める
日時、場所	「UNIQLO×UNHCR 共同衣服回収イベント『難民に服を送ろう』」 2017 年 2 月 11 日（土・祝）、12 日（日）11：00～17：00、ユニクロ東急プラザ戸塚店 「講演会」 2017 年 9 月 14 日（木）14：00～16：00、白金キャンパス 1309 教室
参加人数	2/11、2/12 ボランティア当日：13 名 9/14 講演会：7 名

実施概要

2017 年 2 月 11 日、12 日にユニクロ戸塚東急プラザ戸塚店で行われた、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）とユニクロが行っている衣料回収プロジェクト「難民に、生きるための服を。」にボランティ

アとして学生メンバー6 名と一般の明学生 7 名が参加。事後学習としてユニクロを展開する株式会社ファーストリテイリングのサステナビリティ部の方やコーポレート広報部の統括部長に来ていただきサステナビリティ活動の一つである難民支援についての講演会を開催した。

感想・活動を通して得た学び

事後学習として実際にユニクロを展開するファーストリテイリング社のサステナビリティ部の方や広報部統括部長のお話を聞くことができてよかった。私たちが調べていくなかで疑問に感じた「サステナビリティの定義とは何か」「服を届けることは本当にニーズがあるのか」などを質問することができ、理解がより深まった。また社会の一員として責任ある働き方を考える機会になった。

今後に向けて

今回のイベントを通して学んだCSR、CSR と SDGs（持続可能な開発目標）のつながりなどをより深く学びたい。イベントを開催し、それを学びにするためには、事前学習と事後学習がいかに大切かを改めて学ぶことができた。今後もメンバー一人ひとりが学びを得ることのできるイベントを開催し、その学びに海外プログラム事業部以外の人々を巻き込みたい。

（学生メンバー　国際学部国際学科）

◇GIRLS Book Fair in MGU

目　的	女性問題に関する書籍の広報。「学校に行けない少女たち」をテーマとした本の書評をSNS 上に載せ、学生に女性問題を身近に考えてもらうことを狙いとする
日時、場所	2017 年 10 月 5 日（木）～10 月 15 日（日）、横浜キャンパス
参加人数	13 名

実施概要

世界の女性・少女が置かれている状況を知ってもらい、彼女たちを応援し、状況を改善するために国連が定めた 10 月 11 日の「国際ガールズ・デー」に合わせ、「学校に行けない少女たち」の背景にある問題をテーマにした明治学院大学所蔵の本 11 冊を選定。学生メンバーがそれぞれ読み、その書評を期間中 1 日 1 冊ずつ海外プログラム事業部の Twitter（@MGVC_kaigaip）にて発信。この企画の事前告知を Twitter、立て看板、三角 POP で広報した。

感想・活動を通して得た学び

まず、学生メンバーそれぞれが女性問題に関する本の書評をしたことで、個人のなかで理解を深めることができた。また、Twitter というツールを使ったことは、少しでも多くの学生の目に触れ、女性問題に関心を持つきっかけとなる入口としてよかった。

今後に向けて

今回の SNS を利用した啓発活動は、比較的小規模にとどまってしまった。今後は、一時的な企画のみならず、日常でも女性問題に関する情報などを継続して発信していく必要がある。

（学生メンバー　国際学部国際学科）

7　MG パール（環境）

職員総括

今年度、MG パールセクションにおいては、新入生の新規メンバーを迎え、例年のボルネオ島の環境問題学習やアクセサリー制作のみに留まらず、外部のフリーマーケットへの積極的な出店を行い、ボルネオ島の環境問題学習にて得たことを外部の方へ説明、発信することができた。

外部イベントの出店の具体例としては、毎年出店している観桜会、戸塚まつり、善了寺キャンドルナイト等に加え、新規外部イベント出店として、9 月の箱根合宿時に合宿先の近隣の川東タウンセンターマロニエ（小田原市）で開催されたフリーマーケット、12 月に横浜市防災センター（横浜市）にて行われた防災カフェでのブース出店を実施した。出店によって、MG パールの活動を幅広く外部の方に認知してもらうという面において、一定の成果を得ることができた一方、販売しているアクセサリーのバリエーションや値段によって、購入いただくまでには結びつけることができなかった。

次年度の活動として、より一層ボルネオ島の環境問題学習に力を入れることに加えて、外部イベントでの子ども向けのアクセサリー制作体験会の実施や、男性向けアクセサリーの新規制作等、セクションミーティングで話し合ったことやボランティアセンター活動報告会でいただいた意見、また、フリーマーケットにてお客様からいただいた要望などを実現するために検討し、ニーズに合った制作・販売活動を取り入れることを期待する。

最後に、今年度も、ボルネオ島の環境問題学習にご協力いただき、また、ボルネオ島の淡水パールを安価にてお譲りいただいた特定非営利活動法人ボルネオ保全トラスト・ジャパン（BCTJ）の皆さま、制作活動のために制作会を開催いただき、学生メンバーをご指導いただいた山下民子様に、この場を借りて感謝申し上げたい。　（職員　青木洋治）

学生チーフ総括

今年度も、昨年同様に東南アジアのボルネオ島の環境問題の学習や、現地産の淡水パールを使ったアクセサリーの制作や販売など、多岐にわたる活動をさまざまな機関の方と協力して行うことができた。

春は､新入生や加入を希望する上級生を対象にしたアクセサリー制作体験を行い､新入部員を迎えた。そして戸塚まつりでの販売から 1 年の活動が始まった。この戸塚まつりでは、販売を介して他セクションの学生など学内だけでなく、戸塚周辺に住む地域の方々と交流することができた。この交流でボルネオ島の現状を伝え、関心を抱いていただき、商品を手にとってもらえた。年内最初の活動であり、新入生にとっても初めてとなる販売活動であったが、積極的に販売やボルネオ島の現状について学んだことを伝えられたため、スムーズに活動を行うことができた。そして夏には昨年と同様に、箱根で合宿を実施した｡メンバー内で親睦を深められ､合宿先の近くの地域で開催しているフリーマーケットに参加し、販売活動をした。遠方での販売はセクション内で初の試みであったが、ここでも販売を介してボルネオ島の現状を伝えることができた。また、夏至、冬至付近の日程で行われたキャンドルナイトでも販売活動を実施した。同時に、動物保護に関するゼミが主催のイベントであったため、動物保護や環境問題について再度考えさせられる機会であった。そして特定非営利活動法人ボルネオ保全トラスト・ジャパン（BCTJ）主催の月例会に参加し、現地の状況について知ることができた。

以上のように、今年度は販売を中心に活動した。来年度は、活動報告会でいただいた意見を参考に、新しいことにも挑戦し、活動していきたい。　（学生メンバー　社会学部社会福祉学科）

●2017 年度「MG パール」の主な活動

日にち	内容（参加人数）
4/5（水）	国際ソロプチミスト　東京－弥生「観桜会」に出席・出店（4 名）
4/23（日）	「ツルセミチャリティバザー」に出店（1 名）
4/25（火）、5/9（火）、5/16（火）	新入生説明会・体験会（4/25：12 名、5/9：9 名、5/16：10 名）
4/26（水）	特定非営利活動法人ボルネオ保全トラスト・ジャパン（BCTJ）月例会に出席（2 名）
5/27（土）～5/28（日）	大学祭「戸塚まつり」に出店（10 名）
6/16（金）	「夏至キャンドルナイト@善了寺」に出店（3 名）
6/18（日）	1 Day for Others「オランウータンから学ぼう！ボルネオ島の環境問題」実施
8/16（水）	白金地域の造形作家・山下民子氏との制作会（7 名）
9/23（土･祝）～9/24（日）	夏合宿（フリーマーケットに出店）（11 名）
11/1（水）	特定非営利活動法人ボルネオ保全トラスト・ジャパン（BCTJ）定例会に出席
12/22（金）	「冬至キャンドルナイト@善了寺」に出店（2 名）
12/23（土）	「防災カフェまつり」（40 名、職員 2 名） 横浜市民防災センターで横浜地域活動を中心に白金地域活動、MG パール、防災士講座受講生がブース運営を実施

◇オランウータンから学ぼう！ボルネオ島の環境問題

目　的	「1 Day for Others」のプログラムとして実施 オランウータンの生態を知る、ボルネオ島の現状を知る
場　所	多摩動物公園/パルテノン多摩
活動内容	動物園見学/BCTJ 青木さんの話を聞く
活動日時 参加人数	2017 年 6 月 18 日（日） リーダー学生 1 名、一般学生 14 名

実施概要

午前中に多摩動物公園に集合した。ここでは数多くのオランウータンがのびのびと飼育されている。ボルネオ島の自然問題により被害を受けているオランウータンがどのような環境で生活しているのか、楽しみながら学ぶことができた。

その後、多摩センター駅近くの会議室に移動し、ボルネオ島の環境や生物の保全活動をしている BCTJ の青木さんから､ボルネオ島がどういう場所にあるのか､今どういう問題を抱えているのか講義をしていただいた。その後、その問題のキーワードである「アブラヤシ」について、私たちにとってアブラヤシがいかに身近なものかを学ぶワークショップを実施した。

感想・活動を通して得た学び

多摩動物公園では、オランウータンがどのようにして生活を送っているのかを見ることができた。例えば長い腕を利用してロープなどを伝っていきながら遠くの場所に移動したりすることなど、実際に見なければ分からないことを知ることができた。また、以前この動物園にいたジプシーというオランウータンの話を聞き、彼女の行動によりオランウータンがとても仲間思いで優しい生き物であり、その優しさはだんだんと周りに伝播することがわかった。

また、BCTJ の青木さんの話では、人間がプランテーションを行うことでボルネオ島のもつ豊かな自然を壊していることが学べた。私たちは実際にプランテーションで働くなど直接的な関わりはないけれど、そこで生産されたパーム油を利用している点で関係しており、自分もその問題に関わっていることが知れた。

今後に向けて

今回のプログラムで改めてボルネオ島の現状などを知ることができた。BCTJ は定期的にボルネオ島に行っているので今後も BCTJ の方々から積極的に話を聞いていきたい。

また、この事実を知らず、パーム油のことを知らないままパーム油が使用された食品や製品を利用している人が多いと感じた。MG パールの活動を通して、私たちの作品に興味を持ってくれた人に対してボルネオ島の現状やパーム油のことを知ってもらえるよう広報活動を積極的に行っていきたい。

（学生メンバー　社会学部社会福祉学科）

8 SHIP（Social Hub Information Partners）

職員総括

今年度においても、在学生が充実した学生生活を送れるよう支援するために、全力で取り組んだことを評価したい。

入学時から学生生活に希望をもってもらうことを目的に、ボランティア活動などで活躍する上級生を紹介する企画を4月に実施した。また、学生生活が残り少ない上級生に対して、大学卒業前の短い期間でも何か行動を起こすきっかけを提供することを目的に、OB を講師に招き講座を実施した。この講座は、「SIA（Social Innovation Academy）」と称した企画で、社会と学生がつながるきっかけとなる講演会やワークショップを行うもので、今回は8回目の企画であった。回を重ねるごとに、企画の質や段取りが向上しており、今回も参加者の満足度が非常に高い企画となった。

SHIP は、残念ながらメンバー減少のため、今年度で活動を休止する。色々と制約があるなか、常に前向きに活動し、多くの学生の支援を行ってきたこのセクションの活動がなくなることは非常に残念である。この活動を通して成長したメンバーたちの各方面での今後の活躍に期待したい。　　（職員　松本剛）

●2017 年度「SHIP」の主な活動

日にち	内容（参加人数）
4/5（水）～4/6（木）	i switch!! vol.4「新入生、俺の話を聞いてくれ」 （登壇者 6 名、参加者 4/5：14 名、4/6：15～20 名）
12/1（金）	SIA vol.8「明学 OB による行動力講座　～やりたいことを実現するきっかけを提供します～」（13 名）

◇i switch!!　vol.4「新入生、俺の話を聞いてくれ」

目　的	新入生勧誘期間に在学生が大学生活をプレゼンすることで、自身の活動を発信すると同時に新入生にロールモデルを提示する
日時、場所	2017 年 4 月 5 日（水）12：00～12：30、4 月 6 日（木）12：30～13：00 横浜キャンパスボランティアセンター前
参加人数	登壇者 6 名、参加者 4/5：14 名、4/6：15～20 名

実施概要

現在、明治学院大学にはアクティブな学生が多いにも関わらず、その活動を直接伝えていく場があまり存在しないのでは、と考えた私たちは、プレゼンテーションを通して、学生が自身の活動や考えを伝える場を提供し、社会に自分の考えを「発信する」イベントを企画した。

そこで、4 月上旬の新入生勧誘期間に、ボランティアセンター前の屋外スペースにて、「i switch!!」を開催した。新入生もどのように大学生活を送るのかを模索している期間内にイベントを開催することによって、より届けられる情報の価値が上がると同時に、新入生の背中を押すこともできると考えた。

感想・活動を通して得た学び

今回 4 回目となる本イベントは、初めての試みとして屋外で実施した。その結果、多くの学びがあっ

た。一つは、声かけによる集客である。今回、事前に参加者を募集するのではなく、道行く新入生に向けてゲリラ的に行った。そのため、どれだけの新入生がみてくれるか、どう声をかけたら足を止めてくれるかなど、事前に多くの想定が必要であることがわかった。今後このようなイベントを行う際には、新入生に対してより効果的に届けるために工夫する必要がある。

今後に向けて

今回は、新入生や登壇者、運営の在校生など、さまざまな学生が携わったイベントである。そのぶん、多くの人を巻き込むことの大変さややりがいを改めて感じた。この経験は、今後のイベント実施の際に役立てていきたい。現在、学内では、さまざまな活動をしているアクティブな学生が自身の活動を発信する場がまだまだ少ないと考える。彼らが大学内で在校生に向けて発信することにより、社会とつながる学生が増え、より明治学院大学が活性化されるであろう。本イベントがその先駆けになっていたら幸いである。（学生メンバー　法学部政治学科）

◇SIA vol.8

「明学 OB による行動力講座～やりたいことを実現するきっかけを提供します～」

目　的	行動したいけれど行動できなかった人の背中を押す
日時、場所	2017 年 12 月 1 日（金）18：30～20：30、白金キャンパス 1251 教室
参加人数	13 名

実施概要

大学に入学して、何か動きだしたいという気持ちはあったが、実際行動できなかった大学 3 年生は多いだろう。ちょうど大学卒業までの今の時期、彼らは、大学生活を振り返って話せるようなことを何もしてこなかったことに対し、焦りを感じていると考えられる。そこでそのような学生に対し、明学 OB がどのような学生生活を送り、その後どんなキャリアを進んだのかを講演する。講演後には、PDCA（Plan Do Check Act）の P を立てるワークショップを行い、実際に学生が行動するきっかけを提供した。

感想・活動を通して得た学び

今回のイベントでは特にワークショップの時間、参加者が積極的に取り組んでいたため、充実したイベントとなった。参加者からも、イベントで学んだことが多いとの声をいただいた。今回は、イベントの広報・集客期間が今までで一番短かった。短期間で集客することの大変さを痛感したと同時に、時間がないからこそ頭を使い工夫した面が多々あった。特に学んだことは、イベントにおけるターゲット層の設定に関してである。当初予定していたターゲット層に広報が刺さらず、逆にリーダー経験がある層の参加が多くなった。このことから、企画段階でさまざまな場合を想定することの重要性を学んだ。

今後に向けて

今回、イベントの企画・運営を通して、人と協働でイベントを作りあげることにおいて、多くの大事なことを学んだ。特に、人との協働において、運営メンバーや登壇者、参加者など相手の視点に立って考えることの重要性を改めて考えさせられた。想像以上に多くのことを学んだこの経験は、次回に生かしていくために、メンバー内でしっかりフィードバックをした。このことを次回に生かして、メンバー全員が成長していくことが重要だと考える。（学生メンバー　法学部政治学科）

9 学生事務局

職員総括

今年度は、ボランティアセンター活動報告会の運営だけでなく、学生メンバー全体の活性化を担う役割へと機能を強化し、新たなるイベントを実施した。特に評価したい点は、行事の円滑な実施・運営のみならず、企画や準備にあたって、情報収集や知識の習得に励み、質を向上させたことである。

横浜キャンパスでの防災訓練では、従来、教職員のみで実施していたところから、ボランティアセンターの学生メンバー、並びに公募した学生も参加できるようにした。横浜キャンパス内の非常時の備蓄品の状況や避難時の注意点など学内管理部門にインタビューを実施し、防災時の注意事項をまとめた。これを参加学生へ共有し、学生の防災意識の向上に努めた。

学生メンバー全体勉強会では、防災士講座に参加した事務局メンバーが、そこで学んだグループワークの手法を用いた。自身が所属する学生セクションの活動で忙しいなかでも、しっかりイベントの準備・運営に取り組んだことが、イベントの成功につながったと感じる。これらの活動により、学生事務局の存在が、学生メンバーのなかでも少しずつ認知された１年であった。次年度以降も、セクションを越えた交流を増加させ、多くの仲間とともに活動できるボランティアセンターになるべく歩みを進めて欲しい。

なお、学生メンバーオリエンテーションにご協力くださった社会福祉法人横浜市戸塚区社会福祉協議会の方々や、とつか区民活動センターの方々、ボランティアセンター活動報告会にお越し下さった来賓の方々にこの場を借りて感謝を申し上げたい。

（職員　松本剛）

学生事務局長総括

学生事務局とは、明治学院大学ボランティアセンターで活動する学生メンバーに、所属するセクションの枠を越えたつながりを作り、ともにボランティアをしてもらうようにサポートをする組織である。つながりを作ることで、他のセクションの活動にも関心を持ち、ともに助け合いながらボランティアをすることで、より幅広い学びを得ることができる。そのため、2017 年度はボランティアセンター活動報告会に加えて、従来は職員主体で行われていた横浜キャンパス防災訓練への協働・参画、事務局メンバー企画の勉強会の開催を行った。事務局長として今年の活動には、よかった点と改善することのできる点があったと考える。よかった点は、去年は各セクションの活動が忙しいこともあり、自分たちで企画する活動に至らなかったが、今年は防災訓練での学びをより深めるために、７月にクロスロードを使った勉強会を午前中に行い、午後に親睦会を開くことができたことである。改善することのできる点は、勉強会や普段から出ていた他のセクションのつながり、連携といったものがあまりないという意見に対し、一つの企画しか行うことができなかったことである。来年度は、まずセクションの結束力を高め、セクションを越えた活動をするためにも、交流する機会や事務局の全セクション合同で行う企画を増やしてほしいと考える。

（学生メンバー　社会学部社会福祉学科）

●2017 年度「学生事務局」の主な活動

日にち	内容（参加人数）
5/1（月）	横浜キャンパス防災訓練&学生メンバーオリエンテーション （学生メンバー53 名、新 1 年生 48 名、教職員・スタッフ 12 名）
7/29（土）	学生メンバー全体勉強会　（学生メンバー57 名）
11/11（土）	ボランティアセンター活動報告会 （学生メンバー95 名、来賓 4 名、教職員・スタッフ 14 名）

◇横浜キャンパス防災訓練

目　的	横浜キャンパス防災訓練/学生メンバーオリエンテーション
日時、場所	2017 年 5 月 1 日（月）9：30～16：30、横浜キャンパス　4・5・6・7・9・10 号館
参加人数	大学生と教職員含めて約 150 名（全学）

実施概要

大学にいるときに大規模災害が発生したときに備え、防災訓練を実施した。この訓練は、大学構内の避難所を理解するためのものである。その後、学生メンバーによる防災講座や非常食の試食体験もあった。

午後にはボランティアセンターの学生メンバー全体のオリエンテーションである「学生メンバーオリエンテーション」を実施。とつか区民活動センターと戸塚区社会福祉協議会の方々による「ボランティア活動のいろは」や、本学ボランティアコーディネーターによる「ボランティアセンターの活用法」のお話があった。最後には交流会を設け、新入生が希望セクションの先輩と話せる貴重な時間となった。

感想・活動を通して得た学び

今回の避難訓練では、想定以上に多くの人数が参加したため、本格的なものとなった。また、避難訓練をしたことで実際にどのように行動すればよいかを身をもって知ることができたため、防災意識の向上につながった。また、防災講座では、クイズ大会を開催した。津波関連の問題が多かったため、次回はバリエーションを増やすとよりよくなるだろう。

学生メンバーオリエンテーションではボランティア活動について改めて考え直す機会となった。交流会では、新入生が名刺カードを希望セクションの先輩に渡すといった仕組みにしたことにより、新入生が気軽に話しかけやすい雰囲気となっていた。

今後に向けて

今回の大規模な防災訓練は、多くの学生の防災意識を高めることにつながった。身近な大学の構内で行ったことにより、災害が起こったときにどうすればよいか、改めて考えるきっかけとなったとの声が多々あった。今回は参加学生がボランティアセンターの学生メンバーが中心であったため、今後は他の学生も巻き込んでいきたいと考える。

学生メンバーオリエンテーションの交流会では、セクションごとに新入生と積極的にコミュニケーションを取ることで、新入生獲得につながった。次回も、今回の反省を生かし、より新入生と学生メンバー双方が親しみやすい交流会を企画していきたい。

（学生メンバー　法学部政治学科）

◇学生メンバー全体勉強会

目　的	防災に対する知識を深めると同時に、学生メンバー間の親睦を深める
日時、場所	2017 年 7 月 29 日（土）10：00～12：00、横浜キャンパス 430 教室
参加人数	学生メンバー57 名

実施概要

学生事務局メンバーが事前に横浜管理課へ防災グッズ等の取材を行い、それらを参加学生に講義・クイズ形式で伝えた。その後は、実際に何かが起きたと想定してどう行動するかを YES/NO で表示し、意見を出し合う「クロスロード」というカードを使用して、ゲーム形式のグループワークを行った。グループは普段さまざまな活動をしているセクションの違うメンバーで構成し、今までの経験や自分の考えを話し合う場となった。また、勉強会後には懇親会も行い、たくさんの人と話せる場を設けた。

感想・活動を通して得た学び

グループワークはゲーム形式にしたため、堅苦しくなく楽しい雰囲気で行うことができ、セクションを越えた交流ができたのではないかと感じる。「クロスロード」では難しい選択を迫られることもあったが、自ら考えその意見を共有したり他の人の意見も聞くことで、新しい発見や知識を深めることにつながった。学生メンバー全体での勉強会や懇親会は初めての試みだったため、不安な点もあったが、参加学生、学生事務局メンバーともに充実した時間を得られたと思う。

今後に向けて

今回の経験から、学生メンバー全体でのイベントを行い交流を深めることの大切さに気づいたし、セクションを越えた交流をしていきたいという気持ちを持つ人も多かった。今後もさまざまな形でこのようなイベントを行い、学生メンバー同士のつながりを作っていきたいと思う。しかし、当日までの準備がギリギリになってしまったり、連絡が思うように進まなかったりしてしまったため、早めの計画や連絡の方法などを改善して取り組んでいきたい。

（学生メンバー　社会学部社会福祉学科）

◇2017 年度ボランティアセンター活動報告会

目　的	ボランティアセンターに所属する各セクションが一堂に会し、年間の活動を報告する
日時、場所	2017 年 11 月 11 日（土）9：00～11：30、白金キャンパス 3101 教室
参加人数	学生メンバー95 名、来賓 4 名、センター教職員・スタッフ 14 名

実施概要

2017 年度の明治学院大学ボランティアセンターの学生メンバーは、「地域活動（横浜・白金）」「明学レッドクロス」「『Do for Smile@東日本』プロジェクト（陸前高田・吉里吉里）」「MG パール」「海外プログラム事業部」「SHIP」の 8 セクションと私たち「学生事務局」のいずれかのセクションに所属し、

日々活動をしている。毎年秋に開催されるこの報告会では、普段なかなかお互いの活動を共有することが難しい学生メンバーたちが、それぞれ1年間の活動の成果や課題を発表し、来年度に向けた決意の場として大きな意味を成している。

感想・活動を通して得た学び

各セクション8分の発表と5分の質疑応答という短い時間ではあったが、工夫の凝らされたパワーポイントと堂々とした発表からは、それぞれ1年間の活動で得た力を感じることができ、同じ学生メンバーとして、大変刺激になる時間となった。また、日頃の活動でお世話になっている先生方や地域の方からの質問や意見は、専門分野や地域住民ならではの視点からの指摘が多くあり、学生にとっては来年度活動するうえで、非常に参考になったとの感想が聞かれた会となった。

今後に向けて

来年度は、明治学院大学のボランティアセンターが創設されて20周年だ。

今年度はセクションの垣根を越えた活動を数回行うことができ、これは一つの成果として私たちの力となったが、来年度はさらに力を合わせ、より多くの方々に「明学のボランティア」を知ってもらいたい。そのためには、いつも私たちのことを見守り支えてくださる企業や運営委員、また学生ボランティアサークルのメンバーや他大学の学生の力も借りながら、ともに20周年目も、明治学院大学のボランティアセンターを盛り上げていきたい。

（学生メンバー　社会学部社会福祉学科）

10　他大学との交流（静岡県立大学ボランティアセンター構想フォーラム）

教員総括

2017年12月16日に、静岡県立大学ボランティアセンター構想フォーラムにお招きいただき、学生3名、教職員3名で静岡県立大学を訪問し、本学ボランティアセンターの取り組みについてプレゼンテーションを行うとともに、ボランティアセンター（ボラセン）が果たす役割についての意見交換を行った。

本フォーラムは、静岡県立大学においてボラセン設立に向けて自発的に活動を行う学生によって企画されたもので、中心は地域づくりや若者支援についての授業を展開する津富宏先生のゼミ生が担っている。津富先生は2017年3月に学生とともに本学ボラセンを訪問しており、それが縁となって今回お招きいただくこととなった。

明治学院大学以外には、堺市で地域と連携したボラセンを運営している大阪府立大学、学生自身がコーディネータとして活躍し、地域と大学生を結びつけて活動する神奈川大学などの大学が参加していた。2018年で20年を迎える本学のボラセンは、全学のなかでのサポート体制が整備されるとともに、教職員の配置も他大学と比べると手厚くなっている。活動も多岐にわたっているが、一方でこれまで行われてきた活動を継続する意識が強くなり、ボラセンができて日の浅い大学やこれからつくろうとする大学と比べると、学生自身がやりたいこと、試行錯誤しながら進めていく部分は弱くなっているようにも感じた。特に静岡県立大学の学生は、当日の運営については教職員のサポートをほとんど受けずに企画運営しており、そのエネルギーには目を見張るものがあった。同時に、学生同士が支えあう仕組みをつくるというボラセン設立に向けた思いは、なぜボラセンがあるのか、ボラセンが何を実現するのか改めて考える機会をもたない私たちにとって、存在意義を改めて考える場ともなった。

今回の訪問によってできた他大学との関係も生かしながら、20周年の先のボラセンがどうあるべきなのか、新しく大きな絵を描いていきたいと思う。

（ボランティアセンター長補佐　猪瀬浩平）

学生総括

12月16日、静岡県立大学ボランティアセンター構想フォーラムに参加した。職員3名、学生メンバー3名で同大学に行き、明治学院大学ボランティアセンターや自分たちの活動についての発表、他大学の話を聞いた。その後、グループに分かれてのディスカッションを行い、ボランティア活動をするうえでの課題などを話し合った。全部で四つの大学が参加していて、それぞれの大学の職員、学生と関わった。

自分たちの活動を学外で直接話すということは今までなかったため初めは緊張もあったが、貴重な機会になったと思う。さらに、他大学のボランティアセンターやボランティア活動についてはほとんど知らなかったため、話を聞くことはとても刺激的であった。ボランティア活動の種類も多様であったし、学生がボランティアコーディネーターのような役割をしている大学もあり、自分たちもまだまだ新しいことに挑戦できると感じた。今回の経験をしっかりと明治学院大学ボランティアセンターにも生かせるように、自分が感じたことを大切にし、発展へとつなげていきたい。また、他大学との交流は想像以上に新しいことを発見でき、充実したものであったため、今後も大学外の人との関わりを大切にしていきたい。

（学生メンバー　社会学部社会福祉学科）

11　国際機関実務体験プログラム（育成・支援プログラム）

職員総括

横浜・みなとみらい地区の国際機関で100時間の実務体験を行うプログラムで、公益財団法人横浜市国際交流協会（YOKE）と現在本学を含めた5大学との協働事業となっている。

国際協力や国際交流の実務を体験することにより、大学で習得した学問と実務機関での実践の融合をはかり、将来、国際性豊かな資質を持ち世界的な問題を視野に入れて活動することができる人材育成を目的とする。

実務体験は、夏期と春期に行われ、派遣国際機関は5大学で分けられ、2017年度夏期は、独立行政法人国際協力機構横浜国際センター（JICA横浜）、国際熱帯木材機関（ITTO）、春期は国際連合食糧農業機関（FAO）、アジア太平洋都市間協力ネットワーク（CITYNET）へ1名ずつの派遣が本学の割り当てとなった。

学生たちが100時間実務体験を受けるなか、中間時期に国際機関受入れ担当者、派遣学生、派遣大学担当者の三者面談が行われ、それまでの体験から不安や問題点等があれば話し合い、よりよい体験ができるよう調整が行われる。また、すべての体験を終えた後、派遣された学生たちが、自分の体験についてパワーポイントでまとめ、YOKE主催で報告会が行われる。

このプログラムに参加した学生たちが体験を終えた後、一回りも二回りも成長していることを実感する。

（職員　北野順子）

◇派遣学生からの報告

活動先	独立行政法人国際協力機構横浜国際センター（JICA横浜）
活動期間	2017年8月7日（月）～9月8日（金）
活動内容	・PCM（途上国開発の際に必要とされるプロジェクト管理スキル）研修 ・業務補助 ・各種イベント補助 ・研修生サポート（宿泊施設の清掃等） ・図書館資料整理 ・研修オブザーブ

実施概要

2017年の夏休み期間中にJICA横浜にて約1か月間の実務体験を行った。

JICA横浜内において横浜市民向けに館内の企画展示や市内のイベント出展、外部の人に向けてJICA横浜とは何をしているところなのかなどの説明を行う市民参加協力課の業務に主に携わらせていただいた。具体的には、10月開催予定の横浜国際フェスタの展示物作成や館内に併設されている海外移住資料館で行われたイベントの補助などである。

そのほかにも違う事業部の業務にも少々関わらせていただき、研修生の宿泊施設の清掃や海外からの研修生の研修にオブザーバーとして参加させていただいた。

感想・活動を通して得た学び

当初期待していた業務内容とはまったく違っていて、正直拍子抜けした部分があった。国際協力を一元的に担っている JICA だから毎日外国人と関わったり、外国語を使用したりするのかと思っていたが、そのような機会はほとんどなかった。少し残念な気持ちもあったが、そのような場で実務体験を行ったことで「国際協力」の本当の在り方や違う側面を学ぶことができた。外国人との交流だけが国際協力ではなく、国内にいる人や自分の身近な人に海外のことを正しく伝えることも国際協力には必要不可欠なことなのだと学ぶことができた。

また、期待していた業務内容と異なっていたものの自身から学ぼう、何かを得ようと行動できたことも自分の新たな能力の発見につながった。

今後に向けて

今回の国際機関で実務体験を行ったことによって、今まで「国際協力」の一側面しか見てきていなかったことに気づいた。今後本格的になっていく就職活動においても、事業などの一側面だけでなく他の側面・関わり方があることを理解しながら自分に合う、かつ納得できる就職先を見つけられるようにしていきたいと思う。また、期待していたものと違っていても学びを得ようとした自身の努力する姿勢も客観的に評価し、今後自分の能力として自信を持っていきたいと思った。

（国際学部国際学科）

12　ボランティアファンド学生チャレンジ賞（育成・支援プログラム）

職員総括

2016 年度のボランティアファンド学生チャレンジ賞では、多くの団体が助成対象となった。従来からの「ジャンプアップ」部門に加え、単発イベント実施を対象とした「スタートアップ部門」が新設された。また、各助成団体に、丁寧にサポート内容を伝え、活動開始後も継続的に支援を行った。

この効果もあり、ボランティアセンターを活用して、ミーティング会場の教室借用申請や、活動に関する相談も増え、各団体との連携も深まったと感じる。これにより、自らの活動を積極的に行うだけでなく、三つの団体が、1 Day for Others のプログラム提供を行い、新入生のボランティア活動への一歩の導き手として活躍した。

2017 年度においても多くの団体が助成対象となり、現在活動している。各団体の活動が、社会課題を解決する一助になることを期待したい。　（職員　松本剛）

12.1　ボランティアファンド学生チャレンジ賞 2016 活動報告

「ボランティアファンド学生チャレンジ賞（通称：ボラチャレ）2016」は「社会課題にチャレンジ！」をテーマに募集し、以下のプロジェクトが採択された。各受賞団体に奨励金が授与され、2017 年 9 月末日までそれぞれの活動を行った。

●2016 年度助成企画【スタートアップ部門】

プロジェクト名	団体名
戸塚原宿フリーマーケット	明治学院大学ボランティアセンター　横浜地域活動
情熱だけで、どこまでできるのか？	舞台企画　Passion
民族言語保護	渡辺充ゼミ

●2016 年度助成企画【ジャンプアップ部門】

プロジェクト名	団体名
教室でできる！発達障がい児への支援を考えようプロジェクト　～未来の小学校教員へ伝えたい私たちの気づき～	教育発達学科　小林ゼミ
未来ワタシ委員会 vol.7	学生有志団体 Link up
DO FOR DOGS in 明学	MG ハロードッグ
GV（global village）	Habitat（ハビタット） MGU（エムジーユー）
小学校読み聞かせプロジェクト	おはなしポップコーン
明学防災プロジェクト	W（ワイ）ゼミ学生

シリア人と日本人の相互理解促進委員会	転原（てんげん）バンドゼミ
The Class for CCC（スリーシー） (Communication, Cooperation＆Confidence)	The Place for Children　かわさき

このうち、ジャンプアップ部門８団体の活動について、学生に報告してもらう。大学のゼミから学びを深めた教育支援活動や子どもの学習支援活動のほか、動物愛護活動や女性のライフキャリアを考えるイベントの開催、国際的な課題解決を目指すものなど、それぞれの団体が広い視野を持って多様な社会課題に向き合った。

◇冊子制作を終えて

プロジェクト名	教室でできる！発達障がい児への支援を考えようプロジェクト ～未来の小学校教員へ伝えたい私たちの気づき～
団体名	教育発達学科　小林ゼミ
企画の目的	小学校の教員を目指す同級生等に、私たちが日々のなかで問題意識をもっていた発達障がいのある子どもへの支援について理解啓発を促す

実施概要

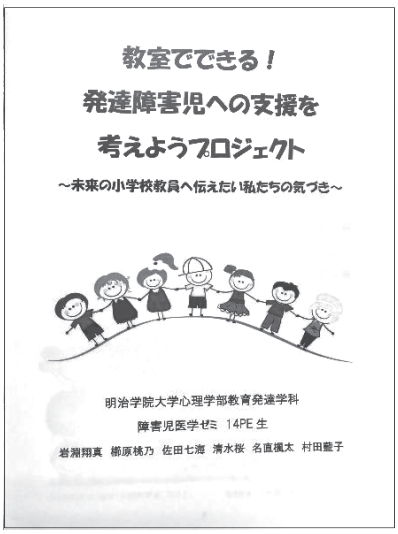
通常の学級に在籍する発達障がいのある子どもへの支援の考え方についての冊子（300 部）を企画制作し、学生等に配付した。制作にあたり、現職の小学校教員にインタビューをしたり、他学年のゼミ生に意見を求めたりして、より見やすく分かりやすいものを目指してきた。

〈主な活動の流れ〉

2016 年度 11 月	冊子項目検討	2017 年度　4 月	初稿完成
12・1 月	資料収集・草稿執筆	5・6・7 月	執筆内容検討
2 月	執筆内容検討		印刷打ち合わせ
3 月	OG インタビュー	8 月	配布計画検討、校正
		9 月	原稿完成、製本、配布（300 部）

感想・活動を通して得た学び

活動のなかで文章の修正に最も時間を費やし、自分たちの思いを一方的な押し付けでなく、提案する形で言葉にすることが難しいということを学んだ。“どうしたら他人事でなく捉えてもらえるか”同じ教育を学ぶ者に向けて、自分たちにも必要だと思ってもらえるように文体や体裁などを工夫することに最も力を注いだ。



冊子を同級生に配ってアンケートをとった結果、「特別支援教育が必要なことはわかっているが、どうしたらいいかわからなかったからぜひ参考にしたい」などの意見が多く寄せられた。改めて特別支援教育の必要性は感じていても実際にどうしたらいいのか分からず、不安を抱えている学生が多くいる現状を知ることができた。またそのような現状を知ることで、私たちが行った活動の必要性を感じることができた。

今後に向けて

冊子を下級生などにも配り進めることで多くのフィードバック、多角的な視点での感想を得られることが期待される。冊子を通じて多くの人と特別支援教育について考えていきたい。今回制作した冊子を卒業論文の資料として活用する学生もいる。また、港区の小学校の若手教員や教員を目指す学生が集う勉強会での講演も検討している。この冊子を読んだ人が特別支援教育を身近に感じられると想定し、またそれを望んでいる。作成した自分たちも、それぞれの進路先でこの学びを大いに活用していきたいと考えている。

（心理学部教育発達学科）

◇「結婚」「育児」を考える交流の場づくり

プロジェクト名	Kaco×Mira café ～未来ワタシ委員会 vol.7～
団体名	学生有志団体 Link up
企画の目的	世代間交流/女子学生向けキャリア発見企画

実施概要

2012 年より団体のコア企画である「未来ワタシ委員会」の第 7 弾。「女性のライフキャリアを考える」をメインテーマに、過去には社会人女子との交流会や自分を磨く女子学生向け講座を実施してきた。今回は女子学生が持つ「結婚」「育児」をはじめとする女性特有のライフイベントへの漠然とした不安を解消できる場を作りたいという思いから企画が始まった。これは「未来ワタシ委員会」実施回数増加にともない、メンバー内外から聞かれた声に応えるものであった。本企画はNPO 法人こまちぷらすさんにご協力いただき、戸塚地域で働く「お母さん」世代の方をゲストに招いた。世代を超えて行われたワークやトークから、それぞれが少し身近な未来の自分像を考える時間づくりを行った。

感想・活動を通して得た学び

私たちが扱った社会課題は、「女性のライフキャリアの多様化」だった。2012 年からという大変短い期間でありながらも、女性の生き方の理想像も現状も大きく変化している。Link up はこれまでも継続的かつ積極的に女性のライフプランを考える企画を行っており、私たちにとってこのことは身近であり大きな問題であった。そのため今回は「ワタシ目線で多様化を考える」を学生側のテーマとし、本企画に取り組んだ。また、ご協力いただいた方々は戸塚地域で働く「お母さん」世代。それぞれが過去を振り返ったり、未来を想像したりといった交流を通じて、より具体的な「ワタシ目線」を見つけることができる企画を考え、本申請企画に至った。活動を通じ、女性の生き方や理想像の変化は自分たちが体感するよりもものすごい速度で変化していると感じさせられた。トーク中にも「今、自分が親だったら」

や「今、自分が学生だったら」と考える展開も見られ、文字どおり過去と未来でのクロストークができ、自分のことを前向きに考えることができるようになったとの意見も聞かれた。「自分」と「他者」の対話の場から自分自身を見つめ直し、世代を超えた緩やかな交流の場を作ることができたということが最大の学びであった。

今後に向けて

「お母さん」世代の方をゲストに迎え、お話を伺うなかでさらに多様な生き方を実践する女性たちとも交流の場を持ちたいという意見が聞かれた。世代間交流だけではなく、多文化交流の視点を持ち、さらに範囲を広めた「未来ワタシ委員会」の実施や、団体での企画づくりに励んでいきたい。

（文学部芸術学科）

◇学生発信で犬の社会課題にチャレンジ

プロジェクト名	DO FOR DOGS in 明学
団体名	MG ハロードッグ
企画の目的	犬に関する社会問題を解決するため、NPO 団体でのボランティア活動や、啓発を目的としたイベントを開催する

実施概要

・動物愛護団体でのインターンシップ

犬の命が人間の身勝手さゆえに犠牲になる。それが「犬殺処分」である。人間が犬を簡単に扱えるモノとして捉えること、それがこの問題が生まれる大きな要因である。メンバーは、この問題を食い止め、犬殺処分ゼロを目指し活動している動物愛護団体で5日間のインターンシップを行った。殺処分を免れた犬たちやスタッフと関わり、この問題に取り組む重要性を感じた。

・啓発を目的としたイベント企画・開催

大学祭「戸塚まつり」で「犬が遊ぶおもちゃ」を来場者の方と一緒に作るイベントを企画・開催した。犬に関する社会問題が多くの人にとって身近であること、「自分事」として捉えてもらうために、ワークショップ形式で楽しく取り組める企画を考えた。

感想・活動を通して得た学び

・動物愛護団体でのインターンシップ

ペットショップで売っている犬や飼い犬としか接したことがなかったが、動物愛護団体にいる子犬たちが怯えるのを見て、一匹一匹育った環境がまったく異なることを学んだ。実際に現地に行かなければ体験できなかったことがたくさんあり、インターンシップに参加する意味を感じた。

・啓発を目的としたイベント企画・開催

犬が遊ぶおもちゃを来場者と一緒に作り、大盛況であった。大学内に初めて犬を連れてくることができ（ゲージに入れた状態）、多くの方が関心をもってくれた。活動を通して、犬が与える影響力はメンバーが予想していた以上に大きいことに驚いた。そして、犬に関する社会問題は、誰もが身近で関心を持ちやすいことに改めて気づかされた。

今後に向けて

インターンシップでは、講義や勉強会だけでは学ぶことができない犬殺処分の現状を知ることができた。また、イベント企画・開催では、来場者に犬に関する社会問題を提起することができ、メンバー自身も犬に関する社会問題の重要性を改めて感じた。活動を通して、この現状を多くの学生に伝えたいという気持ちが強まった。また、人間と身近な関係である犬をただ「かわいい存在」として捉えるのではなく彼らの背景にはさまざまな問題があることをより多くの学生に伝えたい。そして犬に関する社会問題を他人事ではなく、自分事として捉えてもらえるよう活動をし続けたい。

（学生メンバー　社会学部社会福祉学科）

◇「貧困」を学ぶ　～インドでの住居建築活動を通じて～

プロジェクト名	GV（global village）
団体名	Habitat MGU
企画の目的	住居に問題を抱えた家庭に、安心して暮らせる家を安価に提供する

実施概要

2017年3月6日～3月17日までの11日間、インドのバンガロールにて住居建築活動を行った。Habitat MGUに所属するメンバー13人で活動を行い、4軒の家を建てるプロジェクトに携わった。貯水庫を作ったり、家の基礎となる穴を掘ったり、セメントを使って家の壁となるブロックを積むといった作業を行った。

実際に現地に行く前後には、週に1～2回ミーティングを行った。ミーティングではインドの言葉を勉強したり、インドの貧困についての勉強会を行ったり、ディスカッションを行ったりした。訪問後には、横浜商業高校にて報告会を実施した。

感想・活動を通して得た学び

インドでは発展した街並みやビルも見られた一方、そのすぐそばで今にも崩れそうな家、家族が全員暮らすには狭い部屋など、私たちの想像をはるかに超える状況で生活をしている人々がいた。

家を建てる活動は、その家の持ち主となる人（ホームオーナー）と一緒に行う。私たちは支援する側で、ホームオーナーは支援される側である。ホームオーナーはかわいそうな状況に置かれていると想像

する人がほとんどだと思うし、私たちもそう思っていた。だが、一緒に建築活動をしていくうちに実はホームオーナーは今でも十分幸せだということに気づいた。幸せを私たちのものさしで決めてはいけないのだと学んだ。

今後に向けて

私たちの活動は世界から見たらとても小さなことだが、確かな一歩でもあると信じている。この活動が広がり、積み重なり、世界中の人々が安心して暮らせる家を持っている世界を目指して今後も活動していく。

（法学部法律学科）

◇子どもたちへの読み聞かせ活動

プロジェクト名	小学校読み聞かせプロジェクト
団体名	おはなしポップコーン
企画の目的	子どもたちへの読み聞かせを通して、本の楽しさや面白さに触れてもらう

実施概要

子どもたちの読書離れの現状を踏まえ、本の面白さや楽しさに触れてもらうために、小学校や学童での読み聞かせ活動を行った。1年間の活動を通して20クラス、合計500名以上の子どもたちに読み聞かせることができた。また夏には福島県相馬市を訪問し、読み聞かせと被災地視察を行った。

感想・活動を通して得た学び

活動を通して、読み聞かせや絵本の素晴らしさを改めて学んだ。また、子どもたちや相馬市の方々と絵本を通してつながることができたことは、一生の宝となる経験になった。

今後に向けて

たくさんの人々とのつながりを大切にし、活動を継続させていきたい。

（心理学部教育発達学科）

◇明学防災プロジェクト

プロジェクト名	明学防災プロジェクト
団体名	W ゼミ学生
企画の目的	明治学院大学の防災啓発

実施概要

2017年2月　熊本へ訪問
2017年5月～　東京都港区高輪地区総合支所協働推進課協働推進係の「たかなわ地域防災研究事業」へ企画検討会メンバーとして参加
2017年9月～　Wゼミ社会人メンバーへの防災についてのアンケート

感想・活動を通して得た学び

ボラチャレを通して、さまざまな方と出会うことができた。その出会いのなかで、同じ思いを共有したり、勉強させていただいたりと、豊かなかけがえのない経験をすることができた。また、誰かのために“一生懸命”な人たちとの出会いは、私たちにとって非常に良い刺激になった。関係者の皆さま、ありがとうございました。

今後に向けて

今後も引き続き、明治学院大学の学内の防災について、学び、考え、行動していきたいと考えている。また、くまモンクッキーについても携わっていきたい。そして、ボラチャレを通して出会えた方々とのご縁を大切にしていきたい。

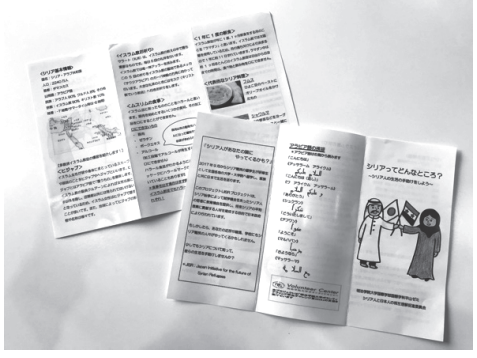
（社会学部社会福祉学科）

◇シリア難民のサポートと相互理解促進

プロジェクト名	シリア人と日本人の相互理解促進委員会
団体名	転原バンドゼミ
企画の目的	シリア難民の日本での生活の手助けと日本人のシリア人に対する理解の促進

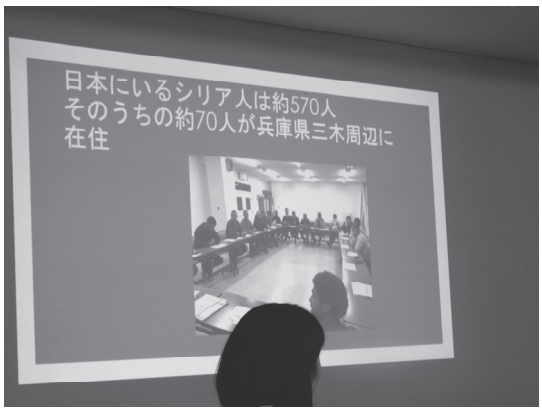
実施概要

日本で生活を送っているシリア人へのインタビュー・アラビア語学習・アンケートによる意識調査・パンフレット作成。



感想・活動を通して得た学び

シリア人の方が文化の違う日本で、どのように日本の文



化とシリアの文化に折り合いをつけて生活しているかということがわかった。パンフレットを作成することでシリア難民だけではなく日本在住の外国人がどのような問題を抱えていて、どのように彼らと上手く付き合っていくかを考えるよい機会になった。

また、日本人を対象としたシリア・イスラームに対しての意識調査としてアンケートを行ったことで、多くの日本人学生がシリア・イスラームに対してどのようなイメージを持っているのかということを把握できた。このアンケート結果から、日本人に対してどのようにアプローチすればシリア難民に対する理解を促せるかを考え、日本人向けパンフレットをより親しみやすいように、わかりやすいようにできるかを考えた。シリア人の方との対話やアラビア語学習を通じて、アンケートで得られたようなシリアへのイメージが薄れていたので、新たに考え直すきっかけになった。

今後に向けて

パンフレットは完成したが、配布段階まで至っていないので配布を中心に今後も活動を続けていく。配布場所として、横浜市内の NGO 団体などをはじめ、受け入れ大学等に交渉する予定である。また、配布後の影響について配布場所においてアンケート調査等を行いたいと思う。

さらに来年春から新たなプロジェクトとして、明治学院大学大学院においてもシリア難民の受け入れが始まるので、彼らのサポートをできるように努めていこうと思う。彼らが日本での生活において難民というステータスを背負うことなく、気兼ねなく過ごせるようにサポートしていきたい。

（国際学部国際学科）

（国際学部国際学科）

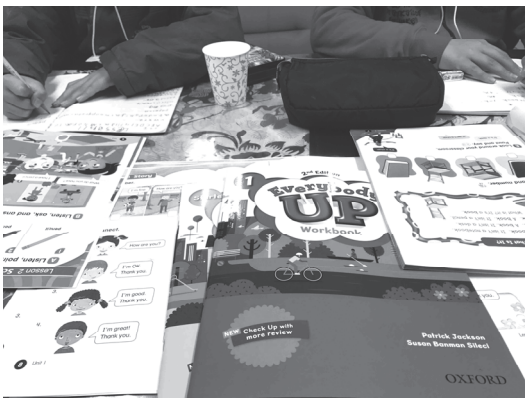
◇長期的な視点と学習支援

プロジェクト名	The Class for CCC（Communication, Cooperation＆Confidence）
団体名	The Place for Children かわさき
企画の目的	貧困解決

実施概要

フードバンクかわさきさんにご協力いただき、フードバンクかわさきさんのご支援を受けられているご家庭のお子様を対象に学習支援を行った。2017 年 1 月から 10 月までに月に 3 度のペースで一コマ 1.5 時間英語の授業をフードバンクかわさき事務所にて実施した。授業には英語圏の子どもたちが国語の勉強に使用するテキストを使用し、テキストでの学習範囲を同シリーズのワークを使い確認した。

感想・活動を通して得た学び



アルファベットから学んできた生徒が、今では簡単な会話やライティングができるようになり、何よりも、元は漠然としたイメージしか持っていなかった英語に対し、自ら学びを深めたいという気持ちを持つようになったことに、この活動の意義があったと感じる。まだまだ活動開始から日が浅いが、中学から本格的に始まる学校での授業に備えることで、他の教科や趣味に費やす時間の余裕が生まれ、それが将来彼ら自身の選択肢の幅が広がることに通ずるという長期的な目標をもち、今後も活動を行っていきたいと強く感じた。

活動するうえで最も苦戦したのは、生徒の募集であった。広告を作り配達に行くという手段をとったが、場所や時間の関係、また内容にも実際のニーズに即していないという問題があったかもしれない。ボランティア団体としては、今後活動を続けていくうえで活動の範囲を広げ、より多くの子どもたちと活動したいと考えているが、これが非常に難しいことであると学ぶことができた。ただ、この運営の難しさと楽しさを知る機会を与えていただいたことは、必ず今後の糧になるだろうと確信している。

今後に向けて

まずは、現在活動場所がフードバンクかわさき事務所の一か所のみであるため、その近くに住む生徒しか通うことが難しいという問題を解決するため、津田山駅近くのフリースペースや、以前フードバンクかわさきさんのスタッフの方からお話があった鶴見の方面にある児童館などの使用を検討していく。また、今回の反省を踏まえ、より多くの方と直接話をできるような広報の方法を検討したい。まずはこのような取り組みを進めることで生徒を募集し教室を作り、The Place for Children かわさきの組織化を行い今後も活動を継続していきたい。学習支援はすぐに結果が出るものではなく、進学後かもしれないし、就職後に出るのかもしれない。結果が現れるのはかなり遠い未来かもしれないが、活動を行った結果として最終的に子どもたちの人生がさらに充実していくように、現時点のものではあるが、自信と根拠を持って活動をしていきたいと思う。

（文学部英文学科）

12.2　ボランティアファンド学生チャレンジ賞 2017 採択団体一覧

2017 年度の募集は「社会課題にチャレンジ！」をテーマとし、書類審査・面談を経て六つのプロジェクトが採択された。各受賞団体に奨励金が授与され、2018 年 9 月末日までそれぞれの活動を行う。各団体は、部門によって活動報告会での発表や活動報告書を提出し、今後につなげるため自分たちの活動を振り返ることが求められる。

●2017 年度助成企画【スタートアップ部門】

プロジェクト名	団体名
FYS ライブパフォーマンス	For Your Smile
１日でできる手話講座	ハム
Do for 子ども食堂	E.S.S.地域貢献部

●2017 年度助成企画【ジャンプアップ部門】

プロジェクト名	団体名
人と犬、つなぎ・つながるプロジェクト	MG ハロードッグ
学生のチカラで、笑顔“ニュンニャム”を守ろう、広げよう！	ニュンニャム
三つ折りパンフレット	明治学院大学任意団体 NPO 法人　JUNKO Association

13 Gakuvo Style Fund（育成・支援プログラム）

職員総括

Gakuvo Style Fund は 4 年目を迎えた。募集から審査、採択、活動報告という流れも軌道に乗るとともに課題も見えてきたなかで、新たな取り組みに挑戦した。

第 3 回助成団体は、2017 年 5 月 14 日（日）に日本財団本部で開催された活動報告会において活動報告を行った。この日に集まったのは採択されながら活動が行き詰まり辞退した 1 団体を除く 39 団体であった。この報告会に先立ち、一つ目の新たな取り組みとして当ファンドのスタッフがすべての団体を訪問し、活動のようすやメンバーの横顔など取材を試みた。取材の成果は報告会の昼休みに各団体活動を 1 分に編集した映像として紹介された。できあがった映像への反応はおおむね良好であったが、取材時期が年度をまたがったために、卒業した学生や指導教員への取材スケジュール確保に苦慮したと団体、取材者双方から声が挙がった。

また二つ目の取り組みとして 1 年間の活動に敬意を払い、多様な角度から表彰を行った。WEB 報告が一番多かった、逆に一番少なかった団体、審査時からもっとも飛躍した団体、一番暑いところで活動した団体、報告会で頑張った団体などである。よく頑張った団体だけでなく、もっと当ファンドを活用しても良かったんじゃないか？と叱咤激励も含めた表彰は会場を大いに和ませるものとなった。

活動報告会開催後は第 4 回助成団体の選考である。2017 年 7 月 30 日（日）に開催されたプレゼン審査会には、例年どおり一次審査を通過した「こらぼ」「ばかぼ」の団体だけでなく、書類選考で採択された「ゆるぼ」の団体も参加した。これも新たな取り組みである。これは「ゆるぼ」の団体にも Gakuvo Style Fund の雰囲気を感じ取ってもらうことと、採択団体に課している報告や事務手続きを周知させるためであった。審査会の最大のハイライトは 90 秒のプレゼンテーションであることは変わらない。

選考の結果、「ゆるぼ」も含め 56 団体が助成団体として採択された。このなかには本学の団体も 2 団体含まれている。活動のようすは以下の URL から閲覧可能である。こちらも新たな取り組みとして、新着報告をページ最上段に掲げ、リアルタイムで見ていただけるようにした。

http://gakuvo.jp/katsudou2017/

2018 年 3 月現在、既に活動を終えた団体からは活動報告関連書類が届いている。活動が頓挫することなくすべての団体が活動報告会に顔を揃えることを事務局として願っている。　（職員　波多野洋行）

●2017 年度「Gakuvo Style Fund」の主な活動

日にち	内容
5/14（日）	第 3 回活動報告会
6/1（木）～6/15（木）	第 4 回募集期間
6/16（金）～7/11（火）	第 4 回書類審査期間
7/11（火）	第 4 回プレゼン審査会出場団体発表（「こらぼ」「ばかぼ」のみ）
7/30（日）	第 4 回プレゼン審査会（「こらぼ」「ばかぼ」のみ）
8/4（金）	第 4 回審査結果発表
8 月下旬	第 4 回採択団体の指定の口座宛に協力金振込
8 月～2018 年 3 月	第 4 回活動期間／活動ウェブ報告機関
2018 年 5 月	第 4 回活動報告会

Ⅱ　新入生アンケート

新入生のボランティア意識とセンターの課題
－「2017 年度　新入生ボランティア活動アンケート」

1. 調査の概要と結論

ボランティアセンターでは、2000 年度から、新入生のボランティアへの意識などを把握するためのアンケートを毎年 4 月の学科ガイダンス時に実施している。2017 年度調査では、入学者総数 3,205 人の 88.9%にあたる 2,849 人から回答を得た。前年度の回答率に比してやや下がったとはいえ、十分な回収率といってよいだろう。ただし、たとえば回答者の性別を見ると女性 65.6%、男性 34.4%と、女性の回答割合が高く、他方で女性の方がボランティアを経験している割合などが高いので、本調査の結果がややボランティアへの関心を高めに示す傾向があると考えられる。

例年、この調査における新入生のボランティアへの関心は全体に高いのだが、本年度は、近年に比べても高くなっている。たとえば、大学時代にボランティア活動を通して学ぶことに「大いに興味がある」（20.4%）「興味がある」（53.0%）と回答した学生の割合を足すと 73.4%になる。この合計した数字は、昨年度、一昨年度いずれも 64.5%だった。同じく「大学時代にボランティア活動に参加したい」と思う学生数も、2,176 人（76.4%）と多い（前年度は 2,158 人・75.2%）。

本学でのボランティア経験への導入的な機能を果たしている「1 Day for Others」への参加希望者は、「参加する」291 人（10.2%）、「できれば参加してみたい」1,132 人（39.7%）、「情報を確認してから参加を考える」1,197 人（42.0%）となっている。質問文が昨年度から少し変わっているので単純には比べられないが、参加意識が高まっている傾向があるともいえる。

昨年度プログラムが開始しアンケート項目にも加えられた「明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム」への参加希望については、「参加する」と答えた学生が 129 人（4.5%）と、前年度 69 人（2.4%）からは多少増えている。「できれば参加してみたい」は 898 人（31.5%）、「内容を確認してから参加を考える」は 1,523 人（53.5%）と、大半の学生が前向きではあるが必ずしも積極的ではない。質問文が少し異なるため単純には比較できないが、だいたいのところは昨年度と同様である。

上記の 2 問について「情報（あるいは内容）を確認してから考える」という割合が高いこととの関連で気になることとして、「明治学院大学のボランティア活動について知っていましたか」という質問への答えは、「はい」51.1%（1,456 人）、「いいえ」48.8%（1,390 人）とほぼ拮抗しており、かつ、昨年度には 54.4%が肯定だったのに比べると、認知度が減っている。とくに「1 Day for Others」や「明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム」は 1 年生からの参加を念頭に企画され、また、その後の多様な学習・研究やボランティア活動などに展開していくことが期待されている。参加を促進しようとするならば、入学前から入学直後の時期にかけて、これらの活動の内容や成果を含めた、より効果的な広報に努めることも考えられてよいだろう。

2．調査結果

（1）大学入学以前のボランティア活動経験

大学入学前のボランティア活動への参加については、参加経験のある人が 45.4%（1,294 人）、ない人が 54.6%（1,555 人）と、わずかに「ない」が上回っている。この 10 年の経年変化をみると、2009 年から 12 年まで減少傾向にあったものが、2013 年から増加に転じて 2015 年には参加ありが 44.2%だった。

2016 年には 40.0%に一度減ったものが元に戻ったといえるだろう。

男女別では、参加経験のある割合が女性 50.3%（939 人）、男性 36.2%（355 人）と、女性の方が明らかに多い。後述のように、このことは今後のボランティア参加への積極性ともかかわる。

活動の内訳をみると、複数回答を含めた延べ回答数を母数として（N＝1,754）、「環境」（21.7%）、「社会福祉」（20.5%）、「子ども」（18.9%）、「まちづくり」（11.6%）の順である。順位は年度によって入れ替わるものの、この 4 分野が多くを占める傾向はこの数年来変わっていない。ちなみに、10%以下の分野には、「ボランティア活動支援」、「国際」、「スポーツ」などがある。

（2）大学におけるボランティア活動に関する希望

ボランティア活動を通して学ぶことへの興味は、「大いに興味がある」581 人（20.4%）、「ある」1,511 人（53.0%）、「どちらともいえない」588 人（20.6%）、「あまりない」135 人（4.7%）、「全くない」24 人（0.8%）と、大きく興味ある方に偏っている。ただし、ボランティア活動に関するニュースへの興味になると、「大いに興味がある」305 人（10.7%）、「ある」1,328 人（46.6%）、「どちらともいえない」959 人（33.7%）と、より中間的な回答の割合が増える。

クロス集計を見ると、まず男女差が明確で、女性は「大いに興味ある」459 人（24.6%）、「ある」1,049 人（56.2%）と 8 割が興味を示している。男性では、「大いに興味ある」122 人（12.4%）、「ある」462 人（47.1%）と、その合計が 6 割程度である。また、男女ともに入学前にボランティア活動を経験している方が、大学でのボランティアへの期待・関心が高い。たとえば、男性のうち、ボランティア活動の参加経験がある人だけをみると「大いに興味ある」62 人（17.5%）、「ある」197 人（56.5%）と、あわせて 7 割を超える人が興味を示す。

参加したい理由は、第一位が「新しい出会いや経験を得たい」（56.3%）で、唯一「参加したい」人の過半数が選択している。以下、「ものの見方や考え方を広めたい」(43.2%)、「知識を広げたい」（39.7%）、「地域や人のために役立ちたい」（36.2%）、「授業では得られないものを学びたい」（35.7%）などと続く。新たなものへの希望という傾向も従来から変わっていない。

（3）関心分野

多くの新入生が複数の分野の活動に関心を示している。「どのようなボランティア活動に関心があるか」複数回答で質問した延べ回答数は、分野数で 11,152 となった（「異文化交流」と「国際協力」の両方に関心があると答えても「国際分野」一つとして数えている）。全有効回答者数で平均したとしても一人につき 3〜4 分野が挙げられた計算になる。関心のあるボランティア活動分野は、上位から順に「国際」（14.9%）、「まちづくり」（11.4%）、「環境」（11.1%）、「子ども」（10.9%）、「文化」（10.7%）、「スポーツ」（8.3%）、「被災地支援」（7.8%）、「社会起業・社会貢献」（7.8%）、「社会福祉」（6.4%）、「心理」（5.9%）、「ボランティア活動支援」（4.8%）と続く（数字は延べ回答数を母数とする、N＝11,152）。各分野の内訳まで含めて、現在、ボランティアセンターがサポートしている活動については、濃淡の差はあるにしても、ほぼすべてに一定の関心が寄せられていることが分かる。

その意味でのマッチングは可能だと思われるが、上記の通り、自分にあったボランティア活動のために積極的に情報などを求めて来る新入生は多くない。そこでの情報提供のあり方が問われるだろう。また、ボランティア活動に関する新しい経験や出会いが活動場所や名称によってもたらされるものでないことは当然だが、その活動の内容や、自分自身にとっての意味を理解するためには、活動前後の考察やコミュニケーションも大事になる。たとえば、関心分野の第一位を占めた「国際」分野の活動内容内訳

をみると、「異文化交流」「国際協力」がとくに多く、「翻訳」「通訳」「日本語サポート」「在日外国人支援」などはあまり選択されていない。だが、たとえば「在日外国人支援」と「異文化交流」とが密接につながっていることもいうまでもない。現状では、それに気づくためのちょっとした情報が足りていない可能性がある。さらにいえば、参加後に、異文化および異文化交流の多様性などについて考え、さらに新しい可能性を感じる機会があると、ボランティア活動と新入生の生活・学習との間がより密接になるのではないか。

ちなみに、「ボランティア活動に参加したくない」理由は、「時間がない」（44.8%）が「関心がない」（25.7%）以下を大きく引き離した第一位であり、この傾向はこの数年拡大しているように見える。「時間がない」は、ボランティア活動に関心をもつ学生にも共通することだろう。

（4）ボランティア活動の認知度

概要でも述べた通り、「明治学院大学のボランティア活動について知っていたか」という問いへの肯定は 51.1%（1,456 人）、否定は 48.8%（1,390 人）とほぼ拮抗している。2015 年度まで「知っていた」割合が上昇し続けていたが、2016 年度に続いて減少傾向を示したことになる。特別入試に比べて一般入試による入学者が増えれば入学直前まで受験勉強に忙しかった新入生がそれだけ増えるので、わずかな変化を気にする意味は少ないが、それだけ、新学期開始後の学内における情報提供が必要にはなる。

ボランティア活動への情報源は、「大学ホームページ」が 62.5%で、以下、「オープンキャンパス」31.7%、「先輩から」10.0%と、その差が大きい。周知をはかるには大学全体の広報活動との連携が効果的になるだろう。

（5）「1 Day for Others」（1 日社会貢献プログラム）の参加希望

「1 Day for Others」に「参加してみようと思うか」という質問への回答は、「参加する」291 人（10.2%）、「できれば参加してみたい」1,132 人（39.7%）、「情報を確認してから参加を考える」1,197 人（42.0%）、「参加しない」167 人（5.9%）、未回答 62 人（2.2%）であった。これまでと同様、積極的ではないが前向きな姿勢がうかがえる。選択肢の文言が前年度から少し変わったが、同じ文言の「参加する」にかぎってみると前年度の 189 人（6.6%）から増えている。

（6）「明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム」への参加希望

質問文は、「昨年度より明治学院大学では、大学の授業とボランティア実践を結びつけて、問題発見・開発力やコミュニケーション力を高める「明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム」（3 年で修了）を実施しています。このプログラムに参加しようと思いますか。」というものである。昨年から開始したプログラムのため数年間は質問文の文面が少しずつ変化すると思われ、また、そのワーディングが回答に与える影響もあり得るので、全文を紹介しておく。

前年度は、「参加する」69 人（2.4%）、「可能なら参加してみたい」687 人（23.9%）、「情報を確認してから参加を考える」1,803 人（62.8%）、「参加しない」269 人（9.4%）であった。

今年度は、「参加する」129 人（4.5%）、「できれば参加してみたい」898 人（31.5%）、「内容を確認してから参加を考える」1,523 人（53.5%）、「参加しない」243 人（8.5%）となっている。

（ボランティアセンター長補佐　藤川賢）

Ⅲ　ボランティアセンター資料

ボランティアセンターの活動にご協力くださった皆さま

・明治学院大学同窓会
・明治学院大学保証人会
・明治学院同窓会ウィメンズクラブ「くらら会」
・明治学院大学戸塚まつり準備会
・明治学院大学ハロプロ研究会
・個人１名（氏名非公表）

上記のみなさまよりご支援を頂戴しました。

2017 年度マスコミ報道一覧

日付	媒体名	内容
5月10日	広報よこはま 戸塚区版（5月号・8面）	「明治学院大学　学生ボランティアが活発に活動を行っています ・とつか宿場まつりに参加 ・地域子育て支援拠点でのボランティア活動　ほか」
7月19日	東海新報	「夏祭り気分味わう　陸前高田　きらりんきっず夕涼み会」
9月	NHK「地域アーカイブス」	岩手県大槌町吉里吉里地区での活動が映像配信 「学生たちが担う息の長いボランティア活動」 （明日へ　支えあおう　復興サポート）
3月 7日	時事ドットコム	「被災地方言、消滅の危機＝避難で若年層流出　－「継承」取り組む動き・東日本大震災７年」 ※事例として吉里吉里カルタが取り上げられる
3月12日	日本経済新聞	「3・11　神奈川で考える　関連イベント相次ぐ」

各年度の情報はボランティアセンターウェブサイトでご確認いただけます。
https://www.meijigakuin.ac.jp/volunteer/introduction/media/

各委員一覧

2017年度ボランティアセンター運営委員

野　沢　慎　司　(副学長)【委員長】
松　本　一　裕　(文学部)
鵜　殿　博　喜　(経済学部)
深　谷　美　枝　(社会学部)
河　野　奈　月　(法学部)
齋　藤　百合子　(国際学部)
杉　山　雅　俊　(心理学部)
原　田　勝　広　(教養教育センター)
岡　　伸　一　(宗教部長)
大　平　浩　二　(教務部長)
亀ヶ谷　純　一　(学生部長)
武　村　美津代　(事務局長)
杉　山　恵理子　(センター長)
藤　川　　賢　(センター長補佐)
猪　瀬　浩　平　(センター長補佐)
中　原　美　香　(ボランティアコーディネーター)
田　口　めぐみ　(ボランティアコーディネーター)

2017年度ボランティアセンタースタッフ

杉　山　恵理子　(センター長)
藤　川　　賢　(センター長補佐)
猪　瀬　浩　平　(センター長補佐)
波多野　洋　行　(次長)
中　原　美　香　(ボランティアコーディネーター)
田　口　めぐみ　(ボランティアコーディネーター)
高　橋　千　尋　(課長)
松　本　　剛
青　木　洋　治
北　野　順　子
石　塚　美　香
宮　本　晃　子
町　田　理　美
大田垣　美　穂
蘆　田　早　帆

2017年度ボランティア活動推進委員

杉　山　恵理子　(センター長)【委員長】
可　部　州　彦　(有識者)
谷　口　浩　一　(学外有識者)
唐　木　富士子　(学外有識者)
藤　川　　賢　(センター長補佐)
猪　瀬　浩　平　(センター長補佐)
中　原　美　香　(ボランティアコーディネーター)

明治学院大学ボランティアセンター規程

2001年 7月18日　大学評議会承認
2004年 5月19日　大学評議会承認
2004年10月20日　大学評議会承認
2005年10月 7日　常務理事会承認
2005年12月 9日　常務理事会承認
2006年 1月13日　常務理事会承認
2006年 7月14日　常務理事会承認
2010年 3月12日　常務理事会承認
2014年 3月14日　常務理事会承認

（設置）

第１条　明治学院大学(以下,「本学」という。)に明治学院大学ボランティアセンター（以下「センター」という。）を置く。

（目的）

第２条　センターは，共通教育機関として,「他者への貢献」(Do for Others)の精神にのっとり，ボランティア活動を通じた人間教育を行うことを以て目的とする。

（業務）

第３条　センターは，前条の目的を達成するため，以下の業務を行う。

⑴ サービス・ラーニングプログラムの企画，実施
⑵ 学生等に対するボランティアの立ち上げなど，学生の自主的活動の支援と助言
⑶ 地域や国際社会への貢献を目指し，社会との協働によるボランティアプログラムの開発
⑷ 学内外のボランティア活動に関する情報収集と学生への提供及び相談への対応
⑸ 教職員への情報提供とボランティア活動参加に関する機会提供
⑹ 本学におけるボランティア関連科目に関する協力
⑺ その他，学生等のボランティア活動の促進に必要な業務

（活動）

第４条　センターは，第２条の目的を達成するため，以下の学生の活動を支援する。

⑴ キャンパス周辺の地域に貢献する活動
⑵ ボランティア入門プログラムに伴う活動
⑶ 地震，津波，台風，洪水など自然災害に伴う被災地支援活動
⑷ 海外でのボランティア等に関する活動
⑸ 学外の人道支援機関，特定非営利活動法人（ＮＰＯ），企業等との連携活動
⑹ ボランティア参加への啓発活動
⑺ その他

（運営委員会規程）

第５条　センターの組織および運営に関する重要事項を審議するため，明治学院大学ボランティアセンター運営委員会を置く。

2　センター運営委員会規程は，これを別に定める。

（構成）

第6条　センターには次の職員を置く。

⑴ センター長　1名

⑵ センター長補佐　若干名

⑶ ボランティアコーディネーター　2名

⑷ 非常勤ボランティアコーディネーター　若干名

⑸ 事務職員　若干名

（センター長）

第7条　センター長は本学専任教員の中から，学長が任命する。その任期は2年とし，再任を妨げない。

2　センター長は，センターの業務を統括する。

（センター長補佐）

第8条　センター長補佐は，本学専任教員の中から，センター長の推薦に基づき学長が任命する。その任期は2年とし，再任を妨げない。

2　センター長補佐は，センター長の業務を補佐する。

（ボランティアコーディネーター）

第9条　ボランティアコーディネーターの任用等は，「ボランティアコーディネーター任用等に関する規程」による。

2　非常勤ボランティアコーディネーターの任用等は，「非常勤ボランティアコーディネーター任用等に関する規程」による。

（評価・評価委員会）

第10条　ボランティアコーディネーターは，3年ごとにセンター長の設置する評価委員会による評価を受ける。センター長は，その結果を学長に報告する。

2　非常勤ボランティアコーディネーターは，契約更新時にセンター長が設置する評価委員会による評価を受ける。センター長はその結果を学長に報告する。

3　前2項に基づき設置する評価委員会は，副学長，学生部長，センター長，センター長補佐，大学事務局長，その他センター長が指名し運営委員会の承認を得た者から構成する。

（活動推進委員会）

第11条　センターに，その事業の円滑な遂行を図るためボランティア活動推進委員会（以下「推進委員会」という。）を置く。

2　推進委員会は，センター長の諮問に応じて助言または提案を行い，推進委員によって構成される。

3　前項の推進委員は，ボランティア活動に識見を有する専任教職員，学生等，およびボランティア活動についての学外の有識者・実務家（若干名）からなり，その任期は2年とし，再任を妨げない。専任教職員にあっては，所属長の推薦により，その他の者にあっては運営委員会の議を経て，センター長が委嘱する。

4　センター長は，必要に応じて推進委員以外の者を陪席させることができる。

（学生メンバー）

第12条　センターの業務の遂行にあたって，センター長は，学生の参加と協力を求めることができる。

（規程の改廃）

第13条　本規程の改廃は，センター運営委員会の議を経て大学評議会および常務理事会の承認を得なければならない。

付　則

1　この規程は，2001 年 7 月 18 日から施行する。

2　この規程の施行により，「明治学院大学ボランティア・センター暫定規程」は廃止する。

3　2002 年 4 月 1 日一部改正施行（第 3 条第 2 項，教養教育センター設置による。）

4　2004 年 4 月 1 日一部改正施行（第 3 条法務職研究科設置および委員にセンター長補佐追加による。）

5　2004 年 8 月 1 日一部改正施行（第 4 条ボランティア・コーディネーター，事務職員数の変更による。）

6　2005 年 11 月 1 日一部改正施行（第 7 条ボランティア・コーディネーター任用等に関する規程の新設による。第 8 条評価・評価委員会，新設）

7　2006 年 1 月 1 日一部改正施行（コーディネーターを運営委員会委員とする。非常勤コーディネーターを新設する。）

8　2006 年 1 月 1 日一部改正施行（第 7 条 2 項非常勤ボランティア・コーディネーター任用等に関する規程の新設による。）

9　2006 年 4 月 1 日一部改正施行（第 3 条事務局職制変更による）

10　2010 年 4 月 1 日一部改正施行(基本理念作成委員会の答申に基づき，第 2 条目的および第 3 条業務を見直し，第 4 条運営委員会規程を別途新設し本規程から削除，第 5 条センター長補佐の人数を変更，第 7 条センター長補佐は専任教員の中から選する，第 9 条 2 項に非常勤ボランティアコーディネーターの評価を明記，3 項の評価委員会構成メンバーにセンター長補佐を追加，第 10 条 4 項推進委員会参加メンバーを弾力化する条文を追加)。

11　この規程は，2014 年 4 月 1 日から施行する。（第 3 条 3 項，第 4 条学生の活動内容の追加，第 5 条 3 項の削除，第 11 条 2 項，第 11 条 3 項推進委員の学外有識者・実務家を 2 名から若干名へ変更，第 12 条見出し変更）

明治学院大学ボランティアセンター報告書　第 14 号　2017

発　　行　2018 年 7 月 25 日
発 行 者　明治学院大学ボランティアセンター
〒108-8636　東京都港区白金台 1-2-37
明治学院大学白金キャンパス 10 号館 1F
TEL　03-5421-5131　　FAX　03-5421-5144
〒244-8539　神奈川県横浜市戸塚区上倉田町 1518
明治学院大学横浜キャンパス 4 号館 1F
TEL・FAX　045-863-2056
E-mail　voluntee@mail.meijigakuin.ac.jp
https://www.meijigakuin.ac.jp/volunteer/
印　　刷　株式会社豊明社

本報告書の一部または全部を無断で複製、転載、販売、
ネットワークにより転送することを禁じます。